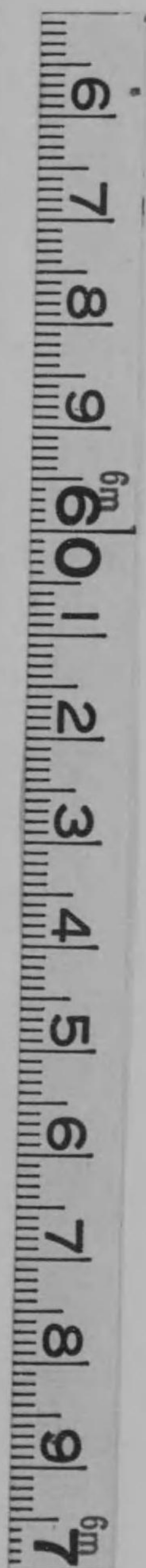


384

144



始



南洋鵬航記



384-144



深見麗水著

南洋鵬航記

海陸運輸時報社發行





序

茫漠なる南洋の沃土に、天與の寶庫を開發するは、是れ我帝國民の使命なり、今や帝國民は世界の氣勢に鑑み徒らに國內に蠢動して、蝸牛角上の争を事とするの時に非ず、覺醒一番以て海外發展の雄圖を敢行せざる可からず、此時に際し連年繼續せる歐洲の戰亂は、偶々帝國産業の勃興に、絶好の機會を與へ、東亞南洋方面悉く我商品の需要地と爲れり、此良好なる華客を永遠に保持し、且つ彼地に我國民の企業立脚の地盤を強固ならしむるは、當に時勢の要求する緊急事項なりとす、而して其目的を貫徹する第一手段は、先づ彼地の事情を研鑽し、審かに之を知悉するに在り

本書の著者深見麗水君亦茲に感ずる所あり、曩に大阪商船會社汽船浙江丸一等運轉士の職に在るや、屢々南洋に航行し、職務の

餘暇彼地の事情を精査し、其記事積んで堆を成す、頃日先輩諸氏の勸に従ひ、之を編輯して南洋鵬航記と題名し以て刊行せられんごす、試に其稿を閲するに、南洋地方に於ける地理、産業、風俗習慣等に關する珍談、奇話、雜然として紙上に活躍し、趣味津々、一讀頓に爽快を覺ゆ、寔に近來の快著にして南洋事情の研究上、好箇の參考資料と爲すに足るべし、庶幾くは此書を讀む者、益々奮進して南洋寶庫の開發を企圖せられんことを

大正七年八月下旬

臺灣、臺北城内、綠蔭風薫る處に於て

角 皇 洲 識

序

晚近南洋を談ずるもの甚多し、然れども其親しく南洋に到るご五回の多きに及ぶもの深見君の如きは少なし、余曾て南遊の擧あり浙江丸に搭じて遍なく瓜哇を周る、當時君は同船の運轉士たりき而して君が周密なる觀察眼によりて所謂南洋日誌は編まれつ、ありしなり、頃者君數回の紀行を綴りて予に示し叙を乞ふ切なり、繙きて之を見るに其航海業者ごしての立脚點に筆を起し、多く經驗したる事實を陳述せり、殊に附録ごして掲ぐる所は有用なる彼地の法令にして志あるもの、正に一見すべき處也、此書上梓せらる、の日其江湖を益する尠からざる可しと云爾

臺灣總督府 參事官 法學士 片山秀太郎 識

自序

此書は、著者が初めて南洋に航海せし際、單に日誌として記載せしものを、其後數回渡航の後訂正増補して南洋鵬航記としたものである。

濠洲には早くより郵船會社の定期航路ありしも瓜哇方面には漸く五、六年前政府補助の下に南洋郵船組の成立就航を見し位にて、其後大阪商船會社に於ても、臺灣總督府命令の下に同じく南洋航路を開始し、現今にては合計七隻の本邦定期船と外に數隻の外國船とが往復するに至つた。けれども南洋との交通開けしは尙ほ昨今の事に屬し未だ相互に理解せられざるもの多く且つ蘭領東印度に於ける日本人の數は甚だ僅少なるものにて、歷史上、地理上吾人と因縁淺からざる南洋に於て、日本人勢力の微々たる寧ろ不思議を感じる位である。

今や歐洲戰亂に際し、從來南洋に一大勢力を有せし獨逸は全く其後を斷ち、其他の列國と雖も東洋に手を延ばすの暇なきを以て、唯支那商人の外一の競争者あるなく實に日本の一人舞臺とも云ふべき有様にて吾人の南洋發展にはまたなき好機會である。加

ふるに南洋の地は到る所土地豊饒にして産物頗る多く、而も無限の寶庫は今尙ほ未開の蕃地に秘藏せられて吾人の渡來開發を待ちつゝ有るの現状なれば、其前途の多望なること洋々春海の如きものがある。

余幸ひに南洋に航海すること茲に數回、親しく各地を踏査見聞し、幾多の人士に接し微弱乍らも其一斑を知るを得たり。依て此際南洋に關する記事を草するも亦幾分新に南洋研究に志す人士の參考にもならんかとの婆心にて、先輩の勸めに因り淺學菲才をも省みず之を公にした次第である。

書中、瓜哇に啞の旅行を爲して失敗を演せし奇談も有れば、又如何にも南洋通らしき事を臚列して居る所もあり、記事の精粗其歩調を異にし一見奇異の感あるも、此は前述の如く余が南洋航海日誌の訂正増補に過ぎざれば素より完璧を期し難し。乞ふ讀者諸君之を諒とせられんことを。

大正七年六月

著者識

目次

五月十七日	一
香港出帆		
五月十八日	一
「ブラタス」島		
五月十九日	二
大洋の航海、天文学と航海術		
五月二十日	四
菲律賓近海		
五月二十二日	四
平穩なる航海		
五月二十三日	五
「サンダカン」入港、「サンダカン」市街、名物のお國婆さん、公許の賭場、悠長な る法廷、海上家屋、大便所は水族館 會社組織の「ボルネオ」政府、野獸の多き英 領北「ボルネオ」、盛大なる久原護謨園、「タワオ」村		

五月二十四日……………一五
 炎暑を忘るゝ南洋の航海、乗組火夫は焦熱地獄
 五月二十六日……………一六
 船内の素人斬髪
 五月二十七日……………一六
 赤道通過、赤道祭
 五月二十八日……………一七
 平穩なる海上、颶風の起らぬ赤道地帯
 五月二十九日……………一八
 「バタビヤ」港着、所謂南洋、和蘭の寶庫、大阪の築港に似たる「バタビヤ」港、「エムデン」の給炭船、月夜の合奏
 五月三十日……………二二
 「バタビヤ」、「ウエルテフ、レーデン」、「タンジョン、ブリオク」陸の旅行、濁水

中に土人の行水、爪哇銀貨の失敗、廣茫たる公園、官營の質屋、博物館、瀟洒たる南洋の家、日本人に似た男、爪哇の商權を掌握せる支那商人、全盛を極めし日本商品、濃厚芳醇なる爪哇「コーヒー」、不潔なる汽車

五月三十一日……………四五
 日本よりの輸入品、和蘭の恐慌
 六月一日……………四九
 呑氣なる土人の生活、午睡の習慣、兵營内の妻帯生活
 六月二日……………五五
 「バタビヤ」出帆、「バイテンゾルク」、「ジャガタラ」文
 六月三日……………六四
 「サマラン」入港、瓜哇富士、有望なる南洋の農業、氣候の概略
 六月四日……………七二
 「サマラン」出帆

六月五日……………七三

「スラバヤ」入港、門司に似たる「スラバヤ」港、森の中に軍艦の橋頭

六月六日……………七六

怠惰にして貯蓄心なき瓜哇の土人、痴鈍にして慇懃なる瓜哇の土人

六月七日……………八〇

土人の人夫

六月九日……………八二

「スラバヤ」見物、市場内の買物、瓜哇の便所、名物瓜哇更紗、不快なる市街鐵道

六月十日……………九一

幼稚なる漁業、鹽魚の需用、土人の食事

六月十一日……………九三

珍らしき果物(「マンゴスチーン」、「バナナ」椰子、「ドリアン」「ナンカ」)

六月十二日……………一〇三

南洋に於ける疫病

六月十四日……………一〇五

「スラバヤ」出帆、「プロボリンゴ」入港、福德圓滿なる瓜哇人

六月十五日……………一〇六

砂糖の積入

六月十六日……………一〇七

馬來語

六月十八日……………一〇八

「プロボリンゴ」出帆、風光明媚なる瓜哇の田舎、巖窟の裡に食用の燕巢

六月廿日……………一一〇

「セレベス」島、「セレベス」の土人

50

六月廿一日……………一一二

「マカッサ」入港、珍らしき港、「ゴアレ」王の蟄居、理想の市街、「タロー」河、

土人の家屋、奇習「アモック」
 六月二十二日……………一二一
 「マカツサー」出帆、麗しき鳥、無盡藏なる「ホル子オ」の鑛山
 六月二十四日……………一二四
 再び赤道通過
 六月二十五日……………一二五
 旅順丸との競走
 六月二十六日……………一二七
 「サンダカン」入港
 六月二十七日……………一三〇
 「サンダカン」出港、鰐の兒買入、珍らしき猿
 六月二十九日……………一三三
 平穩なる海上

七月二日……………一三三

香港歸着

附 録

諸規則及旅行案内

第一、瓜哇在留民須知要項

一、土地所有權の事……………一三七
 二、鑛業權の事……………一三八
 三、漁業權の事……………一三八
 四、遺産の事……………一三九
 五、入國の事……………一四〇
 六、住民權の事……………一四一
 七、居住營業の事……………一四二
 八、醜業者の事……………一四三

九、醫師及齒科醫の事……………一四三

十、人事に關する諸届の事……………一四三

 在留届、轉居歸國届、出生届、私生子認知届、婚姻届、死亡届、諸届書認め方
 其他注意事項

十一、旅券の事……………一四五

十二、徴兵猶豫の事……………一四六

第二、蘭領東印度商標條例摘要……………一四七

第三、蘭領東印度關稅定率表……………一四八

第四、英領北「ボルネオ」諸規定

 A、入國條例摘要……………一五三

 B、土地租借規定摘要……………一五四

 C、移民に就て……………一五七

第五、日本南洋間定期船及運賃表

 A、大阪商船株式會社、瓜哇線……………一五八

 B、南洋郵船株式會社……………一六二

 C、外國船……………一六三

第六、瓜哇旅行案内

 A、出發前の用意……………一六四

 旅行免狀、携帶すべきもの

 B、乗船……………一六六

 C、上陸……………一六七

 英領北「ボルネオ」及瓜哇に於ける上陸の手續並に狀況、寫真機を携帶して上陸
 するとき、入國免狀の下附申請方、「バタビヤ」の「ホテル」、六ヶ月以内に瓜哇
 を退去するとき、通し切符又は往復切符を所持する者、手荷物の運搬賃

 D、瓜哇に於ける注意事項……………一七一

 「ホテル」に於ける一日間の時間割、用務を辨する時間、服裝の事、洗濯の事、

馬來語、衛生上の注意、「マラリヤ」の豫防法、熱帯生活に適する者、瓜哇より乗船するときの注意

E、其他……………一七五

瓜哇の鐵道及主要驛間の賃金表、瓜哇内地旅行例、瓜哇の通貨、金融機關、郵便及電信電話、各港間距離里程表

目次(終)

南洋鵬航記

深見麗水

五月十七日

午後四時香港を發して英領北「ボルネオ」サンダカン港に向ふ。

本月初めに神戸を出帆して以來門司、基隆にて既に船客貨物共滿船滿員であつたから厦門と香港には只定期で寄港したまでの事にて單に郵便物の積卸をしたばかりであつた。香港から「ボルネオ」行は便船が尠い爲め中には長い間當地に空しく日を送つて居つた人も有つたさうで澤山の乗船申込者が有つたけれ共定員以上に乗せる譯にも行かす氣の毒乍ら謝絶するの己むを得ない事になつた。

五月十八日

1 正午に名高き「プラタス」島の南方十五六哩の所を通過した、「プラタス」島は香港を距る南東方約百七十哩の海上に有る大洋中の一大暗礁にて其中に低い小島が在る。此所

に難破せし船は古來幾何なるを知らず航海者間に於ては最も危険視せられて居る。日本の船では先年海邦丸が此島に遭難して船員の窮状や人命救助の困難なりし事等長らく新聞紙上に記載せられたので痛く世間の注意を惹いた、帝國軍艦畝傍を歐洲より廻航の途、此島に難破したものであらうとの説がある。此の暗礁界の周圍は海深七八百尺より千數百尺に及び、而も海流速くして波浪高く救助船も容易に寄付く事が出来ない。萬一不幸にして此處に難破したならば到底助かる見込は無いものと思はねばならぬ。昔から此の附近にて沈没した船は幾十隻有るか分らないが人命の救助せられたるものは幾何もない。そこらに數知れぬ幾多の亡靈がウヨ／＼と迷ふて居るのかと思ふと自づと身の毛が彌立つて、ぞつとする。

正午には太陽が殆んど頂天に來た、理窟から言ふと今頃は此の邊が一番暑くなければならぬと云ふ譯だが左程にもない、海上にはまだ貿易風ムンスーンの餘波がある。

五月十九日 晴天、海上平穩

實測正午位置北緯十七度十九分、東經百十八度十八分、晴雨計二十九吋五九、溫度八

十八度

近來太陽が赤道よりも、すつと北の方に在つて、太陽赤緯北十九度四十分であるから、今日から太陽を北方に見る事になつた、

大洋航海中には船橋に當直して海上を見渡すも他船に逢ふ事は殆んど稀にて渺々たる海原の外、眼に入るものなく只舵夫が針路を間違なく眞直ぐに操舵して居るや否やを監視して居る事と毎日毎夜天文を測つて船の位置を見出す事とが仕事であるから暴風に遭ひさへせねば沿岸を航海して居るよりも餘程氣樂である、一體汽船では二等運轉士ナビケーテングが航海士オフィサー官で、丁度軍艦の航海長に相當するのだが、矢張り他の運轉士も一所になつて天測をするから何時も船長初め各運轉士一同船橋に立列んで測量して居る、觀測の正確なる事と計算の迅速なる事とは特に「スマート」を尊ぶ船内では最も重要視せられて居るから、こんな何人も一所に天測をする時には敏速に確答を出さんとして御互に随分腕を揮ふものである、

船が大洋に出で山が見ぬ様に成つてから先は羅針盤と測程器(船の速力を測るもの)

どが唯一の頼りであるが好天氣でさへ有れば何時でも天測をして船の位置を見出す事が出来る、太陽や、月や、星を觀測して夫れで地球上の船の位置が一分一厘も違はぬやうに出るのだから天文學は航海者に取ては最も大切なものである、船は或る方向に一直線に進んで行く筈のが潮流や風壓の爲めに常に推測の位置より或は右に或は左に流されて居るから時々天測をして眞の船の位置を見出す度に色々に針路を變へて、日一日と船は目的の方向に近づいて行く。

五月二十日 快晴 平穩

早朝に菲律賓の山が見へた。

定期では「マニラ」にも寄港する事に成つて居るのだが今回は都合によつて「マニラ」には寄らなかつた。

五月二十二日 晴天

相も變らぬ無事平穩の航海を續ける 熱帯に入つても、左程暑くも無く風がソヨクと吹いて時々夕立が来るから有り難い、船内一同船客船員共至つて元氣旺盛にてまだ

一人も病氣をした者が無い、否、此の有様では却つて少々の病氣は癒つて仕舞ふだらう、船醫は仕事が無くて毎日船客を相手に碁ばかり打つて暮して居る、南洋の航海は實に樂天地に保養して居るやうなものである。

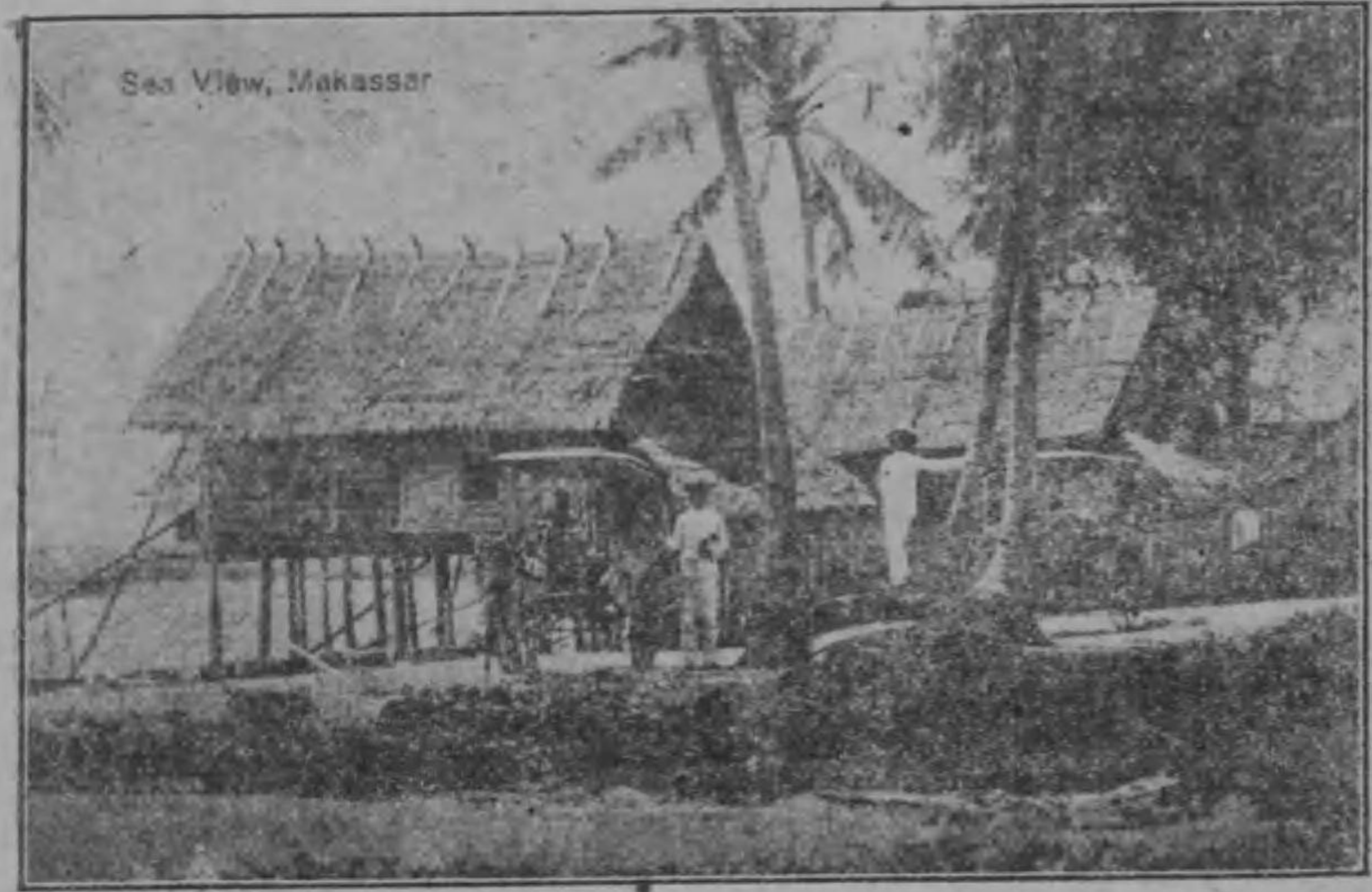
五月二十三日 晴天

早朝「サンダカン」に入港した、

港に近づくと先づ第一番に唯一の熱帯植物なる椰子の樹が目に着く、港内には英國の警備艦が一隻碇泊して居る。

「サンダカン」は北緯五度五十分東經百十八度七分、英領北「ボルネオ」に於ける主邑にして諸官廳 官立病院、教會堂等ありと云へば如何にも大きな市街の様に思はれるが官は人口僅かに五千、市内には電燈なく、電話なく田舎の一小部落に過ぎない、其の内支那人が大部分にて歐洲人が四十名日本人約四十名其他は土人である、

燃料石炭積入れの爲め棧橋に横着したから一寸上陸して市内見物に行いた、至つて小さな町にて廿分間も歩けば隅から隅まで見盡してしまふ、市内には支那式の家屋が最



マカッサ - 市土人部落

多く柱や壁に「春」だの「福」だの「五福臨門」だのと縁起の良い文句を書いた赤い紙をべタ／＼と貼り着けて有る、中には、「和氣満門、添百福」だの「春風薫宇宙、瑞氣滿乾坤」だのと凝つた文句も有る、郵便局の看板には英語と共に「郵政局」と書いて有り五圓紙幣には「伍員」と書いてある等丁度支那に行いた様な氣がする。

日本人には寫眞屋が一軒と宿屋が二軒雜貨商が一軒其他は女郎屋ばかりにて日本人の大部分は例の日本娘である、此所に「お國婆さん」とて名高い婆さんが居る、北「ポルネオ」に於ける嬢子軍の大元締で名は「木

下お國」と云ひ雜貨商と女郎屋とを兼ね營み早や六十七八歳の高齡である、此婆さん感心に能く同胞の世話を焼き、北「ポルネオ」に於ては大親方とでも云ふ格で女は勿論男でさへ殆んど彼女の援助を受けて居ると云ふ有様である、日本人が初めて當地に來た時には誰でも先づ一番にお國婆さんに逢ふて相談を爲し、然る後に思ふ職業を始めると云ふ事である、財産は數萬圓を有し孫は長崎の高等女學校に行つて居り、自分には「サンダカン」の土となる積りで居るらしく彼女の手に成りし山の上の日本人墓地には早や自分の墓をも拵へて建て、ある、其心意氣は實に感ずべきである。

市内で最も目新しいのは公許の賭場にて而も市街の中央に間口十五、六間奥行七間と云ふ頗る大きな店を構へて、店頭には幾十組となく多數の賭博の道具を並べ晝夜を通じて多くの人々が出入し、あちらにもこちらにも五人、十人宛、圓陣を成し常に喧々囂々として賑ふて居る、一寸見た所使用人ばかりでも百人位は有るのだから其内の喧しい事到底御話に成らず、其前を通ると袖を引かばかりに四方から呼び止める、餘り雜沓して居るから物好きにも這入る氣にはなれない、店口の土間で、やつて居るの

は小さい、取引ばかりだが二階では大きな勝負を闘はして居ると云ふ事である、此所
に出入するのは主にも支那人にて賭博を犯罪と心得て居る吾々には甚だ奇異の感がす
る。

其所から二三丁山手の方に行くに郵便局の前に裁判所がある、恰も何事が裁判中であ
つたから道に立留まつて暫らく見物した、小さな南洋式建物で道路に面した一室を全
部明つ放し椅子の配置等は矢張り法廷らしく出来て居つて其處に土人の裁判官が一人
と其前に被告らしい者が二三人列んで居る何事か頻りに辯じて居つたけれども何を云
ふて居るのか少しも分らぬ、傍聴人が何か知らぬが土人が五、六人其前の手摺に頬杖
をついて眺めて居る、法廷とは云ふものゝ少しも緊張したる光景なく如何にも悠然た
るものにて流石に南洋國は天下の樂園だと感心した。

後ろの小高い山に登つて見た、洋館の住宅が山の中腹や崖の上、彼方此方に散在して
道路の手入が行き届き、こんな田舎にも自動車走つて居る、此の小さい山と谷間を
全部住宅地にして有つて廣き庭に風雅な洋館は自然の公園を爲し誠に良い景色である

木の蔭の「ベンチ」に腰を下して上衣を脱ぎ、汗を拭く頸筋に西風がそよ／＼と来て氣
持の良いこと夥しい、眼を轉じて左方なる小さな町を一目に見下せば蒼々たる樹木の
間に「トタン」葺の家が行儀良く建列んで居る「サンダカン、ホテル」郵便局、「デニス
ート」練兵場、港内碇泊の汽船、さては静かな海に緑の島影等飽かぬ眺めである。

而白い事には人家の内にて數十軒は海の中に建て、ある、幾棟かの長い借家が海上に
連り道路の代りには所々に棧橋を設け脚の長い家の高き床の下には漣波がジャブ／＼
と打ち寄せて如何にも涼しさうに見ゆる、此の海上家屋に就て大便秘即ち水族館と云
ふ面白い話がある、尾籠な話したが便所に行つて下を覗くと床の下は澄み渡りたる海
水で用便をする下は忽ち水族館となり多くの魚類が群り來つて大便を争ひ食ひ盡し
てしまふと云ふ事がある、日本人旅館富士屋の便所も之れである、同店主の話による
と魚の中にて恰も鯨のやうに水を吹き上げるのが有つて便所に行つて居ると其魚が口
からチューツ／＼と一丈餘りも水を飛ばして尻を洗ふて呉れると云ふ事である、但し
れ慣ない者には嘔 氣味の悪い事であらう、此等の家には主にも支那人が住んで居る

が其便所の在る横の方では海水を汲み上げて食器でも何でも之で洗ふて居る、土人や支那人は、そんな事には一向平氣なものである。

更に珍らしいのは抑、此の英領北「ボルネオ」と云ふ所は一會社の所有地に屬して居つて政府は即ち株式會社と云ふ外に類の無い奇體な國である、會社と云ふのは倫敦に有つて資本金五百萬磅、總督は重役が選舉したもにて其下に又色々の役人が置いてある、然し經費を省く爲めに役人の數は至つて少なく大抵の所では税關長も郵便局長も裁判長も港長も地方官も只一人にて兼任し土人を使役して如何なる事務をも掌つて居ると云ふ有様である、されば土地の繁榮策なり又は成るべく會社の收入を多くする爲めに多くの税金を取り立て、公然と賭博場を許し女郎屋を許して有る、お國婆さんの話によると賭場は一ケ年の税金二萬圓にて其上澤山の人を使ひ多くの費用を掛けて商賣をして居るのだから素人が行つても中々儲けさす様な事はなく、あんな所に決して行くものでは無いこの事であつた。

「ボルネオ」は世界で第二番目（「ニューギニア」に次ぐ）の大きな島であるが其内七分通

りは蘭領にて英領は其西北に位し面積三萬一千方哩（北海道より少し小し）人口約三十萬である、「サンダカン」と「ゼツセルトン」西海岸にあり）とが其都會にして總督は半ケ年宛兩地に居住し其外に「クダツ」港とて小さい町がある、島内は土地豊饒にして産物頗る多く森林繁茂すれども斧鋏未だ入らざる所多く猛獸繁殖して人跡稀なるの有様である、日本の動物園に居る猛獸や大蛇は大部分「ボルネオ」から來たものである事から考へても如何に野獸の多い所かを知る事が出来る、又象や犀は時々護謨園や椰子林に出て來て幼樹を荒す事があるさうで護謨園等では毎夜火を焚いて番をして居る、象は又時には電信柱に其巨軀を擦り付けて之を折り挫くと云ふ事である。

「サンダカン」の南方百哩（海上二百哩）に「タワオ」村と云ふ所が有る、其處には久原鑛業會社の廣大なる護謨園と三菱の椰子林とが有る、本船も殆んど毎航海「タワオ」に寄港するから或時久原の農園を見物に行つた目下久原にて「ボルネオ」政府から租借して居るのは（九十九年間）二萬二千英町にて其廣さ實に十數哩に亘り尙一ケ年の後には凡二三萬英町に達すると云ふ（馬來半島に於ける日本人所有の農園全部よりも尙廣し）其



舟 漁 の 畦 瓜

内にて既に開墾して護謨を植付けて有るのが八百英町にて今年（大正七年）末迄には四千英町餘り拓く事に成つて居るさうである、之を開墾するには雜木林に火を放つて焼き盡すのであるが土地豊饒なると氣候亦甚だ良好なるが故に到る所樹木密生し一寸の餘地もなき迄に立ち茂り其中には「マンガテース」樹とて周圍三十尺、枝下一百尺にも及ぶ大木が有つて之を焼くには尠からぬ手数と費用とを要するけれども今の所にては焼くより外に仕方がなく何れは廢物利用旁々副産業として之を製材し船腹の安くなるのを待つて輸出するの計畫であるさう

な、こんな大本は伐り倒して置いて其上に薪を積み重ね之に石油を注いで焼いて居るのだが何しろ直徑十尺以上もある大本であるから初めは容易に燃へ付かぬけれども其代りに一度び木の心に火が付けば如何に雨が降つても決して消ゆる様な事はなく數日間にて遂には灰になると云ふ事である、實に惜しいものである。

使用人は目下臺灣人、支那人、瓜哇人を合せて苦力が千數百名と日本人が二百人ばかりであるが尙便船毎に人數は急速に増加して居る、將來は少く共一萬人位の苦力を要するとの事であつた、農園の内を流る、河の中に温度百二十度位の温泉が一ヶ所出て居る此の邊では時々長三尺餘の大蜥蜴が取れるさうである。

「タワオ」村は海岸にあつて人家僅かに廿戸位の一小部落であるが此所にも公許の賭場が一軒ある、三菱の椰子林は廣さ三千英町にて久原農園の東方に連つて居る、尙久原鑛業會社では北「ボルチオ」全島の石油採掘權をも買ひ取り本部を「サンダカン」に置いて島内を調査して居る、其他各鑛物全部の採掘權を目下出願中との事である、蘭貢「ボルチオ」にて「タワオ」の南方に當る「サンガ、サンガ」及「バリツク、ババン」は有名な

る石油産地にて且つ本島南部には無数の金銀鐵「ダイヤモンド」等の鑛山が有るから北部にも多くの鑛脈が在るだらうと思はれる。「タワオ」の近くに「セバチック」として石炭の産地がある、本船は毎航海此所にて船用炭を積入れる、炭質は頗る上等である。

「ボルネオ」にて外國人が居住して居るのは海岸附近のみにて内地には全然這入つて居らない、數年前或る獨逸人が「サンダカン」から「タワオ」迄山越したのと「ゼツセルト」から「タワオ」迄即ち西海岸から東海岸まで約百五十五哩の間を實に三ヶ月を要して横斷したと云ふのが今尙は一つ話しに成つて其外に内地深く分け入つた者は一人も無いと云ふ事である、勿論調査等は行き届いて居らない、さうして海岸と雖も測量未だ充分ならず、幾多の危険各所に散在して航海も甚だ困難である、北「ボルネオ」中に燈臺のあるは僅かに二三ヶ所位のものにて唯一の良港なる「サンダカン」でさへも一の燈臺なく港としての設備も殆んど無いと云ふ有様であるから其他は推して知るべきである、如何に政府が營利會社でも金儲の事はかり考へずにも少しは勉強しさうなものである。

僅かの揚荷と燃料炭三百噸の積込を了して夕刻に「サンダカン」を出帆した、此所から「ボルネオ」の西岸を西下して瓜哇の「バタビヤ」港まで海上千二百哩約六日間の航海である。

五月二十四日 晴天

航海中はたとへ、無風の時でも船の速力丈は前方から風を受ける譯だから碇泊中よりも餘程涼しい、熱い所では航海して居るのに限る、碇泊中少しも風が無くて暑熱に苦しんだ後出帆して清涼なる海風に觸れると急に蘇み返つた様な氣がする、吾々が毎日晝夜四時間宛八時間の當直にて船橋に立つのは寧ろ涼みに出て居る様なものである、但し機關部の方は丁度此と反對で暑い所に來て熱い仕事をして居るのだから、其困難は到底筆紙には盡されない、殊に火を焚くには相當の熟練と共に大なる勞力を要する常に百度を下らぬ炎々たる汽鐘室の薄暗い底の方で大きな「スコップ」や鐵棒を振り廻しつゝ働いて居る所は之れ實に生き乍らの焦熱地獄で漸く受持の時間を働いた火夫が「シャツ」も「ズボン」も汗びつしよりに成つて甲板に上つて來るなり恰も死人の如

くに手足を延して休んで居る所を見ると氣の毒なのは通り越して能くも身體が續くものだと感心する、船内の規律として特に客船では汚い衣物を着て甲板に出て來たりそこらに寝轉んだりしては成らぬのだが氣の毒なものだから、つい同情して小言も云へなくなる。

五月二十六日

曇り日の和風にて海上平穩、實に涼しい良い航海である。

午後に船内で斬髪をした、澤山な乗組の内には器用な者が居つて斬髪位には不自由をしない。

五月二十七日

正午位置北緯一度廿一分、東經百〇八度五十分、晴雨計二十九吋五八、溫度八十七度南々東の輕風、快晴、平穩、午後九時〇五分南に向つて赤道を通過した、丁度自分の當直中だつたから只今赤道通過の由を船客初め各員に通知した、七日の月が冴へ渡つて海には銀波輝き空には日本で見る事の出來ない、南半球に屬する星がピカ／＼と光

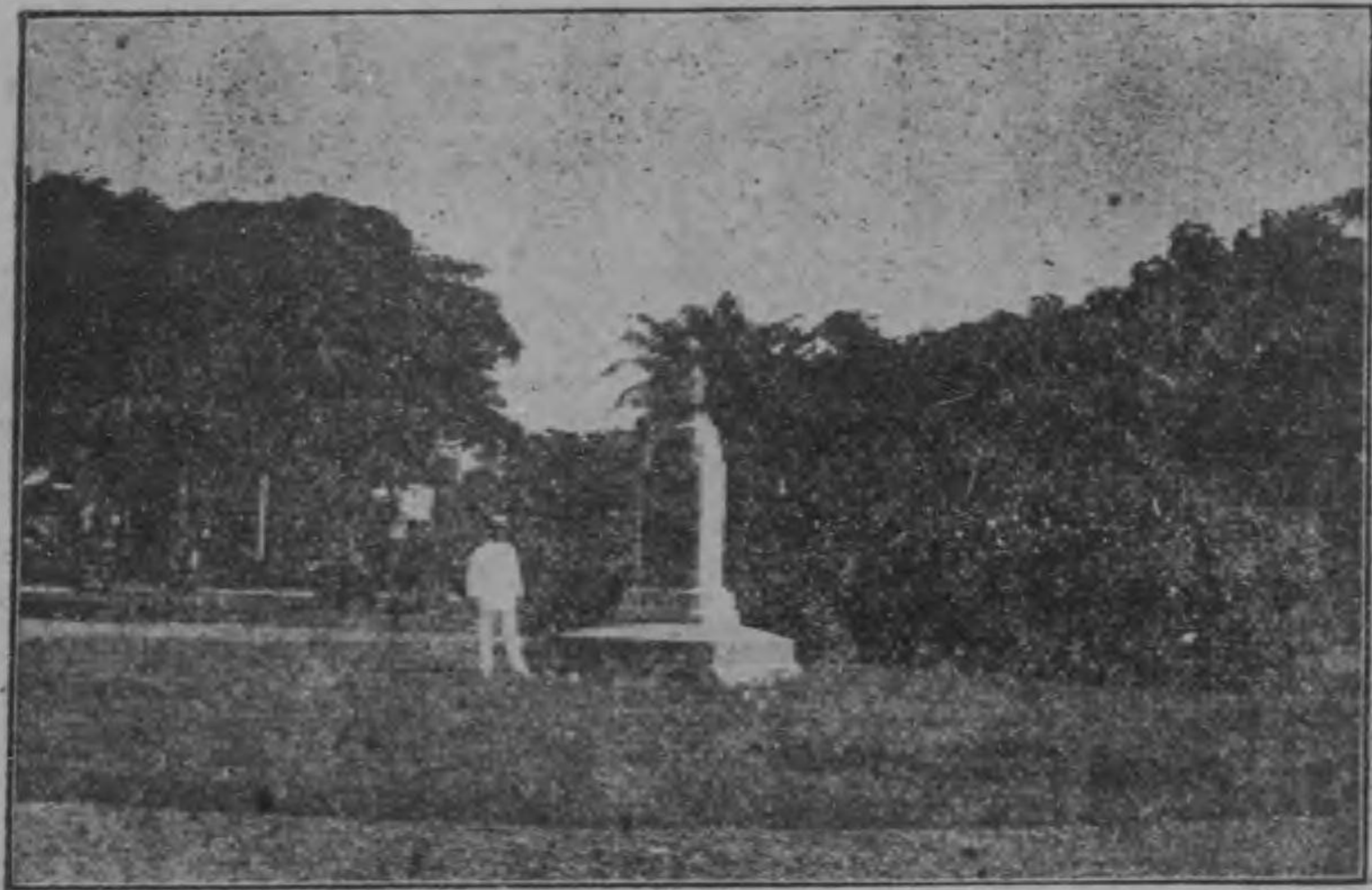
つて居る。

赤道を通る時には赤道祭りとして船内で海チヂ、チンの神を祭り船客の内にて一番多く赤道を通過した者が海の神に扮装して檣の上から天降り北緯圏から南緯圏に入る所の鍵を船長に渡すと云ふ儀式を行ふのが慣例に成つて居る、さうして初めて赤道を通る者は赤い帽子を被つて赤道踊りを踊り餘興として一同假裝行列をすると云ふのだが、近頃では交通頻繁となりて赤道を通るのも左程珍らからず、此習慣も次第に廢れて今では餘り行ふ船は無い様になつた、本船でも別段の催しも無かつたが其代りに洋食に小豆飯と云ふ和洋チャンポンの御馳走が出た。

五月二十八日

相變らずの上天氣にて平穩の航海を續ける、

一體赤道帯には暴風が無い颶風の發生するのは南北兩半球共緯度、七、八度から二十度位迄の間が多く毎年二百十日頃日本を襲ふものは菲律賓の邊に發生し、臺灣の東海岸及沖繩を経て九州本州に來るものが主である南洋にて赤道の南北則ち「サンダカン」



スラバヤ市 紀念碑の前に立てるは著者

と瓜哇の間では全然颶風や暴風に遭ふ事はない、只毎日一回か二回「スコール」(はやて風)は来るけれども夫れは即ち夕立ごでも稱すべきものにて、極短瞬間にして浪も立たず危険もなく後では涼しく成るから、寧ろ「スコール」の來るのを待つて居る位のものである、夫れに南洋は多くの人が想像して居るやうに熱い所では決して無い、臺灣よりも涼しくて凌ぎ良いと云ふのだから、どうしても南洋の航海は樂天地と謂はねばならぬ。

五月二十九日 晴 天

午後三時半、瓜哇島「バタビヤ」港に着いた。

瓜哇は南洋諸島中最も開發せられ且つ最も産物多く蘭領東印度の中心と成れる島であつて「バタビヤ」は其首府である。

抑、南洋と云ふのは新嘉坡以東「ニューギニア」邊迄の總稱であつて其區域は人に依つて色々に區劃せられ或人は暹羅、緬甸、安南、印度をも編入し又或人は濠洲までも南洋の部に入れて居つて單に南洋と云ふても果して何所々々を指すのであるか其區域は甚だ漠然たるものである、但し南洋と云へば日本の南方に當る熱帶地の總稱であるとして置けば別段之に定義を下す程の必要も有るまいと思ふ、其内にて蘭領東印度と云ふのは「スマトラ」瓜哇、「セレベス」、「ボルネオ」の南東部「ニューギニア」の西部及其附屬島を云ふのであつて其面積七十三萬六千方哩、人口三千八百萬人實に和蘭本國の六十倍と云ふ大さである、其内にて瓜哇のみは餘程開拓せられて居るけれども「ボルネオ」や「ニューギニア」は今尙ほ未開の状態にて我が臺灣の蕃界も同様である。

瓜哇は人口稠密なること世界第一にして其面積五萬五百平方哩に對し人口三千萬人即ち一平方哩の平均約六百人である(日本本土は三百五十七人)蘭領東印度に於ける瓜哇

の面積は僅かに十四分の一に過ぎざるも人口に於ては其八割を占めて居る、産物には砂糖を第一とし其他茶、煙草、「コブラ」珈琲、護謨等數ふるに違あらず砂糖のみにて一ヶ年の産額二億圓を超へ、一ヶ年二億八千萬圓以上の輸出品を産出するのだから瓜哇は實に和蘭の爲めには最大の寶庫である。

「バタビヤ」は瓜哇の主要港にして港内の施設整備し常に數十隻の汽船が碇泊して居る、「バタビヤ」の港は大阪の築港に能く似て居る、但し大阪では築港の中央に鐵製の大棧橋が突出して居る代りに「バタビヤ」では反對に内方に幅九十間奥行五百五十間（二分一哩）の長方形の入江を作り、其内側兩岸をば全部繫船岸壁即ち棧橋にして有る、十七八隻の汽船は同時に之に繫留する事が出来るが、尙狹隘を告ぐるに至り目下其東方に更に長五百五十間幅八十間の第二棧橋（第一同様の入江）を築造中である、（大阪で云へば尻無川邊の改築）又大阪には安治川が在つて市内まで汽船が通航するが如くに「バタビヤ」にも小さい河が有つて市内に通じ土人の荷船が通ふて居る、尙其外方には大阪同様に片足の長い毛拔形の防波堤が圍らして有つて其正面に船の出入口が有る。

入港すると先づ第一番に獨逸の遁入汽船が六隻港外に碇泊して居るのが目に着く、港内にも一隻彼の有名なる「エムデン」の給炭船にして「コムデン」と共に長らく此の方面にて猛威を逞しくせし獨逸汽船「マリー」號（千八百六十六噸）が勇ましかりし其當時負傷せし彈痕を頻りに修繕して居る、當地の人の談に依れば、東亞弗利加から英國艦隊に追はれつゝ、全船體實に一百餘の砲彈を受け風前の燈火と謂はんが、怒濤に漂ふ捨小舟に譬へんか、眞に之れ九死の間辛ふして逃るゝを得、此の中立國の港に逃げ込んだものであると云ふ、尙ほ此船は入港當時乗組員の手當や船體修繕の費用が無い爲め入港すると早速に二盾^{キルター}（約一圓七十錢）宛を徴收して其船體を公衆に縦覽せしめ其料金にて修繕費を拵へたと云ふことである、獨逸人の勇敢にして而も狡猾なものには今更驚くの外はない。

今日は棧橋に澤山汽船繫留して居つて場所が爲い爲に一時港内に碇泊して明朝迄待つ事になつた、實は定期では明日入港する筈に成つて居つたのが航海が意外に早くて一日前に入港したものであるから代理店の方では手配がして無かつたらしい、日本船は外に

商船會社の北京丸と南洋郵船の旅順丸と二隻碇泊して居る。

船客のみは「ランチ」で上陸したが今日は揚荷は出来ず久し振りにて當直はなし、甲板に呉座や毛布を持ち出し、十日の月を迎いで夕涼みを催した。本船には珍らしく尺八の名人が四人迄も居つて月下の合奏に意外な所で賑つて大ひに興を添へた、隣に碇泊して居る和蘭船では甲板上で樂隊と共に盛んに「ダンス」をやつて居る。

五月三十日

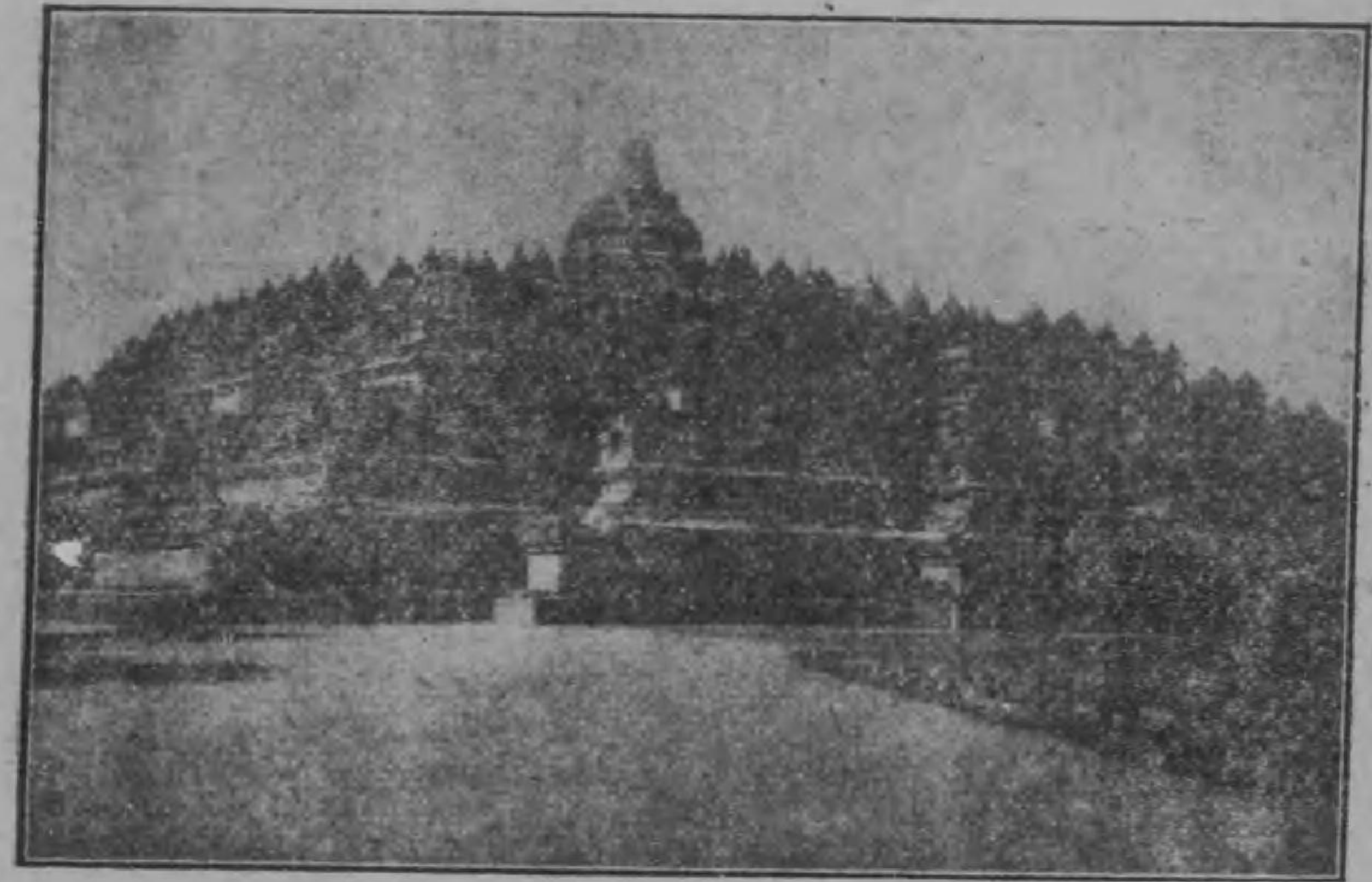
午前六時、北京丸と列んで棧橋に繋留した、棧橋には倉庫等の設備完備し海陸の連絡も充分に行き届き旅客は足を運ぶ事僅かに數歩にして船から汽車に乗り移る事が出来る。

「バタビヤ」港も大阪同様に市街と築港とは餘程距つて居つて「バタビヤ」の市街は此所から凡そ五哩西方なる海岸にある、土地濕潤にして疫病多く、昔は蘭人が誇つて東洋の女王クイーンとまで言つた程の良い町であつたのが其後疫病流行の結果、蘭人の命を失ふもの甚だ多く實に一百万を超へ遂には白人の墳墓とまでも呼ばれるに至つたさうである。

茲に於て千八百〇八年時の總督「デーンデルス」氏は大英斷を以て「バタビヤ」の南方五哩を距つる地に新に新市街を經營して官衙を此地に移し、町の名を「ウチルテフ、レーデン」と命名した、此地は土地高燥にして樹木多く頗る健康に適して居る爲め市民も次第に移住して逐年殷盛に赴き今では歐洲人の商業は殆んど此地に移つて居る。

尙「バタビヤ」の町は素と港であつた、然るに千六百九十九年「サクラ」山の噴火の際、海中土砂堆積の結果船舶の出入困難となりし爲め其東方五哩なる「タンジョン、ブリオク」と云ふ所に新港を築造し、工費二千萬圓、六ヶ年を要して千八百八十三年に竣成したものである、現在本船の碇泊して居るのが即ち此の「タンジョン、ブリオク」港である。

一般に「バタビヤ」と云ふのは以上三ヶ所を合稱したものであつて、人口約十六萬人、内歐洲人一萬五千人、支那人三萬人にして日本人は僅かに百五十人許りで有る、さうして舊「バタビヤ」市には主に土人及支那人が居住し今でも矢張り盛んに商業をやつて居る。



爪哇中部シヨクシヤカルタ洲ボロブドールの佛跡

右の様な状態であるから港として「バタバヤ」と云ふ時には「タンジョン、ブリオク」港の事であり、西洋人や政府筋の人等が「バタバヤ」と云ふ時には「ウエルテフ、レーデン」を意味し、土人や支那人等は舊「バタバヤ」市を指じて云ふのである、但し當地では勿論「ブリオク」「バタバヤ」「ウエルテフ、レーデン」と別々に呼んで居る。船務の餘暇を利用して夕刻仕事を終つてから同僚二人と共に市内見物に出掛けた、大阪市内と築港との間は電車であるが此所には瀛車が通じて居る、等級は矢張り三等に分けてあるが三等は土人用にて白人には切

符を賣らない又土人にも一二等の切符を賣らず、全然白人と土人とを區別してある、停車場には改札口が無く誰でも入場勝手次第である、二等を買ふて乗込んだ所が汚ない瀛車で日本の三等よりもまだ悪い、間もなく汽車は動き出した「タンジョン、ブリオク」は人家僅かに二三百の小さな町だから數分間にして瀛車は人家を離れ直ぐに野原に走り込んだ、見渡す限り平原にて草や木が蒼々生ひ繁り其間に椰子の樹がスーッと高く突き立つて居る、馬來人の小兒が赤裸々で土人小屋の前に遊んで居る、何となく、熱帯地に來たやうな氣持になる。

發車すると間もなく車掌らしい男が巡つて來て切符を調べて居る、此所でも列車内で檢札をするのか、エライ嚴重だなアと感心し乍ら「ポケット」から切符を出して示すと「パチッ」と鉄を入れて其儘持つて行く、切符を持つて行かれては大變と馬鹿正直に心配をして、オイ〜と呼び止めると土人の車掌が一寸振り返つて何やら譯の分らぬ事をベラ〜言ひ乍ら、さつさと、行いてしまつた、言葉は少しも分らず勝手は知らず此れこそ、ほんとの啞の旅行だ。

十五六分間にて「ウエルテフ、レーデン」の内なる「ケミオラン」驛に着いた、改札口が無いのだから今度は、こつちで、さつさと出て行く、所がさつさと出たのは良かったが此れから先ごちらの方面に行いたら宜いやら、さつぱり分らぬ。兎に角馬車を雇ふ事にしたが、一寸馬車に乗るのにも言葉が分らぬのだから困つたものだ、停車場の前に客待の馬車が二三十臺と自動車が二三臺居る、蘭領では人力車を許さぬさうで人力車は全然見る事が出来ないが、自動車と馬車は非常に多い、船を出る前に代理店の者に一通り道順は聞いて置いたから先づ「コーニクス、ブレーション」(公園)に行く事にして一人の駁者を呼んで「コーニクス、ブレーション」と言ふて見たけれども分らない「コーニクス……ブレーション……パーク」と二人で繰返し、色々に言ふても、どうしても通せぬ「コーニクス、ブレーション」と云ふのは土地の名前だから此れで分りさうなものだと心の内では如何に、やきもきしても分ないから仕方がない、日は暮れるし言ふ事は少しも分らず、氣ばかりいら／＼して後には疳癢を起し度く成つて来た、仕方がないから再び停車場の中に引き返へして西洋人を見付けて通辨を頼まうとした所が今度

は此の西洋人英語が分らぬ、和蘭語なんか當方が御免だ、こんな事で二三十分間も空しく費し漸く一人の西洋人に通譯して貰つて辛ふじて馬車を雇ふ事が出来た、賃金は何程拂へば良からうかと問ふて見た所が五十錢で澤山だと云ふ厚く禮を述べて馬車に乗つた、啞の旅行はなか／＼骨が折れる。

後日に成つて其當時の事を考へると實に馬鹿げて居つて自分乍ら吹き出し度くなる、せめて必要語の少しばかりでも前以て研究して置けば良かったに、そんな暇が無かつたから、とんだ滑稽を演じた、まだ僕等のは、見物だから此れでも濟んだ様なもの、中には船客の内にて商業視察に行くのに英語も馬來語も充分に分らぬ人が有る、馬來語は非常に簡單にて分り易い言葉であるから當地滞在の目的ならば渡航後に勉強してもすぐ覺へるのだが視察に来るので言葉が分らないでは殆んど無意義である、和蘭語は知らなくても大した不自由は無いが英語と馬來語とは、どうしても必要である。

餘談はさて置いて吾々の乗つた馬車は停車場から一直線に西の方に走り出した、道の両側に南洋式の小さい洋館で建並んで居る樹木多く廣き庭の中に建てたる平家の「べ

ランダ(椽)に「テーブル」や椅子を並べて、この内にも和蘭人が「ピアノ」や「バイオリン」を奏しつゝ、一家族團樂の夕涼みをして居る有様は如何にも涼しげに楽しさうで他所の見る目も羨ましく一度あんな生活をして見度いと思はれた。

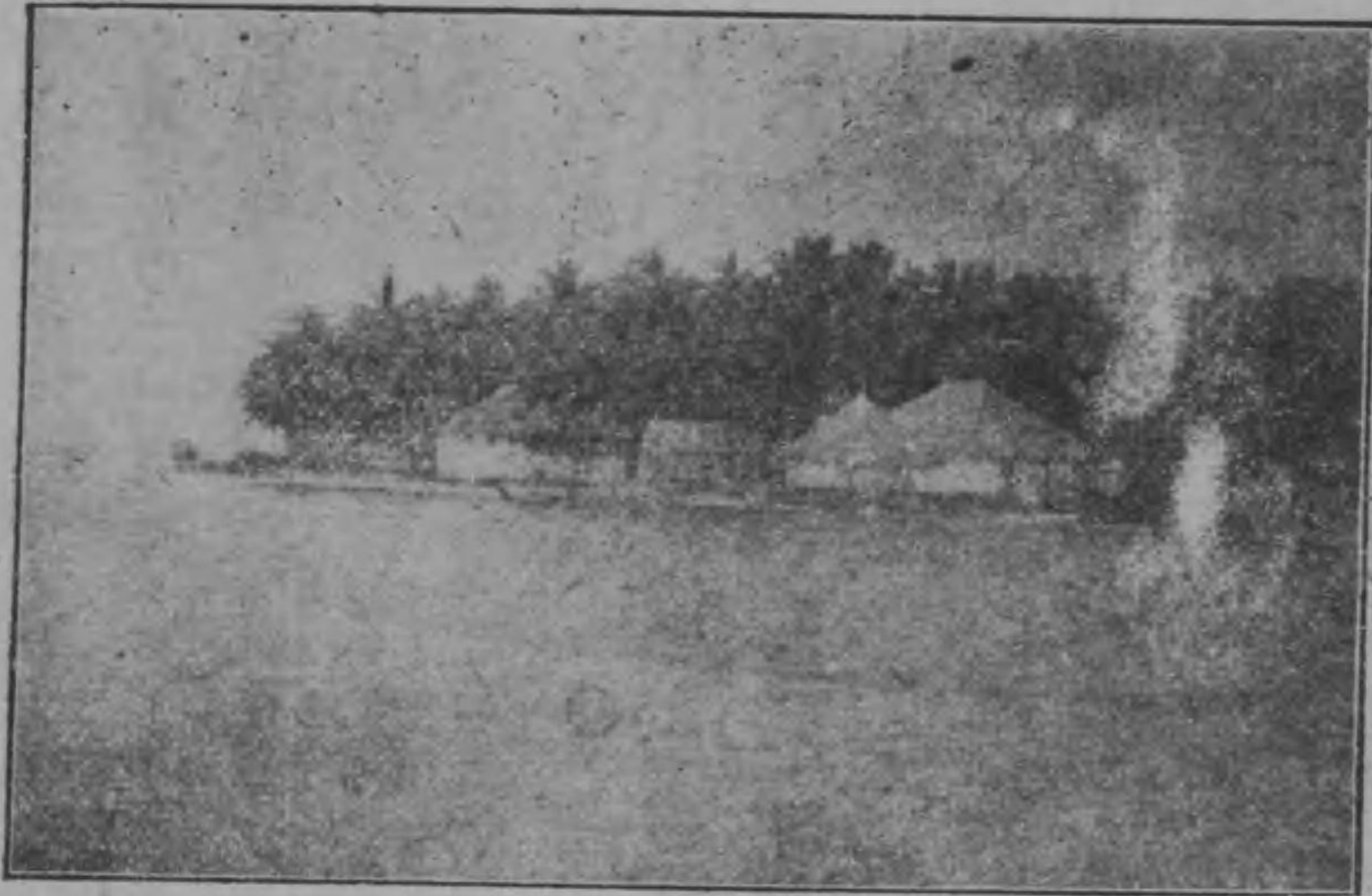
馬車は、やがて河端に出た、此の河は「バタバヤ」の市内を貫通せる運河にて河の向ふ側は町で左は公園である、河には濁流滔々と流れて其水の汚きこと恰も支那の河の如く其泥水の中に早や夜に成つて居るにも拘らず土人が澤山飛び込んで遊んで居る、水深は三、四尺、河幅は五間位にて兩岸は「コンクリー」と堅め、所々に石段を設けてある、爪哇の土人は此の不淨の水を毫も意に介する所なく、男女共に終日、河中に浸つて洗濯をして居る、洗濯が済んでも尙ほ河の中で遊んで居つて夜陰になつても水音が絶われないと云ふ事である、又夕方になると一日の勞働の汗を流す爲めに石礮を持つて顔や體を洗ひに来る他目では此の汚い水で洗ふて何に成るかと思はれるが御本人は一向平氣なものである、婦人は「サロン」(腰巻)の儘で水中に入り立ち乍らボチャ／＼水に浴して上る時には代りの「サロン」を上から巻き乍ら下を脱ぐ、なか／＼上手に巻

き替へるだから爪哇人は何人も必ず「サロン」を二枚づゝ持つて居る實は「サロン」二枚が彼等の唯一の財産である、尙此の濁水の上流には水上所々に便所が設けて有つて其汚物の流るゝ水中で土人は平氣で行水をして居る、更に驚くのは此の運河の下流には今尙鰐が棲んで居つて時には土人が遊びで居る時に、やられると云ふ事である、

土人の馭者が田舎者の市内見物とウマク見當を付けて馬車を走らし乍ら兩側の名所や名高い建物等を案内するらしく時々後ろを振り向いては説明をして呉れる、勿論何を言ふて居るのか更に分らぬ、看板は總て和蘭語で書いて有る、其時に讀めたのは、エ。ホ

ホ。ネ tel Nederlanden ホ。ネ Post kantoor (郵便局) とばかりであつた、

馬車で「コーニクスブ、レーン」を一廻りして其所から歩く事にした、初めの豫定よりも大分長く乗つたから少しは賃金を増してやらねばなるまいと思ふたが催促されたる其時にやることとして先づ試みに五十錢銀貨を一つ渡して見た、所が何か一言二言曰ふて居つたが別に其上ねだりもしない、馬鹿に氣前の良い男だと話し乍ら公園の中を歩き出した。



「タワオ」村「レストハウス」

爪哇の金は紙幣に、千圓、五百圓、三百圓、二百圓、百圓、五十圓、二十五圓、十圓、五圓、銀貨に二圓五十錢、一圓、五十錢、廿五錢、十錢、次に銅貨に五錢白銅、二錢五厘、一錢、五厘、にて日本金の一圓が爪哇の約一盾^{キルピト}二十仙^{セシ}に相當する、さうして銀貨の形が全体に小さく日本の銀貨の丁度半分位ひの大きさで有る、だから初めて爪哇に来て慣れない内は一圓銀貨を五十錢に、五十錢を廿五錢に間違へて困る、今馬車から降りる時に薄暗い電燈の下にて馭者に五十錢銀貨一つ渡した筈であつた所が餘り大人しく引き下つたから聊か不審を抱

いて後で調べて見た所が之は大失敗、自分では五十錢の積りにて實は一圓銀貨を渡して居る、此れでは何にも言はずに引き下つた筈だ、然し今更何とも仕方がない、ドーセ啞の旅行だから一度位の失敗は已むを得ない事だろう。

「コーニクス」公園は一平方哩に及ぶ廣い原野にて遊歩場となし周圍の街路には「タマランド」の樹亭々と生ひ茂り其間に白壁の美麗なる洋館が涼しげに見ゆる、總督官邸、博物館及「ネーデルランド、ホテル」等である、日本領事は此所から少し西に當り「ウエルテフ、レーデン」の町外れ(公園のすぐ後ろ「タナバン」と云ふ村にある蘭領東印度にて日本領事館の有るのは「バタビヤ」ばかりである、

「コーニクス、ブレーション」と木立續いて其東側に「ウォーター、ロー、ブレーション」の公園がある「コーニクス、ブレーション」の四分の一位の廣さであるが芝生の手入行き届き内に運動場等の設備がある、此兩公園を廣茫たる草原にして中央に樹を植へないのは舊「バタビヤ」市の濕潤に懲りて乾燥したる究氣の流通を宜からしむ爲めにしたものださうな、尙此の兩公園の間に「ウイル、ヘルミナ」公園とて小さい公園がある、園内に

は樹木多く芝生は菁々として露を含み築山の後方池の邊には日本で見るのと同じやうな螢が飛んで居る、常に海上にのみ生活する身には、こんな所を歩くのが何よりの樂しみにて此れにて脚氣病が一時に癒つた様な氣持がすると言ひつゝ木の間を透かして月を望めば總ツクなりツクにぶら下つて居る椰子の實が今にも頭の上に落ちて來さうである。公園の周圍道路の兩側には樹木を植へ並べて日光を遮り白堊の美麗なる建物に翠綠掬すべき熱帶植物を栽へたる宏壯なる庭園が並列し珍らしき植物の多い中に「パンヤン」樹ツクとて空中の枝から數百條の根を垂れ、幹の周圍は恰も繩ツク暖簾ツクを繞らしたるが如く其周り七八間にも及び實に見事なものがある「ホテル、インデス」の前庭に二本有るのが最も見事である。

公園を出で、市内に入れば此所は又公園の閑雅清涼なるに反し市街般賑、商業繁華にして交通機關は頗る完備し多數の馬車自動車の外電車及市街鐵道、市内を縦貫し殊に路は和蘭政府が納稅義務の代りに土人に勞働を強制し一ケ年二十日内外の勞役に従事せしめて完成せしものなれば、坦々たる大道市内は云ふに及ばず國內到る所に四通八

達し如何なる山間僻地に行くも馬車自動車を通せざる所はない、道路の完全なる事は實に吾々の想像だに及ばざりし所にて田舎道と雖も「ローラー」を用ひ罪人等を使役して常に手入して居るのを見受ける、自動車の數と道路の事から謂へば日本よりも爪哇の方が餘程開けて居る。

「ウエルテフレードン」には歐州人及中流以上の商店多く市内で最も珍らしいのは官營の質屋である、質屋の官營等は一寸外の國では見る事の出來ない珍無類なものである。全体爪哇人は至つて優柔怠惰にして貯蓄心なく理財の道に暗く、殆んど其日暮しの者ばかりである、されば和蘭政府にては土人に貯蓄を奨励する事に苦心し、他方に組合を組織せしめ又は土人の金融機關として種々の銀行を設立せしも幼稚なる土人は之が利用法を知らずして寧ろ質屋を以て唯一の金融機關となすが故に各地に於ける質屋業者は頗る繁榮を極め而も其質屋は支那人又は亞刺比亞人の獨占にて貯蓄心なき土人等は金に困つて質屋に行けば貪つて飽くなき質商等が足下を見て方外に擔保品の價格を踏み倒し結局多くは質流れとなるのであるから現今政府では彼等の利益を保護する爲

めに法律を以て私人の質營業を禁止し全部官營にしたものであつて其後幾分好成績を擧げて居ると云ふ事である、さうして其質流れ品は數ヶ所の役所で正札附にて拂ひ下げて居る、其所には金銀寶石より衣類、小道具等に至る迄、有らゆる品が陳列せらる普通商人の店から買ふ時は非常に懸値が多いに反して此所のは確實であるから吾々の様な不案内者が買ふのには甚だ便利である、「バタビヤ」では博物館の後ろに有るが但し餘り良い物も見當らなかつた。

博物館は爪哇中の名物の一つで内部は全蘭領印度の各島に區別して數室に分れ、美術品、工藝品、風俗、歴史、地理、宗教等百般の物に陳列し殊に佛教に關する彫刻が多い、又階上の一室には貴重品のみを藏め、各王の使用せし衣類、刀劍等を金銀珠玉を鏤ばめ、大小無數の「ダイヤモンド」が光輝燦爛として實に目を驚かさばかりである、其他「ポルネオ」「スマトラ」「ニーギニア」等の土人の建築、樂器、槍劍、弓、大砲、小銃、漁具の類に至るまで各地各様に備はらざる所なく彫刻品には又男女の生殖器が多數にある（領事館や博物館、質屋等は次回に來た時に見たものである）

「ウキルヘルミナ」公園から町の方に橋を渡つた所に日本人の商店が一軒ある、店には家具や額類を陳列して有つて店頭の店飾りに高さ四尺位ひの一つは「ハイカラ」と一つは島田の藝者らしい「スタイル」の人形が置いて有つた、其美人が實は餘り手入もして無いらしく甚だ貧弱なもので、外國人に日本の風俗を紹介するのだから、も少しは奇麗にして置きさうなものだと思はれた店には店員が一人も見當らなかつたから挨拶もせずに通リ過した。

夜間の事だから住宅町を通る時には餘り静か過ぎて淋しい位である、通の兩側の西洋建では、この家でも和蘭人が「ベランダ」に出て一家團樂の夕涼みをして居る、和蘭人の住宅の瀟洒として見るからに心地良い事は之も確かに爪哇の一名物にて周圍の廣き庭園をしつらへ、花壇を作り巨樹を植へて日光を防ぎ何れも平家建の家は小さく、玄關を廣き「ベランダ」(椽)となし典雅な柱廓を設け、裝飾を施して應接室を兼ね、床は全部大理石で疊んで涼を取る爲めにし、硝子窓の代りに鐵戸を付け窓掛や毛氈等の寒帶式のもの一つも使つて無い、綠蔭の葉隠れに此等の家々を見る時は如何にも涼し



マカッサルの夕景

げに爽やかに感じられる、停車場から馬車に乗つて初めてこんな家を見た時には少からず感心して眺めたが其後「メラバヤ」「マカッサラ」等到着する所にて此種の家を見るに付け益々羨望に堪へず自分にも後日、日本の閑静にして景勝なる地に斯かる家を建て住つて見度いものごツク／＼考へて或人に建築費等の事に就いて問ふて見た所が當地にても此の小さい家一軒建てるに少くとも二三萬圓を要し且つ一ヶ月の家賃百二十圓と云ふ事を聞いて聊か驚いた、尤も當地は一般に物價が高く官吏(和蘭人)の俸給は最低一ヶ月百圓にて汽船の船長でも一ヶ月六

七百圓から千二、三百圓と云ふ事である。

同行三人共に全然土地不案内にて而も馬來語が少しも分らないから道を聞く事さへ出来ず、唯、的もなくブラ／＼と歩いて居る内に今度は賑かな町に出た「バツサル、バール」(新しき市場)と云ふ町である、大小の商店が軒を並べて居る内に或る家の看板に「TOKO……書いて有るのが目に着いた東京(TOKYO)と云ふのと殆んど同じだから多方東京屋とでも云ふ日本人の商店で和蘭語では東京を FOKO と綴るのだから位に思ふて態々其處まで行いて見た所が、少しも日本の商店らしくは無く、且つ外にも TOKO と書いて有る家が澤山に有る、後で或人に聞いて見た所が TOKO は和蘭語の「商店」と云ふ事での商店にも必ず之れが書いて有つて決して東京でも日本でも無いと云ふ事が分つた、其後氣を附けて見ると成る程どの店にも皆 TOKO ……と書いてある。

道路の中央は車が多くて通れぬから店飾りを眺めつゝ左側の軒下を傳ふて歩いて居ると或家の店口に椅子を出して、二三人腰掛けて居るのが如何にも日本人の様であつた

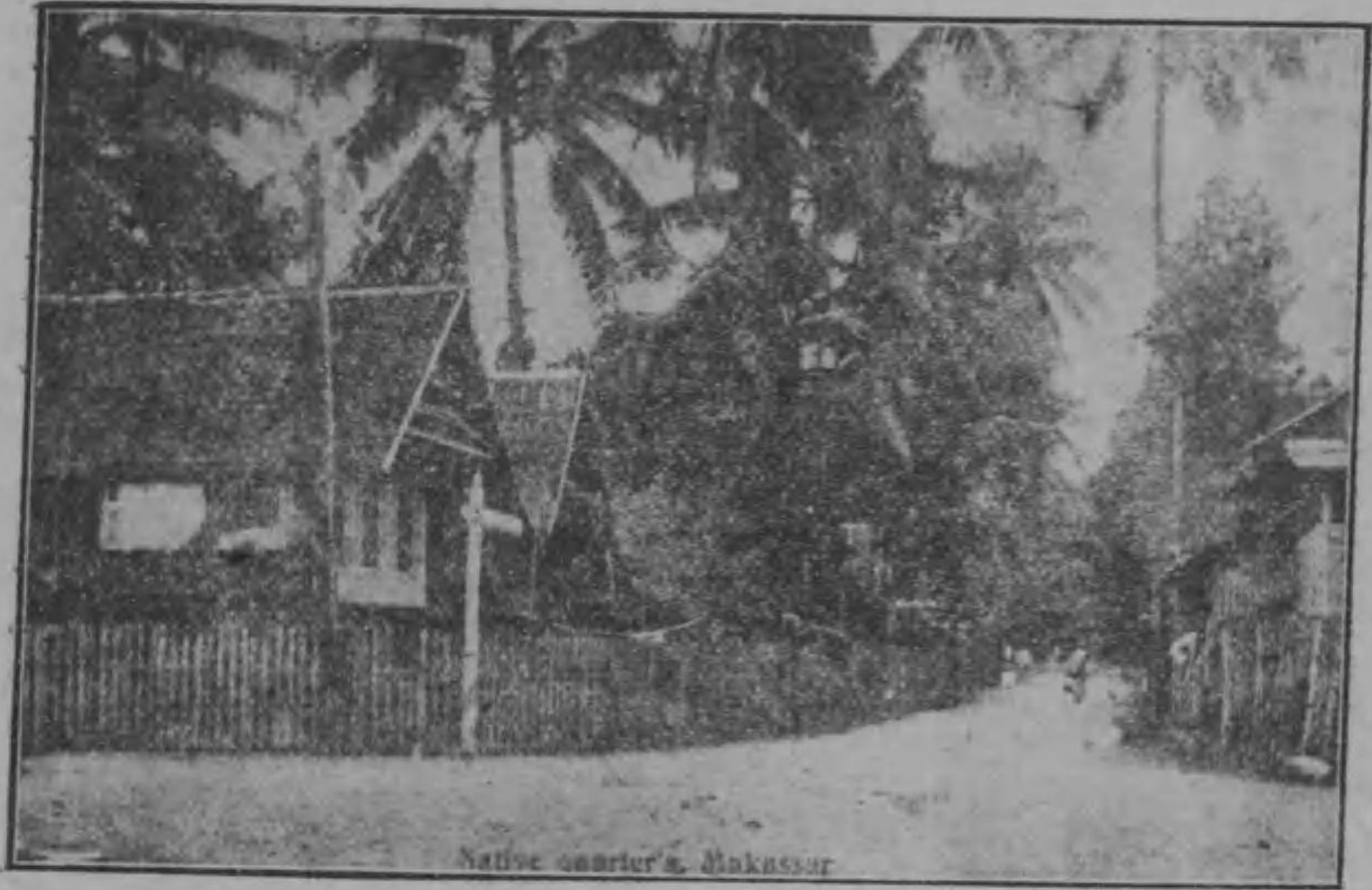
「日本人に能く似た男だ」と思ひ乍ら通り過した、一体爪哇人は馬來人種であるから日本人に非常に能く似て居る、少し色は黒いが洋服でも着て居る者は一寸日本人と見分が付かぬ位である。時には日本人と間違へて言葉を掛けると意外にも何の答も無く澄まして居る、エークン土人だか、いまくしい位の事は珍らしく無い、ウツカリ日本人と思ふて早まらうものなら、いゝ馬鹿を見される、併し今其處で逢ふたのは、どう見ても日本人に違ひない、「ありや君日本人の様だつたね」「ダルマと書いて有つたよ」
 「夫れじや大方日本人の商店だらう」と話し乍ら一丁許り先から振り返つて見ると恰も先方からも、こちらからを振り向いて居る大方向ふでも日本人に能く似た奴と思ふたのだらう「ありやアきつと、日本人に違ひ無い……一寸行いて見やうか」と「寄つて見やう」と云ふ事になつて夫れから又後戻りして其家の前まで歸つて來た、こうなれば先方でも愈々日本人と間違なしと見たらしく茲に初めて雙方から言葉を掛けた。
 店には全部日本品のみを陳列し裝飾品、玩具、其他日用品、雜貨等所狭き迄に陳列して有る其中に高さ三、四尺も有る大きな達磨がぶら下つて居る、屋號の「ダルマ」に因

んだものだらう、案内さるゝまゝに奥に通つて暫らく休憩した、此の店は兩三人の合資會社で主にも贅澤品ばかりであるから近頃の様には不景氣な時には商賣が思はしく無いとの事であつた、「バタバヤ」にて日本人經營の商店は島根商會と達磨商會とが主なるものにて尙其外に、日本館(旅館並に雜貨商)及び潮谷、小川兩支店等がある。
 達磨を出てから再び河端を傳ふて「チミオラン」驛に歸つた行く時には大分遠い様に思ふたに歸りに歩いて見るとすぐ近くである、發車時間にまで餘程間が有るから 之から馬車で舊「バタバヤ」を見物に行く事にした、今度は俄か覺への馬來語で……實は晝の間に船で必要な言葉を少しばかり會話の本から書き抜いて置いたから「ポケット」から手帖を出して眺めつゝ、あやしげな馬來語を使つて、但し半分は手眞似で辛ふじて自分に馬車を雇ふ事が出來た、夫れでも賃金は約半分に値切つた、市街鐵道や電車も有るのだが何れも夕方迄にて夜間は營業をしない、一体爪哇は全般に呑氣なるので所から郵便局でも鐵道でも夜に入ると休んで仕舞ふ、「バタバヤ」と「タンジョン、ブリオク」との間に十一時頃迄汽車が有る外には一切夜行列車と云ふものが無い。

「ウエルテフ、レーデン」と「バタビヤ」とは町續きにて「バタビヤ」市は商業繁華にして支那商店最も多く銀行諸會社等は主に此地にある、數年前迄は亞刺比亞人が多く居住して商業上に一大勢力を有せし由なるも、次第に支那人の爲めに壓倒せられ、現今には「バタビヤ」のみならず、南洋の商權は全然支那商人の獨占である、爪哇に亞刺比亞人が多いのは土人は全部回々教を信するが故に宗教上の關係から來たものである。爪哇に來て見て驚くのは商品は全部日本品である事と商業上に於ける支那人の勢力の大なる事とである、南洋到る所商店に陳列して有るものは日本品ならざるはなく、蘭領東印度の商權は全然支那人商人の手にありと之へば一寸信する事の出來ぬやうであるが事實は正に夫れに相違ない。

蘭領東印度に於ける支那人は約五十六萬人にして、其内爪哇約三十萬人其大部分は商人である、南洋の土人は比較的智能開發せられたる者にありても尙商業上に於ける智識は至つて低級なるが故に到底獨立せる職業を營む能はず、多少教育を受けたる者と雖も漸く下級官吏が商店の書記位のものにて其他は殆んど單純なる勞働に依りて生活

して居る者ばかりある、そうして其衣食住の簡易にして生活の容易なるは庭内に椰子樹十數本を植ゆれば以て一家を支ふるに充分なるが如き天恵に依りて生活の保證せらるゝと、加ふるに土人は一般に回々教徒なるが故に其教義に基き預金に對して利子を得るは其教理に違反するものとなすの觀念より迷信深き土人等は不知の間に其感化を受け益々貨殖の道に暗く且つ其性放縱懶惰にして向上發展の精神に乏しきが故に彼等は到底商人として立つ事は不可能である、然るに蘭領に於ける支那人は其數に於ても實に五十萬人を超へ、重要都市は元より山間僻地に到る迄も足跡を印せざるはなく熱心にして而も勤勉なる相當の資産を有する者と雖も其商用の爲め旅行する場合には下級の汽車に乗じ最下級の船客として苦熱堪へ難き船室内に甘んずるが如き到底他國人の企及し得ざる所にして加ふるに遠く數百年前より既に渡來せし者多く次第に勢力を扶殖して各地に商權を張り資本が豊富で殊に同業者間に組織立つて聯絡が附いて居る故日本商人等と比べて取引が順潮で且つ迅速は行はれ、遂には商業の全權を掌るに至りしものにして現今彼等が商業上に於ける勢力は和蘭の權威を以てするも尙抑壓する



マカッサル市海岸

能はざるの状態である、今後日本人が支那商人に取つて代ると云ふ事は當分は先づ困難と云ふたが至當で有らう、「バタビヤ」のみにても五十萬盾ギルビ以上の資産を有する支那人廿四人にして其内には一千萬盾を有する者も有ると云ふ事である。

次に今度の歐州戦争が起る以前には南洋各地に於ける商品の大部分を獨逸品で占めて居つたさうである、然るに目下の状況では獨逸は言ふに及ばず其他各國とても東洋までも商品を輸出する事は不可能であるから勢ひ日本品が之に代つて全盛を極むるに至つた次第である、此れ等の日本製品は勿論

大部分支那商人の手を通じて輸出され且つ販賣せられて居る、然るに日本品は概ね粗製濫造にして質が悪く染めた物は一度洗濯すれば忽ち色が褪め、時計は狂ひ易く、玩具はすぐに壊はれると云ふ有様にて甚だ不評判である、されど外國品の供給が杜絶して不自由を感じて居る昨今の場合であるから需用者は必要上己むを得ず不平乍らに日本品を使用して居ると云ふ有様で有る、當地の或る日本人から戦争後には必ず日本品に對する「ボイコット」が起るだらうと云ふ事を聞いたが或は其豫言が實現するに至るやも計られず、何れ戦時とならば此の儘では納まらぬは必然の事である、折角千載一遇の好機會を得て何等の運動も廣告も要せず易々と大きな得意を得て居るのに空しく上客を逸せんとしつゝ有るは實に歎すべきの至りにして以上述べし所は南洋視察の爲めに渡航せし人や當地に在住する人々の等しく唱へて居る所である、尤も日本品の中でも「セメント」其他確實な物もあり、又三井物産會社等有力な商店も有けれども大勢から見る時は些細なものである。

「バタビヤ」驛にて發車時間に少し間が有るから活動寫眞の前の「ビヤ、ホール」に這

入つて名高い爪哇珈琲を味つた、爪哇の「コーヒ」は芳冽にして濃厚なること他に多く類を見ず澤山の牛乳を割つて飲まないで甚だしく昂奮を起す程に濃厚強烈なものである、初めて爪哇に來た者は其芳醇なる味に度を過して病氣に罹る事さへ有り云ふ、但し珈琲一杯二十錢「ビール」一本一圓「サイダー」五十錢は甚だ高い、爪哇では家に依つて物價に甚だしき高低が有つて「ホテル」等では一般に右の相場であるが、小店や支那人の飲食店では同じ品物を半額又は三分の一位で販賣して居る。

「ビヤホール」の野天椅子で餘り緩々した爲め早や發車時が差迫つて來た、大急ぎで停車場に駆けつけた時には將に發車せんとして居る所であつた、五圓紙幣を出して「ブリオク」二等三枚の切符を求めた所が土人の驛員が金の勘定をして見て釣錢が無いから駄目だと言ふて突き返した、貧乏な停車場も有つたもので五圓札で釣が無いから切符が賣れぬとは情ない話である、汽車はもう出さうに成つて居る、外に金を替へに行く暇は勿論ない、此の場合一圓や二圓の金には代へられないから己むを得ず釣錢の足りないのは我慢するとして、そこに有る丈けの金と切符とを攫んで汽車に飛び乗つた

車内には電燈なく「ランプ」と雖も螢の火と間違へる程の小さき燈火僅かに一箇を點するのみなれば寧ろ窓外の月光に頼るべく、加ふるに車室不潔にして氣持の悪い事夥しい、釣錢の事から考へると此れでも随分高い汽車賃である、こんな事なら初めから一等に乗れば良かった、これ以來汽車は必ず一等に乗る事にした、遊覽中の笑ひ話を語る間もなく汽車は早や「タンジョン、ブリオク」に着し十時頃無事歸船した、

五月三十一日 「バタビヤ」碇泊中

毎日土人の人夫が來て日本から持つて來た雜貨類を陸揚し棧橋の上の税關倉庫に入れる日本から爪哇に輸入する主なる貨物は「セメント」「門司より積出し爪哇各港に」を第一とし次に臺灣の包種茶（ポーチンチー）（基隆より）「サマラン」「チェリボン」行「肥料、硫黃、」マツチ、陶器、「メリヤス」衣服、「ビール」等を主なる物とし其他玩具、賣藥、日用品雜貨、家具等あらゆる物である、

午後日本へ便りを二三通認めて郵便局に投げ込みに行いた、「タンジョン、ブリオ

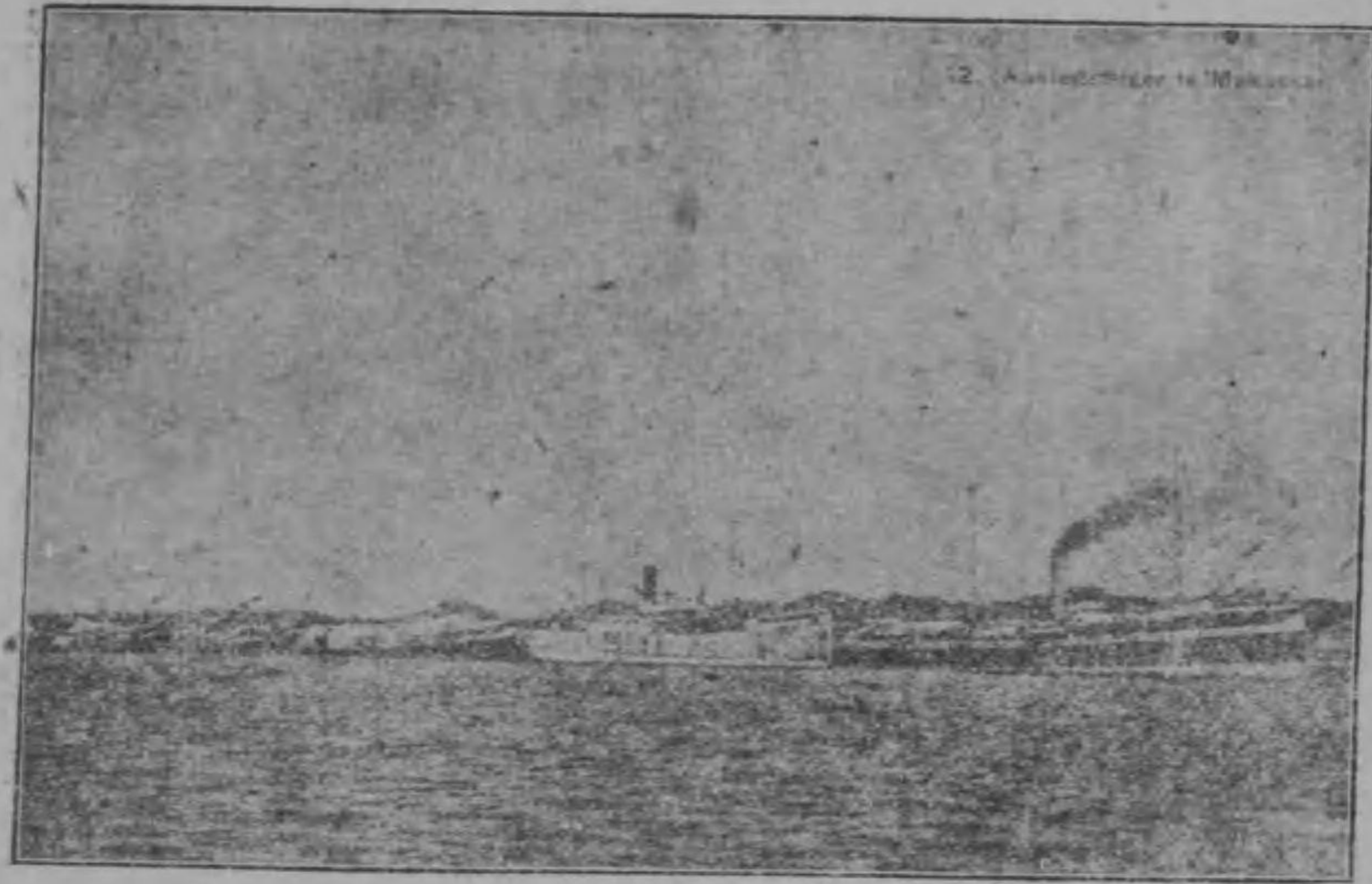
「ク」は人家僅かに二三百位の至つて小さな町で船渠會社と一、二の工場が有るの外は土人と支那人の小商人のみにて何等見るべきものは無い港内の設備完備して船が澤山に來る所だから、も少しは町の方も開けさうなものだと思はれる。

朝日軒と云ふ日本人經營の「ビヤホール」が只一軒有る、好奇心にて其處にも立寄つて見た、「サイダー」は爪哇で出來たものだが「ビール」は主もに日本品である、「アサヒ」が主もにて少しは「サクラビール」も有るが品質が良くない爲め西洋人等は飲まぬと云ふ事である、但し此れは朝日軒での話だから餘り當にはならぬ、日本から來る「ビール」は「アサヒ」と「サクラ」のみにて「アサヒ」が最も歡迎せられ、「キリンビール」等は口に合はぬらしい、外に日本麥酒會社の製品にて特に爪哇向に拵へた「ジャップJap Dairya」云ふ「レツテル」が有る、「キリンビール」も三四年前迄は來て居つたさうだが、冷蔵庫で冷すとすぐに濁るから受けが悪くなつたと云ふ事である、但し印度の方には今尙澤山に行いて居る、船内で西洋人等に「ビール」を飲ますと非常に美味いと言ふて喜ぶ、同じ「アサヒビール」に二種類有つて日本で賣つて居ると爪哇に來るとは全然中味が違ふと言ふて居る、但し之れは事實か、どうか、は分らぬ、時には又當地に居る支那人が「アサヒビール」の空罎に手製の極悪いのを詰め込んで市に出して居ると云ふ事である、

附記

數ヶ月の後日「バタビヤ」碇泊日本人某氏來訪せられし時の談に據れば「日本でも近頃は益々物價騰貴して遂に一部の人は生活難をさへ叫ぶに至つたが、爪哇では一層甚だしく夫れも日本のは景氣の良い爲めの物價騰貴だから自然の情勢であるが爪哇のは不景氣であるのに供給不能、日用品不足の爲めに物價が昂騰したのだから實に慘憺たるものにて殊に英國の爲めに多くの汽船を抑留せられて以來益々恐慌を來し、加ふるに此れまで印度や英國方面に送つて居つた爪哇糖は輸入禁止となり且つ印度米を一切輸出して呉れぬ爲め大に食料品の不足を告げ土人は近頃米の代りに薯を常食として居ると云ふ事である、

和蘭政府にても昨年より經費節減の爲め税關官吏の如きは給料を下げしのみならず



マカッサー棧橋

人員を半減せし爲め物の検査に甚だしく時日を要し荷主より請求すれば手が足らぬとて容易に荷物を渡して呉れず萬事が此の有様にて一般商人は非常に困つて居る」この事であつた、

當港にて本船と並んで棧橋に繋留して居つた「プリンセス、ユリアナ」と云ふ大きな和蘭の客船が日本經由亞米利加行きとて多くの船客と貨物を満載して本船より一日早く出帆したが其後數日の後香港にて再び同船に逢ふた時には英國の國旗を揚げて香港々内に碇泊して居つた、同船が、「バタビヤ」を出帆する前日、日本へ

の便船が出ると云ふので手紙を澤山に出して置いたのに此の様子では郵便など、どう成つたであらうか、心細い話である、其外にも常に見受ける和蘭船が數隻香港に抑留せられて居るのを見て甚だ氣の毒に思はれた、中には又爪哇出帆後に航海中無線電信にて此等の情報を聞き香港に行かずに途中から引き返した船も有つたさうである、かう成ると弱國は悲惨なものである、然るに爪哇の和蘭人が常に不安の念に打たれて居る事は實に吾々の想像以上で有るが香港に入港して見ると此所でも亦獨逸が露西亞から裏廻りをして來て印度を突くと云ふ噂があつて、さうなれば香港等は滅茶く〜にされるとして香港に居る者も同じく恐怖して居るてふ面白い状況である、

六月一日 晴天「バタビヤ」碇泊中

爪哇人の生活状態は又實に變つたものにて面白い所がある、

49

爪哇に限らず一体に南洋の地は土地豊饒にして産物多く米作が一年に二作又は三作の所あり而も爪哇の氣候は四時變化なく常に夏のみにして冬は素より春も秋も無きが故

に稻は何時種蒔をしても生育すると云ふ有様にて稻刈りの隣には田植が有り其隣りに
 は又苗代の用意をして居るのを一時に見る事が出来る等、到底外の國では見られぬ圖
 で有る、尙ほ更に斯かる勞働に従事せずとも家の周りに數本の椰子を植へて置けば良
 く一家を支ふるに足ると云ふ有様であるから一生を通じて全然生活と云ふことに意を
 用ふるの必要なく、従つて土人は一般に怠惰にして彼等には貯蓄とか向上發展とか競
 争とか云ふ精神は更でない、夫のみならず常に變化のない暖國であるから衣類財産の
 必要を感せず一年中裸体跣足の其日暮しにて殆んど半人半獸の生活である、生活の意
 義だのと云ふ事は到底彼等には分らない、吾々から見れば南洋の土人など何の爲めに
 生きて居るのか分らぬと云ふ様なものだが併し又先方から見れば外國人が一生涯せつ
 せと働いて尙ほ其上に生活難とか就職難とか頭痛鉢巻で神經衰弱を起して居るのが嘸
 かし馬鹿げて見ゆる事であらう、されば外來者と雖も永く此地に留まる時は自然に彼
 等に感化せられ且つは南國天然の恩恵や氣候の爲めに懶惰放縱に流れ易く自づと奮闘
 力を失ふに至るは必然である、如何にしても確固たる男性的精神は寒國でなければ養

ふ事が出来ぬ、瓜哇に居る歐洲人等は時を定めて本國に歸り或は南洋の高地に退いて
 寒冷の氣に觸れ身神の休養を計り又支那人の如き金錢の爲めならば無限に勤勉なる國
 民は炎熱焼くが如き下に於ても更に倦怠の色なく四時營々として働いて居る然るに瓜
 哇人は天性既に怠惰なるが上に資本、智識、奮闘力に於て遠く外國人に及ばず永く暖
 國に生息したるが爲めに人間本來の活動力を失つて遂に懶惰放縱なる劣等人種に退化
 して居るのである、彼の「ニューギニア」の土人が只一本の樹にて良く一家族を養ふと
 云ふ「サーゴ」椰子の恵みの爲めに生活の安逸に流れて退化自滅しつゝあるが如きは
 良き適例である、

瓜哇人は朝は一般に早起である、土人の早起と云ふ事に就ては左の如き話がある、土
 人の多くは「サロン」(腰卷)が唯一の財産にて夫れを晝の間は腰に巻き夜に入れば蒲團
 の代りに着て寝る、瓜哇は蚊の多い所であるから序に蚊帳の代理にも兼用して一枚の
 「サロン」を頭から尻まで、くるつと被つて寝て居る、さうすると如何に暖國でも拂曉
 になれば冷へて来るから「サロン」一枚では、寒くてたまらず、夜が明けるや否や、す

ぐに飛び起きてしまふ、寒ければ衣類でも拵へさうなものだが、さうはしないで早起
 ですまして居る所が如何にも蒙昧なる瓜哇人は氣質を表現して面白い、夜が明けるか
 明けぬ内から土人は既に河の中に浸つて其日の享樂生活を始めて居る、和蘭人等も朝
 は早く五時前後に臥床を離れ寢着の儘にて黍明露を踏んで木立の下を散歩して居る夫
 婦連れを見受ける、朝の九時から午後の一時頃までが業務の時間にて一時に午飯を取
 り二時から四時迄は一般に午睡の時間である、瓜哇では毎日午後に晝寢をするので規
 則の様に成つて居つて、官衙であらうが商店であらうが何れの家も皆、戸を閉めて昏
 々として午睡を貪り、町の隅から隅まで死んだ様に成る、故に買物や其他の用件は必
 ず午前内に爲し置くの必要がある、然らずして、うつかり午後に出掛けやうものな
 ら夫れこそ、みじめなものにて何一つ用事は辨せられず立寄る所はなし、加ふるに炎
 暑赫々として身を置くに所なく實に悲惨な目に遭はさる、初めて瓜哇に來た者は、大
 抵此れには面食ふものである、然るに船では勿論午睡のやうな、暢氣の事が出来る筈
 なく毎日朝から晩まで時としては夜間までも揚貨機をガラ／＼、云はして荷物の揚卸を

急いで居る、

午後の四時頃からポツ／＼起き始める再び戸を開ける男は寢着の儘、女は下げ髪で上
 には麻襯衣、下に「サロン」を巻き(外國人でも瓜哇では「サロン」を巻いて居る者が多
 い)素足に「スリツバ」と云ふ姿で「ペランダ」に出て茶を飲んで居る、此略装主義が常
 に英米人の批難の標的になるさうだが男は兎に角女としては随分思ひ切つた姿であ
 る、但し天下の樂園なる南國の住居は單純生活であり享樂生活である、西洋人の様に
 厳格な事は瓜哇では通用せぬ、午後の四時から六時か七時頃迄商店等は又營業を始め
 るが其時間は一定して居ない、塲末の小商人等は休まぬ所もある、七時頃から一日の
 仕事を終つて白衣の人が盛装して夕涼みに出掛る、公園や俱樂部には幾多の人が相集
 ふて歡樂に耽り綠葉空を掩ひ、玉枝軒に垂れ翠綠方に滴らんとする瀟洒たる洋館の「
 ペランダ」には一家團欒して涼味掬すべく陶然として享樂の境に入つて居る、斯かる
 生活状態にあるが故に如何なる人と雖も瓜哇に永らく留まる時は自然と懈怠性に陥る
 は又已むを得ざる次第にして大抵の頑癖家と雖も瓜哇に三年居れば相當軟化して來る



「ゴア」王の住宅

のは請合である、
 「ウエルテフレードン」の公園の近くは兵營がある。瓜哇では總て兵營内に妻帯を許すのだから其側を通つて見ると、營所の庭に女の衣服が乾して有るやら、小兒の汚物を洗ふて居るやら實に、亂雜極るものである。兵率は總て土人であるが、どうせ瓜哇人の事だから弱いのは勿論の事、紀律等も丸で御話にならず、昨年内地に暴動が起つた時杯も軍人が我先に逃げ出して兵營の内は半分に分つてしまつたと云ふ事である、かやうな頼り無い兵隊を何程置いても何の役にも立つまい、兵營内に妻帯を許すのは一朝

事あるの日に逃げて行かぬ爲めの政策で和蘭政府では妻帯者には種々の便宜を與へて大に歓迎して居るさうである、

六月二日

午前九時に「バタビヤ」を出帆した、

「バタビヤ」市を距る南方二十哩の地に「バイテン、ゾルク」とて名高い所がある、其處には世界第一の植物園であると云ふので世間に知られて居る、此の植物園には殆んど世界中のあらゆる植物を網羅し世の植物學者は一度此を見ざれば未だ植物を語るに足らずとも唱へられて居る位である、「バイテン、ゾルク」は海拔九百呎の山中にある人口約一萬の市街であるが、往年或る和蘭總督が「バタビヤ」の苦熱を忘るゝ爲めに此地に居を移して以來歴代の總督此地に常住し現今では「バタビヤ」よりも寧ろ「バイテン、ゾルク」の方が首府の如くに成つて居る、此地清涼にして景色に富み一度行きし者にて其形勝を嘆賞せざる者はないけれども残念な事には暇が無い爲めに行いて見る事が出来なかつた、

「バタビヤ」は素「ジャガカタラ」と稱へて居つたものである、徳川時代に和蘭の「ジャガタラ」船が毎年長崎に来て居つたのは實は和蘭領なる瓜哇の「ジャガタラ」即ち今の「バタビヤ」から往來して居つたので日本の「ジャガ」薯は此所から來たものと云はれて居る、但し近頃では瓜哇には「ジャガ」薯は甚だ少い、茲に又「ジャガタラ」文とて世にも哀れな物語が有る、寛永十三年に外國人の大部分は國內より放逐せられ續いて十六年の鎖國令にて更に平戸邊に有りし外人の血族の者十一人「ジャガタラ」に追れた、其中に當時十四歳なる可憐の一小女が彼に在ること數年後、明け暮れ故郷へ歸らん事を神に佛に祈りつゝ、月日を送る内、日本戀しさの餘り郷里なる親族の者へ送りたる手紙が即ち「ジャガタラ」文と稱して世に傳へられ見る者一人として涙を催さぬはなく甚だ哀れなものである、頗る長いものであるが左に其全文を掲げて置く、

じやがたら文

千はやふる神無月とよ、うらめしの嵐や、まだ宵月の空も心もうちくもり時雨とともにも、ふる里を出しその日をかぎりとなし又ふみも見じあし原の、浦路はるかにへ

だたれど、かよふ心のをくれねば、

おもひやるやまどの道のはるけきも

ゆめにまちかく、こねぬ夜ぞなき、

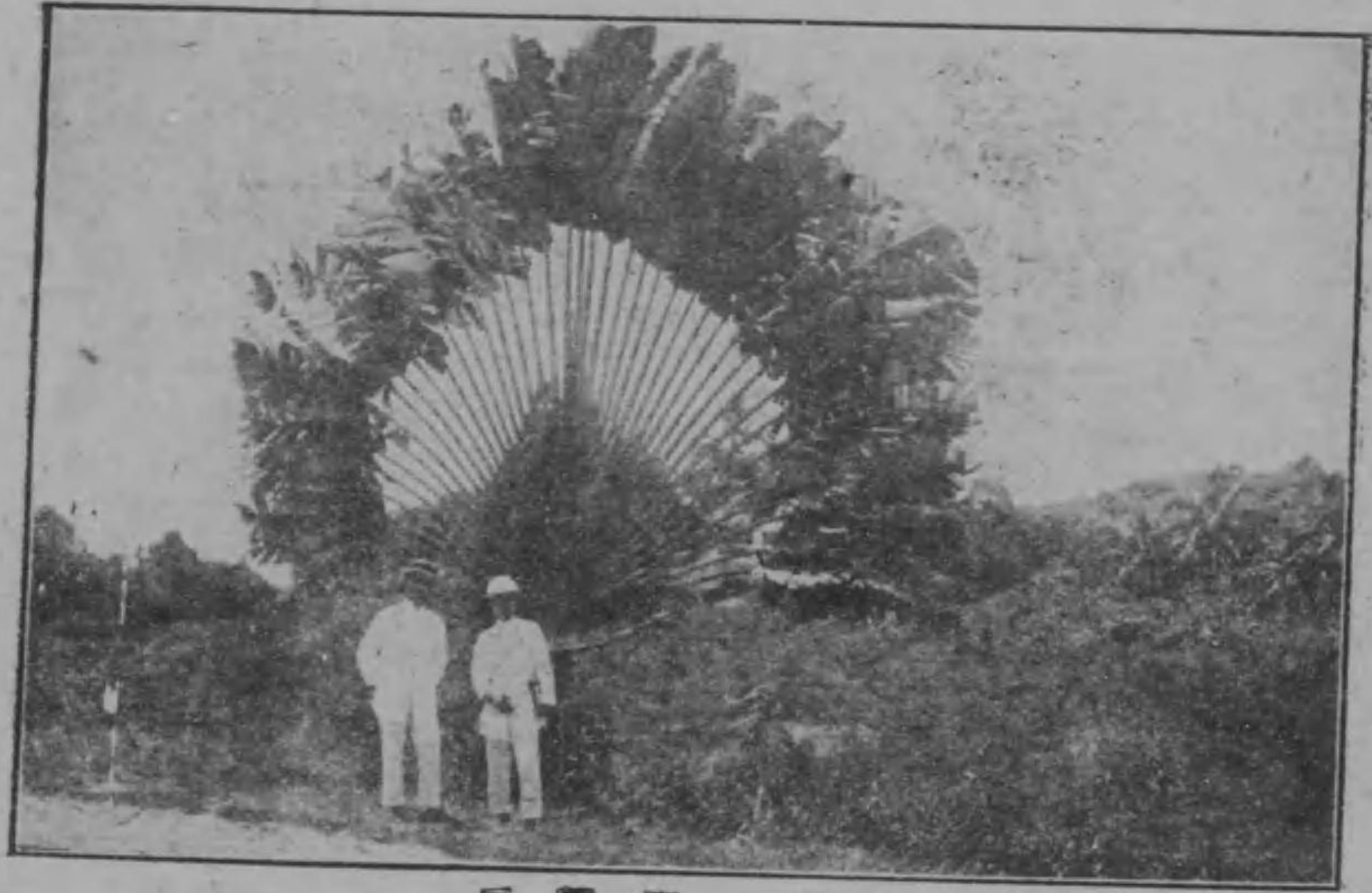
御ゆかしさのまゝ、腰おれかきりりり、前業とは申しながら、かゝるうき世に、かひなき命ながらへ申さむよりは、ただ世になき身となり候はば、いかにうれしからましを、たま／＼花の世界に生まれきて、此身となれる年月をかぞふれば十とせあまり四とせがほどそおほへ候に、かくうらめしき遠き夷の島に、ながされつゝ、きのふとおもひながら、はや三とせの春もすぎ、けふは卯月朔日まだ東雲に、あすは出船と人の聞へつるまゝ、せめて筆の跡してもとそんじ、なみだながら硯にむかひりりり、いまだ夜ふかきほどにて、いたふくらければ、ともし火すごとくと、かゝげつゝ、おもひ出る事共、かきつづくるに、此文のうらやましくも、古郷にかへるよと思へば、我文ながら、ありしよりげにものがなくして、

水くきのあとは、なみだにかきくれて、

むかしを、いかに、人の見ましや、

はづかしながら筆にまかせり。そこもとよりの御文ことに御ゐんしんのごとく
きまいらせ候。まづ御つゝかなく御ざなされ候よし、めでたくそんじり、
さてノ、そこもこの御文くりかへし見りへば、ひとしほく御なつかしき、御
すいもじなされくださるべく候、わが身はいまにつれなき、いのちにて、ながらへ
るり、いつのとき日にか、日本を出りや、いまはさだかにも、わきまへがた
ふ、こなたのとし月にはなぞらへがたく、たゞよるひるとなくふるさとのと、つか
のまも、わすれやらず、おもひなくさむひまも御座なく候、たまたま故郷にて見申
たるに、おなじものとは、月日のひかりこそ、そこもにかわらず候ゆへ、ひる
は日の出るかたをながめ、夜は月の出るかたを打なかめ、袖のかわくまも御座なく
候、かゝる憂世にながらへて、かへらぬむかしをこひしやとのみおもはんより、た
だ此世になき身ともがなごこそ、いのりまいらせ候へ、さりながら又うちかへしお
もひかへせば世をも、人をも、うらむべきにては御座なく、幾萬づの人が此世にむ

まれきたる中に我身いかなれば異國の人の子と生まれ出たる事も、前のむくひあり
てこそとおもひり、しからは今さら世をも人をもうらみ申まじき事にて御ざ候
もにすむ蟲のわれからと、ねをこそながめ世をば恨みじと、二條の后もつらねさせ
給ひしと承り候へば、いさゝか世をも人をも恨み申さず、われからとなくより外は
御座なく候、さりながら此まゝにてはてなんと存申さず候、いま一たび神や佛の
御あはれみにて日本へ歸申べしとこそ思り、たゞへ三月をすぐし侍らで、きへ
果り共、いさゝかくるしからず候、とかくすへは日本のつちとなり候はんとぞ
んじり、あわれく神や佛の御はからひにて今一度御けんに入申たく候とくれ
く念願にて御座候、もしも此世にて逢申さず候は、わが身かねく申たるごと
く、友だちは七世の契と承りりへば、かならずく來世にて、めぐりあひ申べ
く候げにく御かたみの短尺、又おし鳥の羽など、かた時も身をはなし申さず持ち
居りり、必ず來世にては、これをするしにて、めぐりあひ申べく候、又ぞやわ
が身花だんのはなどおぼされて御みせなされ候こそ、しづ心なくきへかへりり



扇子 椰

此花のさかりには、そもじさまこそ、
ながめまいらせ候に、かれくになりは
て、ひとりながむる山ぶきの、こへごこ
たへぬ、いろなれば、そさまの花の袖の
香におくれ、夢の面影を、見ることだ、
もまぼろしに、あふはあふかはもろ共に
つるに消なん露の身の、われや先だつ人
やをくる、うらめしやありし世にだに
戀しかしきを、めがれなく契りしは、
今は何事も、みなあだこと、なり行むか
し、語と成りし事こそ、ふかきおもひ
のたねとあこがれり、あらこひしの
そさまやしのばしの友人や、ひとへ二重

の色のみか、やへ山吹をおくり給ふ、新のいろくちはてすおもへとの御心のうちこ
そ、おしはかられり、

山ぶきの花の千しふはかはるとも

いはぬいろをばわれわすれめや

われらさゝろの中、いさゝか、かはりなふ、くれくおもひり、
もろともに、うゑてながめし山ぶきの

ちりてもはるの、おもかげを見る

なつかしや、こひしや、古郷を出しは、いつの時日にやと、おもへば袖のかわくま
も御座なく候、いやしき夷の島に、すみり、こても、御おもひすてくだされまじ
く候、わが身の露は秋の田の穂のうへてらす、いなづまの光のまもわすれ申さず候
折から雨風のそよぐにつけても、御なつかしきおぼしめし、やられくださるべく候
あまり日本のこひしくて、やるかたなき折ふしは、あたりの海原をながめ候より外
は御座なく候、げにや古き歌に

大そらはこひしき人のかたみかは

ものおもふごとに、ながめこそすれ

と讀し人まも身のうへに、おもひあはせりし。又すぎにし彌生の日家の内の女ばら達みなくあそびに出られ候に、わが身もさそはれ候へ共參申さず候、それにつけてもそのもとの御事共おもひ出りし。そもじさまへ、かやうにわかれ申事、かねてより存まいらせ候は、よるひるとなくはなれ申さず、なれまつび候はんものをいつまでもとおもうものから、有のすさびに、もてなしりし事、今さらく心にかゝりし。わするべき時しなければむは玉のよるはすがらに、ゆめに見へつゝと古きことの葉におしはかりくださるべく候、細々申入たき事濱の眞砂のかすく候へ共、あまりく心みだれ、あどさきわかちかね候まゝあらし申りし。助右衛門様、九郎様同じことに申りし。又ぞやころせん町おかたさまへ文まいらせたく候へ共、出船いそぎ候まゝ、そへ筆申りし。おたつさまへ申入候、何とて御文こまくとあそばしくだされず候や、心もとなく存りし。かならずく此船

のかへさには御文くはしくあそばしくださるべく候、まことに我身居申時とおぼしめしてきくを御見捨くだされまじく候、かならずく秋の比は、こまくとの御文まち入りし。何ぞみんしん申たく候へ共、めずらしき物も御座なく候まゝ、その儀なく候、心ざしばかりにおびすぢ。おくりしんじりし。もはや日本の花などはみなくわすれはて、あらしおぼへ候ものばかりぬひりし。もし人の笑ひ申候は、繪そらごと、おほせらるべく候。又々平太様へ申りし。御無事のよしめでたくぞんじ候、ことに御文うれしくおもひまいらせ候、しかれば何とて毎年御文くだされず候や、そののみふしんに思ひりし。たとへそれがしかたへ文たまひ候はずとも御かはりとは存申さず候、かまひてく此便には御文こまくまち入りし。かやうに申候もせめて御筆の跡なり共ぞんじながめりし。はんまゝ、こまくとあそばしくださるべく候、あらむかしこひしや、かしく

一、おたつ様へ申りし。爰もとあつき國にて候ゆへ、それより持わたりにしをみなくつかいきり候まゝ、ひやうぶきやう一かい、此便におたのみりし。細々

申たく候へ共、筆にはつくしかたく候、下のうばへも申り、すいぶんくそく才に、おはし候へ、わが身もやがて歸朝いたし御げんもじにて申まいらせたく候、あら日本こひしや、ゆかしや、なつかしや、見たやく松かさ、このてがしわのたね、杉のたね、はうきぐさのたね、御いんしんたのみり、かへすぐなみだにくれてかきりへば、しごろもごろにてよめかね申べく候ま、はやく夏のむしたのみ入候、我身事今までは異國の衣しやう一日もいたし申さず候、いこくにながされ候とも、何しにあらゑびすとは、なれ申すべきや、あら日本戀しや、ゆかしや見たやく、

じやがたら

はる

日本にて

おたつ殿 まへる

六月三日

午後一時「サマラン」港着

朝早く目を覺まして甲板に出づれば富士山に能く似た山が見えて居る、瓜哇は臺灣の三倍位の大きさの島であるが、火山系に當つて居るから高山頗る多く地圖を展いて見ると一萬尺以上の山が十ヶ所も有る、臺灣には一萬尺以上が二十一ヶ所あるけれども臺灣のは總て中央山脈の中に有るのだから何れが新高山にして何所が畢祿山なるや容易に見分がつかず雄大なる英姿は一箇も見ることが出来ないけれども、瓜哇に於ては之と異り、火山系であるから高山各所に隆起し、海上より之を望む時は頗る美觀を呈して居る、従つて島内には火山多く地震は終年殆んど絶ゆる時なく、海嘯も亦甚だ多くして時には狭き灣口や海峽等にて急湍となり船舶を苦しむる事ありと云ふ、

「チエリボン」港の後方に「チエリボン」山が有り「サラマン」に近づくに更に又富士山に酷似の山が見ゆる、此所のは二つ並んで居るから、日本人は之を夫婦富士と稱して居る、何れも一萬尺以上の高山にて向つて右側の丁度格好の所に怪しげ乍ら寶永山の如きもあり、裾野が長くて奇麗な所まで真正の富士山にそつくりである、日本から富士

山の標本を取寄せて造つたのではあるまいかと思はれる程に能く似て居る、日本にも本尊の富士山の外に薩摩富士、讃岐富士等外くの小富士山が有るが、瓜哇富士は最も能く似て而も本家程に高い山である、瓜哇にも富士山が幾つもあるものかなど感心し乍ら能く注意して見ると、矢張り日本の富士山程には裾野が奇麗でなく且つ何よりも頭に雪の無いのが物足りない、夫れに瓜哇の山と思ふて頭から馬鹿にして居る故か富士山に對して居る時の様に雄大と威嚴さを感じない、

「バタビヤ」「サマラン」「スラバヤ」港は何れも瓜哇島の北海岸に在つて「サマラン」は「バタビヤ」の東方約二百哩に當り瓜哇では中央の商港である、

「サマラン」は恰も新潟の港のやうに遠淺の放泊港にして、陸から二三哩距りし廣い海上に汽船は碇泊して居るのであるから、大風は絶対に無いけれども北又は北西風の時には波浪の爲めに荷役の出来ない事がある、此邊では一作に雨期即ち北西信風中（十一月から翌年二月迄）は雨が多くて風が吹き天候の悪い日が多い

「サマラン」には支那人及臺灣人多く、支那人には財産四千萬盾（キルダ）を有し瓜哇第一の資産

家と稱する建源號及黃仲涵其他の豪商あり臺灣人にも顏江守、郭春秧の如き有力者がある、郭春秧は大坂商船會社の「サマラン」代理店である、外に日本人約百名其内にて小川南洋潮谷、各商店及日本「ホテル」等がある、總人口十萬人、海上より市街を望めば小高き丘に西洋館が建列んで、なか／＼立派に見ゆる

一体に瓜哇に於ては和蘭官憲にて歐州人と土人との間に甚だしき區別を設け汽車の等級の如きも全然之を別にし土人は恰も奴隸の如くに取扱はれて居る、さうして日本人は總て歐州人同様の待遇とし支那人は土人と同一と云ふ事にしてある、故に支那人は蘭領東印度に於て商權は一手に收めて居るけれども人權は全く零である、のみならず支那人は營業税の負擔までも非常に重く賦課せられて居る、然るに顏江守、郭春秧の二氏は臺灣人即ち日本人なるの故を以て其享くる所の利益は實に莫大なるものであると云ふ、現に「バタビヤ」邊にて船客上陸の際税關官吏が其手荷物を検査するに、支那人であれば非常に苛酷なるに反し臺灣人は船客名簿に日本人とある爲めに寛大であり、又臺灣人が其風采から見て支那人と間違へられ厳しくやられて居る時に吾々が行つて

日本人なる由を述べると官吏は掌を反すが如くに打ち解けて其儘通關せしむるが如き例は珍らしからぬ事である

日本人は斯く歐州人同様に敬意を拂はれて居るけれども、一方又或意味に於て非常に危険視されて居る、賣藥の行商人が軍事探偵と間違ひられたり、普通商人が嫌疑を受けて迷惑をしたり、日本から来る殆んど總ての人が探偵に附け廻されて居ると云ふ有様にて瓜哇に於ける日本人は之が爲めに少からず迷惑して居ると云ふ事である。尤も和蘭が日本を恐れるのは無理の無い點も有るが、日本が果して瓜哇に政治的野心を持つて居るか否やは別問題として、左様な事よりは寧ろ其無盡藏なる南洋の利益を日本人の手に收むる事に努力するのが目下の急務ではあるまいかと思ふ、日本人の勢力を扶植すると云ふ事は如何なる方面から見ても最大の要件である、彼の支那人の如き和蘭人に奴隷視され虐待されて居るに拘らず尙商業の全權を掌れるに非ずや、然るに日本人は南洋に於て最も都合の良い地位にありて如何なる點から見ても日本人が瓜哇方面に發展し得ざるの理由なきに拘らず南洋各地に於て日本人勢力の甚だ徴々たるは實

に不思議に堪へざる次第である

南洋の商業に就ては既に前述せる如くなるが、元來南洋に於ける最も有望なる職業は農業ならば南洋到る所土地豊饒なるに加ふるに強烈なる日光と潤澤なる雨量とを以てし農業こそは實に熱帯地方が誇るに足る唯一の産業である、然れども農業には多くの固定資本を要し日本人は資本に於ては歐州人に及ばざるも廣漠たる南洋の沃野は日本人の開拓に待つべきもの尠からず、且つ歐州人は長所とする所は單に資本の一事に止まるも、日本人は農業に多くの經驗を有するのみならず土人を使役する點に於ても彼等に比し相互に和解し易き得點がある、近頃馬來半島には多くの日本人資本家を見るも瓜哇方面には皆無と云ふも過言に非るの状態である、尤も瓜哇は人口稠密なること世界第一と云ふ程であるから従つて開墾も餘程行き届いて居るが其他は何れの島に行つても今尙は未開の土地のみにて限りなく開墾の餘地がある、彼の米國等に比較すれば蘭領東印度は入國容易にして而も産物多く交通も亦便利なるを以て此際大に南洋方面に日本の勢力を扶植し度いものである

「サマラン」の少し西方なる「チエリボン」港に安部氏と云ふ日本人の成功者がある、空拳瓜哇に渡つて初めは艱難辛苦に遭ひ賣藥の行商等營みつゝありしが勸勉の結果現今にては數十萬の財産を造り盛んに農業主も「タビオカ」の製造に従事せらる、予は未だ面會の好機を得ざるも本船が同地に寄港せし際乗組員の中にて面會して來た人の話に依れば同氏の談として瓜哇にて農業をやれば、椰子「タビオカ」其他如何なるものを營むとも毎年資本の十割の純益を得るは容易である、即ち資金は年々倍額に増加する譯である、さうして土地は何時にても直ちに租借するを得、土人の賃金は一日男廿五錢女十三錢五厘（共に辨當持參である）餘り話が良過ぎて内地の人に話しても本氣で聞く者が無いから常には多くを語らぬ」との事であつた「チエリボン」のみにて尙二三十人の日本人が來る餘地がある、二三千圓の資本を持つて來れば同氏が世話すると云ふて居られるさうな、之は最近の事實談である、日本人の南洋發展には商業よりも寧ろ農業の方が有望である

然れども吾々の南洋行に就て多くの人が最も憂ふる所は南洋の氣候であらう、如何に

も南洋は暑い所である、然し世人は南洋の熱き事を知つて如何に暑きかを知らない人が多い南洋が暑いと云ふのは一年を通じて寒い時が無いと云ふのであつて、決して炎熱焼くが如しと云ふの意ではない

蘭領東印度は丁度赤道直下に位して居るから四季を通じて殆んど氣温に變化なく只一年を二季即ち雨季（十月より翌年三月まで）と乾燥季（四月より九月まで）に分つのみである、さうして雨季には日本に於ける梅雨季の如くに降雨打續き涼風を伴ひ、又乾燥季と雖も時に驟雨沛然として至り炎暑を拂ひ、拂曉に至れば寒さを覺ゆるが常である蘭領諸島に於ける一年中の温度は場所に依りて異なれども最高八十六度最低七十七度平均約八十二度を普通とし、吾々が數回瓜哇に航海せし内九十度に昇りしは單に一回ありしのみなるを以て見るも、南洋が決して酷熱堪へ難きに非ざる事を知ることが出来る、日本内地に在りても夏期百度を超ゆるるは左程珍らしき事に非ず、南洋は臺灣よりも餘程凌ぎ易いと云ふのは確かに事實である、加ふるに學理上日光の燦灼たる熱帶地に於ては黒色人種は最も堪へ易く黄色人種之に次ぎ白色人種は最も堪へ難しと云

ふ同一日光の下に白人と黒人とを立たしむる時は其體温の上昇する時間に甚だしき差異を示し更に其下降に要する時間も亦非常なる相違がある、次に其手を直接日光に曝す時は數十分にして必ず皮膚に炎症を起すも皮膚を黒色又は黄色に塗りて日光に曝す時は此結果を生せずと云ふ、然る時は吾等日本人は文明國民中最も熱帯に適せるの一種と云はねばならぬ、理論は兎に角、南洋が決して炎熱堪へ難きに非ざる事は一度び渡般せし人の齋しく唱ふる所にして彼の強烈にして身を刺し身神を熔かすが如きに比すれば非常なる相違である

六月四日、晴天

「サマラン」にて揚荷が「セメント」茶其他雜貨にて約一千噸である、昨夜十二時迄夜業をして今朝亦五時半から仕事を始めた、外の港では荷物揚卸の人夫は毎朝船に來て夜仕事を終つてから又歸つて行くのだが「サマラン」のみは陸との距離が遠いから往復の時間を節約する爲めに人夫共は本船碇泊中常に船内に泊つて居る、時には船から船に乗り移つて長らく陸に歸らぬ事もある、

「サマラン」の近く「ポロポドル」と云ふ所に名高い佛跡がある、今より千二三百年前佛敎の盛なりし頃の遺物にして石造の頗る大きな塔である、高さ三十間周圍八十餘間全部釋迦の一代記や弟子の傳記等を畫にした精巧緻密なる彫刻より成り見る者一人として驚嘆せざはなしと云ふ、千二百年前既に斯かる大建築をして居る事より考ふれば瓜哇は餘程早くから開けて居つたものと思はれる、但し現今では佛敎は殆んど其跡を留めず只全盛時代の遺物を多く残すのみにては一般に回教徒である

午後五時三十分「スラバヤ」港に向つて「サマラン」を出帆した海上は例の通りに平穩である

六月五日

午前十時頃「スラバヤ」港口に近づき水先人が乗船した、「パタビヤ」「スラバヤ」及「マカッサ」港は強制水先であるから何れの船でも出入港の際には必ず水先人を雇はねばならぬ、港外では和蘭の軍艦が盛んに射的演習をして居る、

午後一時「スラバヤ」港内に着いた

「スラバヤ」は「サマラン」より尙百八十哩東方に在る瓜哇第一の商港であつて、大小の汽船が多数に碇泊して居る。此港は瓜哇本島と「マヅトラ」島との間の海峡内に有つて潮流が非常に速いから船體の操縦が困難である。「バタビヤ」港が大阪に似て居るが如くに「スラバヤ」も亦門司港に能く似て居る、港内水深くして東西に入口あり船舶は何れよりも出入することが出来るけれども港口は浅いから常に浚渫して居る、此港の浚渫船は神戸邊に在るものゝ如くに海底から泥を掬ひ揚げて之を小舟にて他に運び去るのではなくして潮流の速い時に鍬様の機械にて海底を引つ掻き廻し、さうして其の浮び上つた泥が自然に潮流の爲めに洗ひ流されるのである。港口を通過する時に五六隻の汽船が右に左にとその機械を曳き廻して居るのを見た、支那の太沽の河口も之に似た方法で浚渫して居る。

門司の港は地の利と船舶に缺く可からざる石炭を豊富に持ち乍ら遺憾な事には海陸共に甚だ狹隘にして最早や餘地が無い爲めに此の上大築港を經營して世界の船舶を吸引すると云ふ事は到底出来ないけれども「スラバヤ」港は港内も廣く且つ陸上には充分

の平地を有して居るから今後如何なる設備を爲す事も出来る。現に和蘭政府にて大規模の築港を築造中にて倉庫や岸壁等も大部分竣成し既に二三隻位は棧橋に繋留して居る事がある、斯かる状況なるに當港は石炭の無いのが何よりも不自由である。由來瓜哇には石炭が出ないから日本又は「ボルネオ」邊から輸入して來たものを使用して居る従つて價も高き故汽車や小蒸汽等には主にも薪を焚き汽船には重油を燃料として居るものが多い、陸上には官設の船渠及び浮船渠、鐵工所、造船、武器工廠等がある。目下經營中なる棧橋の東側に河流が有つて「スラバヤ」の市内に通じて居る、現今にては此運河の兩岸が貨物の揚卸場及上陸場であつて税關や倉庫等は此所に有る、其又東側に之と並んで軍艦の這入る築港が有る、恰も川の如くに細長く堀つた入江にして入口も奥も至つて狭く眞正面から見ねば有るのか無いのか少しも分らぬ、其兩岸には樹木生ひ茂り軍艦が其中に出入して居るのを遠方から見ると丁度森の中に軍艦が這入つて行く様に見えて頗る奇觀を呈して居る。其中に碇泊して居る軍艦が林の上に橋頭を突き出して其處にも一本此處にも二本と立つて居る、其前を通る時に正面から中の方

を覗くと奥は二又に成つて居つて軍艦や驅逐艇が五隻も六隻も細長い溝の中に並んで居る、大きな軍艦をあの狭い所に能く入れたものだと思はれる程である、「バタバヤ」と「スラバヤ」は瓜哇の要港であるから常に和蘭の軍艦が五六隻位は碇泊して居る、雷艇が列を爲して出港するかと思へば巡洋艦が歸つて来る、森の中には絶へず大小の軍艦が出たり入つたりして居る、日が暮れると毎晩「サーチライト」の射光を四方八方に振り廻す、何の必要があつて斯くも物々しい警戒をして居るのであらう、此所にも獨逸の汽船が四五隻繋留して居る、日本船は本船の外に尙三隻碇泊して居つた、日章旗も亦盛なりと謂ふべしだ

其後大正七年の六月に來た時に日本船最も多く、四川丸、雲南丸、福州丸、浙江丸、有明丸、第二東洋丸(以上大阪商船會社)撒烏丸、嘉代丸(以上南洋郵船)汐首丸、旭丸第二萬世丸合計實に十一隻の日本汽船が殆んど同時に當港に碇泊した、我國海運の發展も亦驚くべきものがある

六月六日

「スラバヤ」にて揚荷が難貨千七百噸と積荷が砂糖及び「コブラ」椰子油等にて約二千噸毎日早朝から土人の人夫が來船して荷物の積卸に従事して居る
瓜哇人は至つて痴鈍にして而も甚だしく怠惰な人種であるから仕事が少しも進捗せず働くのが半分に遊ぶのと居眠りするものが半分と云ふ有様にて、日本人の様な元氣で短氣な者には到底眞面目では見て居られない、どうせ瓜哇人の事であるから、如何に追ひ廻した所で吾々の意の如く働く筈が無く要求する方が無理かも知れぬが、本氣で見れば朝から晩まで疝癢を起して居らねばならぬ、初めの内は正直に叱りつけて急がして居つたが後には根氣が盡きて……夫れで見れば矢張り腹が立つから寧ろ此方から避けて居る位で、瓜哇に來れば一般に斯様なものと諦めて居るより外に仕方がない、さりとて其儘放任して置けば仕事は益々長く成るばかりであるから時々出て行つては狗の兒でも追ふ様に擲り廻して使ふて居らねばならぬ、故に日本なれば三、四日にて充分済む仕事を「スバヤ」では十日間も碇泊し夜業迄もして漸くに終つたやうな有様である

瓜哇人の貯蓄心に乏しい事は又實に甚だしいものである、之は生活が容易で財産の必要の無いのが原因を成して居るのであらうが、彼等は時に金錢の必要を生ずれば所持する物品を格外の安價に賣り飛ばし椰子の樹一本を一盾位（ヤルダ）にて賣る事さへある、一寸考へても馬鹿々々しくつて御話に成らぬ様な事ばかりして居る、だから南洋では土人から意外の安物を手に入るゝ事が多い、予の知人にて「スラバヤ」の近く「バンドン」と云ふ田舎町で雜貨商をして居る人がある、主もに土人相手に日用品を賣つて居るが、土人等には全然貯蓄の觀念が無く十錢手に入れば十錢使ひ二十錢儲ければ直ぐに其二十錢で好みの物を求むると云ふ有様であるから世間は不景氣の時でも田舎の方では相當に賣行があると云ふ事である、尤も此は彼等に貯蓄心が無いばかりでなく痴鈍にして經濟の道に暗いからである、されば彼等が勞働し又は所有の土地から上る収益は殆んど全部支那人と和蘭人とに取られて居ると云ふ有様にて和蘭政府が質屋を官營にしたのも當然の處置であらう

彼等は四時温暖にして變化なき七八十度の氣温に生息し天惠の偉大なる椰子「バナ、」

其他の必需品は居ながらにして直ちに之を得べく飢餓災厄の見許ふこと絶無にして貯蓄理財等の要を認めず慾望なく野心なく至つて平和に樂天的に且つ懶惰放縱にして其一生を全ふし得るのである、彼等が遊惰にして安逸なるは之れ實に天然の然らしむる所にして寧ろ當然の事と云はねばならぬ、生來働く事を好まぬ懶け者は瓜哇に逃げて來て宜しく半人半獸の生活を爲すべきである、故に若し吾々が南洋發展の目的にて渡來し來るも餘程確固たる精神を持つて居るに非ざれば自然彼等に感染し又は氣候や生活状態等の爲めに知らず識らず惰性の人物に墮落して遂に男性的奮闘力を失ふに至るやも知るべからず、吾々が南洋航路に在りて多くの人に接する中に往々右の事實を認むる所である

瓜哇人の經濟觀念が甚だ幼稚であることは既に度々述べた通りであるが彼等の中には今尙古代の物々交換をして居る者多く山間の各驛にては毎週一、二回一定の場所市場を開き地方より珈琲、椰子の實其他の土産を運び來りて鹽魚、雜貨の類と物々交換をして歸ると云ふ事である

云ふ有様である、彼等が金をためる唯一の目的は妻を娶る(即ち買ふ)と云ふのださうな、故に支那では「あなたは何人細君を持つて居ますか」と云ふ奇抜な挨拶が有る、「三人持つて居る」などと云ふのは余程鼻の高い方である、爪哇もも少し寒い國で彼等に支那人の十分の一の勤勉と貯蓄心とを與へたならば少しは人間らしく成るだらう
六月九日、晴天

市内見物にも一度は行いて見度く代理店への用務や食料品買入旁々午前九時頃から多人数にて出掛けた。「スラバヤ」も亦市街と港とは四五理離れて居つて、港の有る所を「ウジョン」と云び其間に輕便鐵道が通じて居る(電車なし)發車時間に少し間が有つたから馬車を雇ふて行く事にした、此處にも「バタビヤ」と同じ様に道に沿ふて河が流れて居つて市内に通じ小舟で荷物を運搬して居る「タンジョン、ブリオク」と「バタビヤ」との間は全然野原であるが、此處は市街に入るまで殆んど人家が續いて居る、流石に爪哇第一の商業地丈け有つて巨商軒を列ね商業殷盛を極めて居る、殊に市内には車馬絡驛織るが如く四ツ角等は自動車と馬車とが行き交ふて通行困難な位である 四ツ辻

には必ず黒衣に黒帽を着けた馬來人の巡査が丁度搗粉木の様な短い棒を提げて立つて居つて絶へず右に左にと指圖をして居る、時に余り混雜する時には其巡査がサツと棒を振り上ぐると四方から列り來る車が一齊にピタツと止まる、其上にて巡査が指圖をして一臺づゝ順々に通行させる、命令に背く者は例の棒で容赦なく擲り着ける、十手を持つた黒人の巡査が馬車に對しては大した權威を持つて居る「スラバヤ」には自動車が四千臺と馬車が一萬臺ある事から見ても如何に繁榮なるか、分る、人口約三十萬人目抜き場所に臺灣銀行及三井物産會社出張所が並んで居る、日本人は約三百人にて福島、潮谷、岡崎、橋本、高橋等の商店が有る、市街は「バタビヤ」の如くに上市と下市の二部に分れ上市は即ち清楚なる歐州人の住宅地にして銀行、諸會社、商舖等は下市にある

代理店「バーンスヒルプ」汽船會社(三井の近所)の前にて馬車を降り先づ代理店への用務を済まし、夫れから市内を徒歩にて買物に出掛けた、此所には珍らしく鳥の市場がある、一部は鶏、一部は小鳥に分れて居つて其内には青あり、赤あり、綠あり、無數

の熱帯の鳥が思ひ／＼の喉を鳴らして居る、鳥の好きな人が来たならば嘸喜ぶ事であらう一丁計り離れて更に青物市場と肉の市場とが在る、青物市場には果物が最も多く其中には時々林檎も見受ける、林檎は南洋に産せず總て亞米利加又は濠洲から輸入して来たもので一箇の價二十錢から三十錢である、珍奇を好むは人情の常にてこんな果物の多い國でも林檎一箇に三十錢も出す人が有ると見ゆる、青物も相當に有るが價高く魚類は至つて僅少である、而も其魚には何故にや總て一面に泥を塗り付けて有る、腐敗せぬとか何とかの理由からであらうが見るからに汚ならしくて氣持が悪い、到底買ふ氣には成れない、事實南洋の魚は肉が柔かで味が悪く殆んど食ふべきものは無い南洋にて食料にするのは肉類と果物と少數の野菜のみである

肉の市場は實に完全なものにて幅四間長三十間位の一棟を周圍は全部金網で張り入口には二重の戸を設けて出入の際に蠅の侵入せぬ様に装置し、瓜哇には不似合な清潔にしてさつぱりしたものである、土人は總て回々教徒にて豚を食はぬから市場にも牛肉ばかりで豚は殆んど見受けない、只僅かに一部の支那人が買ふのみである

市場の中に女の夫が澤山に居つて買物をしたのは其女どもが持つて呉れる、各自に小さな籠を一つづつ持つて居つて買物をして居ると其後から五人も六人もぞろ／＼と附いて来る、品物を買ふ度に其中から一人か二人を雇ふて持たせると彼等は夫れを籠に入れて自分の頭の上に載せる、ごーせ市場の買物の事であるからなか／＼に渉らずあれもこれもと見廻り乍ら二時間余も費してさて後ろを振り向ひて見ると牛肉やキャベツや鶏を頂いた女が何人もぞろ／＼と行列をして居る

不慣な市場の中の雑沓でがつかり勞れてゐに出た時には早や十二時だつた、買ふた品物は料理人と共に先に歸して置いて其邊の賑かな町を一巡りして晝食の爲めに土人の「ホテル」に這入つた、今日は幸ひ南洋通の人を案内に連れて居つたから口に合ひさうな瓜哇料理を二三品取つて見たが美味いとも惡味いとも一寸批評が出来ない午後には二三の日本人商店を訪問し製氷工場や大きな商店等を見物したけれども余り變つたものも無かつた

此所でも目に着いたのは市内を通する河の流れの上、所所に便所が拵へて有る事であ

る、日本で雪隠の事を厩と言ふのは此れから來たものであると云ふ、まさか、さうでも有るまいが「ストラバヤ」でも矢張り其汚物の流るゝ濁水の中で土人が平氣で行水をして居るのには驚く

處變れば風俗も變り色々變つた習慣が有る中に瓜哇の便所も亦日本等とは余程變つて居る、日本人は用便の後にて紙を用ふるが瓜哇や印度の方では紙を使はないで水で洗ふ、瓜哇の「ホテル」や和蘭の客船等に行つて見ると便所の中には必ず「ビール」罎に水を入れて五六本便所の隅に立てゝある、用便がすむと左の手を使ふて之で尻を洗ふのである、だから左の手は不淨なものとして食事の時には決して左手を使はない

便所の話の序だが西洋人は大便に行つた後にて手を洗はない、日本人は一般に潔癖だから便所に行つて手を洗はなかつたならば汚ならしくて逆も何をする氣にもなれないが西洋人は習慣と成つて居るから夫れで何とも無いのだらう、所が面白い事には日本人は西洋人どもが手を洗はないのを見ると厭な氣持がするが西洋人の方では又却つて日本人が便所から出て手を洗ふて居るのを見て汚いと言ふて居る、甚だ可笑しな様で

あるが彼等曰く「日本人は便所から出て手を洗ふて居る、大方指の先に汚物でも着けて來たのだらう……汚い」と、理屈は何とでも付けらるゝものである、全くさう云へば夫れも理由は有るが此れは矢張り洗ふた方が奇麗である、然し公平な眼から見ると瓜哇人の様に尻を洗ふて而も其方の手は不淨として外の時には成るべく使はぬと云ふのが一番奇麗であらう、所が一方河の中では汚物の流るゝ水中で平氣で行水をして居るのだから奇麗なのやら汚くないのやら譯は分らぬ

尾籠な話は先づ此の位にして置いて、土人が行水して居るのを見ると之が又奇抜である、彼等は身體を洗ふても決して後で拭くと云ふ事がない、河の中から這ひ上つて濡れて居る身體を其儘直に着物を着て居る、吾々から見ると氣持が悪るさうで、たまらぬが彼等は平氣なものである、顔を洗ふのにも日本人は兩方の手で水を掬ふて顔を上下に擦るのだが瓜哇人は片方の手で顔を横に撫でゝ居る、丁度左の手に怪我をして一方の手の使へぬ人が右の手ばかりで不自由乍らに顔を洗ふて居るのと同じで實に不格好なものである、さうして矢張り後は拭かないのだから掌で顔を撫でゝは手先を振

つて水を切つて居る、勿論瓜哇には手拭と云ふものが無い、

瓜哇人は男女共に總て「サロン」とて瓜哇更紗の腰巻を巻き、男は「カインバンジャ」とて之を瓜哇更紗の恰も日本の風呂敷と同じ大きさの布を頭にぐるぐると巻いて居る、下級の労働者等は「サロン」の代りに股引を穿ち鉢巻を持たぬ者もある、足には時に靴又は「スリッパ」を履いて居る者が有るけれども、多くは男女共に跣足の儘である、

腰巻と鉢巻とは彼等の唯一の財産にて腰巻は必ず二枚づつ、持つて居つて毎日一回は洗濯するから、品質も上等で色も褪めぬ様に染料を吟味し其模様は一々蠟を以て描き樹皮の煮汁にて之を染め一日蠟を洗ひ去つて又更に他の模様を描き且つ染め且つ描き、斯くして幾回となく繰り返して仕上るのであるから、決して褪める様な事はなく洗濯する毎に却つて色合が良くなる、従つて價も高く安いのも三、四圓から上等になると數百圓まである。布地は金巾である、日本人には柄が向かないけれども女の帯かうである、兎に角珍しいから日本への土産に二三反買入れた。

住宅町の方に行くに此所は又下市とは別天地にて、例の和蘭人の瀟洒たる家が木の間に涼しげに建つて居つて町全體が丁度公園の様である。珍らしい庭樹を眺めつゝ川端に出て並木の道を歩いて居ると橋の所で路傍の樹に長さ四尺周圍二尺位の古木を吊下して有るのを見た、一行中の南洋通に何物なるやを尋ねて見ると火災の時に此を敲くのだと云ふ、日本の半鐘の様なものだらう、試に「ステッキ」の先でちよいと突いて見ると成る程コンコンと良い音がする、田舎の方に行くに毎日此で時間をも報ずると云ふ、瓜哇方面には市内でも田舎でも所々に必ず此が吊して有る、瓜哇には又惚れ薬と云ふ珍奇なものが有るさうで思ふ人に之を振り掛くれば其人忽ち身に悪寒を感じ發熱を覺へ心神恍惚として戀情燃ゆるが如くなるに至ると云ふ事であるが僕はまだ見たことが無い。

歸りには市内から輕便鐵道に乗つた單線の鐵道にて五、六輛宛曳いた汽車が約三十分間毎に運轉し、どの汽車にも、常に土人と支那人が満員で窓から頸を出してウヨウヨして居る、初めの内は土人どもは「汽車に乗ると壽命が縮まる」とか言ふて容易に乗ら

なかつたさうだが今では便利なものだから多く之を利用して居る、一、二等は歐洲人及び日本人のみにて土人や支那人の乗車を許さない、三等(土人用)などは汚い箱の中にぎつしり詰め込んで居るのだから丸で動物扱である、先日「バタバヤ」にて瓜哇の二等は日本の三等よりも、まだ汚い事を経験したから今度は一等に乗つた、機關車のすぐ後ろに在つて甚だ狭く矢張り不潔である、更に驚くのは、煙筒が非常に短くて入口の戸を開けると煙は全部車内に吹き込んで来る、出入の際には急いで戸を閉めるにしても尙兩方の窓から煙がどんく舞ひ込む、汗の流れる頸筋に石炭の黒煙には少からず閉口した、さりとて熱帯地の汽車旅行に窓閉め切りも容易ならぬことで、何れにしても人間の乗れる汽車では無い、

而して其煙筒が又甚だ不格好なものにて罐から一尺か二尺位付けてあるが但し夫れは機關車の屋根までにて屋根から上には一寸も出て居ないから事實上煙筒は無い様なもので機關車の屋根から直ちに煙を吐き出して居る、此では兩側の人家でも毎日随分迷惑して居る事だらう、加ふるに市内の狭い道路を其儘に片方に寄せて線路を敷いて有

るのだから家の前を直ぐに汽車が通る譯にて甚だ危険な話である、何故早く電車に替へぬのかと思はれる、瓜哇では石炭が不自由だから汽車は主にも薪を焚いて居る、「ウジョン」にて通船に乗り換へ歸途港内碇泊の旅順丸に一寸訪れて午後四時頃に歸船した。

六月十日。

「スラバヤ」には五日から十四日迄十日間も碇泊して毎日變化なき同じ様な日を送つた初めの内こそ好奇心もあるが一度行いて見れば左程珍らしい處でもなく、且つは船務が忙がしいのに、取紛れて其後は一度も上陸しなかつた。

「スラバヤ」の西方に當り四五哩を距てし海岸に「グッセ」港とて小さな町がある、「スラバヤ」から同町に到る郊外五哩の間に一大養魚池が有つて其面積頗る廣く池は大小區々に別たれて海水及淡水を導き稚魚を放養して居る、其他瓜哇には各地に養魚池が多い、多分其處で取つて來た魚に泥を塗り付けて市場に出して居るのであらう。

一體瓜哇は甚だ漁夫の少い所である、漁獲の方法も一般に幼稚にして不完全なる建網

と一本釣位のものであるから其漁獲の高も亦至つて僅かなものである、然るに瓜哇では野菜を栽培せず魚類が重なる副食物であるのに漁業の發達せざると、氷及鹽の價高くして生魚の運搬が自由ならざるとに依り土人は多く乾魚と鹽魚とを食用として居る故に人口多大なる瓜哇に於ける乾鹽魚の輸入は實に莫大なものである、鹽魚は主に安南方面から輸入されて居る。

土人の常食は矢張り米飯である、色の黒い瓜哇米のぼろ／＼した飯を皿に盛り其中に野菜も魚もごちやく／＼に入れて之を右の手で攫んで食ふのが彼等の食事法である、左の手は便所に行いた時に尻を洗ふのだから食事の時には決して使はない、日本人は食事をするのに右の手でも左の手でも一向差支は無いのだが、瓜哇人と一所に飯を食ふ時に、何氣なく左の手で物を取ると顔をしかめて厭がるさうである、下級の者は副食物には小さい鹽食一、二匹と唐辛子を三つ位にて殆んど飯ばかりを食ふて居る、日本米の殘飯を與へても柔かでべた／＼指に着くから五本箸には都合が悪いらしく土人は餘り好まない。

六月十一日、「スラバヤ」碇泊中、晴天、

吾々が南洋に來て最も喜ぶのは暴風が絶無である事と今一つは果物が豊富に得らるゝ事とである、南洋に於ける果物の種類は實に數へ切れぬ程澤山に有るが其内でも、果物の王と呼ばれるのは「マンゴス、チーン」で最も有益なるは「ココア、ナット」(椰子の實)次に四季何時にても最も多く愛用せらるゝのは矢張り「バナ、」である。

「マンゴス、チーン」は濃き紫色の柿に似たる形にて其中に美しい純白の實が密柑の房のやうに抱き合つて這入つて居る、之を口中すれば恰も下關名物の淡雪の如く須臾にして融け去り其馥郁たる芳香は何に喩へん物もない、殊に此果物は數十箇を味ふも決して胃腸を害せず且つ他の熱帶地には發生する事なく瓜哇附近に於てのみ産する點に於て「マンゴスチーン」の價値がある。

「バナ、」は馬來語で「ピーサン」と云ひ田舎の隅から隅まで植つて居つて小は小指の大きさより大は腕位の物に至る迄其種類實に七百種に及び、平常市場に出て居るの丈けでも九十六種類あると云ふ事である、其内には「ピーサン、スス」(「ミルク、バナ、」の

意)の如き美味なものも有れば中には又團子を食ふが如く何等の味も持たないものも有る。瓜哇では二六時中常に「バナ、」を喰て居る、瓜哇に来て「ピーサン、スス」を食ひ慣れると臺灣の「バナ、」などは不味くて食へなくなる、瓜哇では「バナ、」の價が非常に安く、十錢も出せば持ち餘す程澤山に有るのだが船に賣りに來るのは臺灣位に高い。椰子は熱帶植物中最も有益なるものにて其實は、果物として食用にするよりは工業用又は食品の原料として海外に輸出するもの、方が主である、椰子の實は、其堅き、外殻の中に一合五勺乃至二合位の無色透明なる液汁があつて之を飲用する時は少しく酸味を帯びて甘味あり之に一、二滴の「レモン」を加へて用ふる時は更に美味にして熱帶に於ける最好飲料である。

椰子樹は實に南洋に於ける重要植物の一にして其種類甚だ多く、其葉を以て家を葺くに用ふる「ニツバ」椰子、樹液より砂糖を作る砂糖椰子、種子の胚乳より油を採る油椰子、其實を噛むに用ふる檳榔子、庭樹にして見事なる肩椰子等、其他實に一千種に達すると云ふ、中にも古々椰子は最も有益なるものにて葉の頭より幹、果實は云ふに及

ばず、根の端に至るまで一として用ひられざる所なく其幹は木材として家屋又は器具を造り、其葉は家を葺き、蓆を織り、帆を製し、籠を作り、花の甘露は採取せられて椰子酒となり、根は尿通劑として用ひらるる、而して最も價値の有るものは、矢張り果實であるが、大約人頭大にして厚さ一寸五分内外なる纖維質の外殻を有し其内側に更に厚さ二分位の堅殻が有る、多く細工に用ひられて居るのは即ち此である、尙内側に三、四分の厚さに白き肉(胚乳)が着いて居つて此れが一番大切な部である(次に委しく記載す)丁度林檎の實の如きものにて左程美味ならざるも調理して食用にもなり、又大根の如く、おろしても用ひらるる、而して其内に充滿して居る水が即ち普通飲用にせらるるものにして、此液汁は頗る滋養に富み病後の衰弱等には態々取り寄せて用ふる人さへ有る、尙此果實の未だ熟せざるもの及び半ば熟せるものは各々藥用に供せられ、汁液は腸病の醫藥として土人間に用ひらるる、又果皮の纖維は繩を作り箒となし「ブラシ」を製し、堅殻は「コップ」に代用せられ土人間の量器となり其他種々の器具を製し又火力強き燃料として歓迎せらるる、然れども此等の用法は素より椰子栽培の

主たる目的に非ず椰子の最も有益なる部分は其肉即ち胚乳であつて之を果實より剥ぎ取つて日光にて乾燥する、「ココブラ」と稱するのが即ち此である。

「ココブラ」は之を壓搾して油を採り其絞り糟は家畜の飼料と爲し、油は或は食用とし、燈火用とし、機械用とし、又は精製して「バター」と爲し、工業用としては石鹼の製造等に供せらる。椰子油ココナツトオイルにて製造せし石鹼は特殊の泡を出し、且つ鹽水中に使用するも効力著しき特徴がある。斯の如く「ココア、ナツト」油が食用としては「バター」や菓子菓子の原料となり、工業用としては石鹼又は蠟燭の原料となり、或は機械用として廣く利用せらるゝに至りし結果、大に世間の注意を惹き「ココブラ」の格價は甚だしく昂騰し之が製造業者は「ココブラ」の買入に奔走し、其海外輸出は年一年に増加すると云ふ有様である。近頃神戸(兵庫新川)にも椰子の製油工場が出来て、日本にも輸入し來るもの多く本船等も毎航海多量の「ココブラ」を積載する、斯く「ココブラ」が廣く利用せらるゝに至りしは今度の歐州戦争が始まつてからの事にて且つ今後南洋に於ける最も有望なる産業は實に椰子樹栽培であることさへ謂はれて居る。

椰子の實は斯く有益なるものであるが、但し南洋に於て最も有名なる果物は寧ろ「ドリアン」であらう。「ドリアン」は「ジャボン」位の大きさにして言語に絶へたる甚だしき惡臭を發し、其外皮は樹の皮の様に堅く之に金米糖の如くに太い刺トゲが一面に生へて居る、高さ三、四十尺の枝頭に生じ其下を通行する者の頭上に墜つる時は往々にして大怪我をする事が有ると云ふので土人は痛く之を恐れて居る、現に此難に遭ふて頭を割り肩肉を裂いて死に瀕した者さへ有ると云ふ、其實はドロ／＼とした黄色い「ク्रीム」の様なものであるが、甚だ美味なれども惡臭猛烈なる爲めに、初めての者は口にすることは愚か容易に近所にも寄り付けず、傍を通つてさへも氣持が悪くなる程である、けれども南洋の土人が財産を傾けてまでも好む程の果物であるから瓜哇に來た土産話に一度は味つて見度き好奇心にて誰でも初めは眼を閉ち鼻を撮んで漸くに之を口にすも何分甚だしき惡臭の爲めに、未だ味を試みるに至らずして直ちに吐き出し、あわてゝ口を嗽ぎ、口中を清め、「此れは、とても、やれん」と云ふ者が多數である、否、夫れ位なら、まだ良いが一寸でも口に入れて見る様なのは、餘程元氣な者にて、餘り

臭が悪い爲めに好奇心にも物好きにも、てんで初めから、側にも寄り付けぬのが十中八、九人である、其鼻孔を刺激し、胸を悪くし、頭がふらくする様な厭な悪臭は到底、筆にも舌にも形容する事は出来ない、但し之を味ふに最初の一瞬時を我慢して、先づ一箇を味ふ時は初めて其美味なるを知り二回目には初め程の勇氣を出さずとも食へる様になり、遂には其悪臭が少しも鼻に付かず食ふて居ると匂ひ等は更に氣に掛らぬやうになる、瓜哇に長らく、住んで居る人でさへも、此果物ばかりは食へぬ者が大部分であるのに僕が「ドリアン」を食ふたと云ふので盛んに同僚に笑はれたものである但し決して上品な果物で無いから紳士の食ふべきものでは無い、唯好奇心にて（僕のは此の記事を書き度い爲めの研究心もあつて）一度食ふて見たまでの事である。瓜哇人の如きは「ドリアン」の出盛りには其甘味を飽喫せんが爲めに家産を賣つて願みない者が有り、又戀人に意中の眞情を訴ふる青年は必ず「ドリアン」の實を愛する乙女の門に捧げると云ふ事である。一寸考へると、こんな悪臭のする果物の一体どこが良くて、そんなに人々が夢中に成るのであらうかと思はれるが「ドリアン」の味を覺へて

之が平氣で喰べらるる様に成れば早や一人前の南洋通にて、其鼻持のならぬ悪臭が慣るれば少しも氣に掛らぬのみか、寧ろ之に誘惑せられ「ドリアン」を割つて居ると其臭ひの爲めに近所に居る人は味覺を興奮せられて垂涎三尺忍び難く妙齡の婦人と雖も二階からのこゝろ降りて來るに至ると云ふ、さても恐ろしき果物である。

「マンゴス、テーン」は味美なれども淡泊上品なるに反し「ドリアン」は濃厚にして人を魅するの味である、一は耽るも溺るる所なく、一は貪れば飽く所を知らない、瓜哇人の如きは「ドリアン」中毒とて阿片に似たる中毒を起し、之なくしては居られない者が有ると云ふ、「マンゴス、テーン」が果物の女王クイーンと讃へらるゝならば「ドリアン」は當に果物中の悪魔とでも謂ふべきであらう。

茲に又形體の最も大なる點に於て「ナンカ」と稱する果物が有る一名「ジャック、フルート」と云ふて恰も冬瓜トウモロコシの如き形を成し、大なるものは長さ二尺重量五貫目から六貫目位のものがある、此の果物の生り方は頗る不格好なものにて櫛に似た木の枝も葉もなき幹の中腹から出し抜けに下つて居る、其實は全面に小さい瘤のある厚き皮を有し

て一種の臭氣を發し之を切り割る時は丁度鳥糞トイロコの様な粘り強い粘液があつて中には菊の花を重ねた様に無數の黄色い總が充實して居る、之を口にすればシャキ／＼として甘味有れども慣れない内は其強烈なる臭が鼻に附いて食へぬ者が多い、瓜哇では之を小さく切り割つて少しづつ切賣をして居る。

此の果物に就て面白い話がある、「マカツサー」にて本船に乗船せられた或る船客が船員への土産にとて「ナンカ」の實を一つ持つて來られた、何分大きな果物であるから方々に分け與へた上に尙二、三日間は毎日食卓に出た、食堂では常に果物類は食事の初めから容器に盛つて「テーブル」の中央に飾つて有るのだから、食事の度びに「ナンカ」の臭ひが室内に満ちて居る、然るに生憎な事には船員の中にて「ナンカ」の臭ひを厭ふ者が一人有つた、されど船客よりの折角の御厚意なれば、そんなことは顔にも出さず目の前に置いてある「ナンカ」の惡臭(?)を忍びつゝ辛ふじて食事をすまし、尙御交際に他の果物と共に……心の中では随分苦しい思ひをして「ナンカ」をも少しづつ食ふて居つた、所が一方其船客はそんな事を夢にも知る筈が無いから「南洋でも色々の果物

が有りますが中には臭が悪かつたり味が口に合はなかつたりして吾々には食へぬのが澤山に有りますが此の「ナンカ」なれば左程臭も悪からず、日本人の口にも適して居ります」と得々として自分にも之を食し他の者へも勸めて居られた、南洋に長らく居つた人だから慣れて居らるゝのだらう、僕は好きと云ふ程でもないが、素より嫌ひでも無いから喜んで大に頂戴したが嫌ひな人は實は甚だ難有迷惑だつたさうで之は後での笑ひ話である。

其他の果物は「マンゴー」「ババイヤ」「木瓜」「ブレットド、フルート」、「ジャンプ、ウータン」等が重なるものにて尙其外に數へ切れぬ程澤山に有る、但し「バイナツブル」のみは最も危険なる果物にて下痢を起し疾病を生ずる事ありとて餘り用ひられない、罐詰か又は之を調理して用ひなば安全であらう。

熱帶地にて一番多く目に着くのは矢張り椰子の樹にて南洋到る所如何なる離れ島に行くも椰子の生へて居らぬ所はない、海岸にある椰子の實が熟して自づと墜つる時、海中に入りて之が風のまに／＼流れ漂ふ時は其實は海中に有り乍ら中より芽を生じ波に

採まれつゝも次第に生長して居る、さうして夫れが數ヶ月かの後或る島に流れ着いたとすれば、其實は其處にて立派に一本の椰子の樹となり、更に子孫を生じ、遂には其島に椰子樹が繁殖する事になる、故に如何なる離れ島にも椰子の樹の生へて居らぬ所はない、椰子の實は其自体内にある液汁を滋養にして芽が成長するのであるから、相當に大きく成るまでは水を灌いでやる必要がなく、如何なる砂地や岩の上にも平氣で成長して居る、椰子の實の芽の出たのを日本に持つて來ると、なか／＼珍らしいものである、冬の間だけ温室に入れて置けば日本でも随分大きく成るものである。

初めて南洋を航海する時には太平洋中に「ニツバ」椰子(多く家を音くに用ふるもの)の大本が流れて居るのを見て驚かされる、海岸に茂つて居る「ニツバ」椰子の大きな株が浪の爲めに根から洗ひ流されて、ぶら／＼と大海に漂ひ出るものが澤山にある、椰子の樹は鹽水を厭はぬから、海の中にある間にも決して枯れる様な事はなく、其葉は常に縁を成して、樹は次第に成長して居る時には枯れた古木が流れて居る事もある、之を海上遙かに望む時は帆船でも走つて居る様で、初めて見る者は何が浮いて居るのかと

思ふて甚だ不思議に感ずるものである。

六月十二日。

瓜哇は蚊の多い處であるが幸な事には海の上には餘り飛んで來ぬから船内では蚊帳を用ふる事は少い方である、夏期、名古屋港碇泊中、無数の蚊軍來襲して身を置くに所無きが如きに比すれば遙かに樂なものである。

鼠が「ベスト」の傳染を媒介するが如くに蚊にも亦「アノフェーレス」と稱して「マラリア」の原始虫を持つて居るものがある、普通の蚊は壁に止まる時に平たく止まつて居るが「アノフェーレス」は頭を着けて尻を壁と直角にピンと立て、居るから一見すればすぐに分る、故に南洋では「マラリア」の豫防上、假令、蚊の少い所でも蚊帳を用ひたが安全である、「アノフェーレス」は近頃日本にても時々見る事があると云ふ、多分船に附いて來たもので有らう、但し南洋に於ても之を見る事は殆んど無い、「アノフェーレス」を見つけたならば、直ぐに殺して置かねばならぬ。

南洋に於ける病氣の重なるものは、麻刺里亞と脚氣が最も多く次には「アミーバ」赤痢

虎列刺等である、南洋は病氣の發原地にして常に惡疫が流行して居るやうに思ふて居る人が有るけれども事實は決して然らず、夏ばかりの國であるから少し位の傳染病は年中絶ゆる時なけれども惡疫猖獗を極むるが如き事は殆んど無い、唯、傳染病の絶へ間が無いと云ふのみである、何故熱帶地に比較的傳染病が少ないかと云へば南洋では日本等の様に氣候に變化が無いから暑く成つたからとて水や氷をがぶぐ飲んだり、又は秋口に涼しく成つて寢冷をしたりする様な事なく即ち不養生をする事と氣候に冒される場合が無い故、却つて病氣に罹らぬのではあるまいかと思ふ。

脚氣は東洋人特有の病氣にして日本人には之が爲め困る人も澤山にあるが外國に行いて居る間は米飯を成るべく用ひぬ事として且つ生水を決して飲まぬやうにして居れば幾分豫防の出來ぬ事もなく、尙外國人醫師には脚氣病に經驗を持つて居る者が少いけれども、輕いのなれば「アンチ、ペリペリン」の注射等にて素人にでも治療が出来るから左程恐るる程の事も有るまい、而して「マラリア」には特效薬及其豫防薬として「キニーネ」が有つて、假令此病に冒さるゝ事あるも夜間充分に發汗せしむれば大抵は二

三日で全快するのが普通にて、臺灣に永らく住んで居る人等は「マラリア」ならば心配する事はない、放任して置けば治る」と云ふて居る位のものである、本船乗組員の如き數回瓜哇に航海せし内にて單に二、三の「マラリヤ」患者を出せし位にて一般の健康状態は甚だ良好である。

瓜哇の山中には「マラリア」の特效薬なる「キニーネ」を多量に産する處が有る「キニーネ」は幾那と云ふ木の皮から取るものにて、海拔五千呎内外の山中一年中寒暑の差が十度を超わす霜の降る事なくして雨量の多い所に産し、瓜哇にては其木皮を乾燥して和蘭又は獨逸に送り之を精製して薬用にするさうである。

六月十四日、晴天。

午前六時「スラバヤ」を發し、正午「プロボリンゴ」に着す。

「プロボリンゴ」には砂糖積載の爲めに入港せしものにて定期寄港地に非ず荷主の便宜を計り「スラバヤ」碇泊の日時を利用して特に廻航したものである。

此邊一帶に砂糖の産地にて無數の製糖會社が各所に散在して居る、瓜哇にて砂糖の出

來るのは東半部のである、「プロボリンコ」は「ストラバヤ」の南東約五十哩 人口二萬餘の小都邑にして、港と云ふ程の設備もなく、人夫等も「ストラバヤ」から連れて來たものが船内に寝泊りして居るのであつて、丁度北海道の積取りと似た様なものである。六十名の人夫が晝夜船内に居るけれども、前にも述べたやうに瓜哇人は一般に温順であるから比較的静かにして且つ最も感心なる事は彼等が決して喧嘩口論をせぬ事である、未だ曾て土人が喧嘩して居るのを見た事が無い、之を支那人等と較ぶる時は實に雲泥も雷ならざる相違である、瓜哇には昔から盜賊と云ふ者がなく、家には戸締りをしてない所が多いと云ふのを見ても如何に醇樸にして福徳圓滿なる國であるか分る。六月十五日、「プロボリンコ」碇泊中、晴天

毎日解舟にて運んで來る砂糖を人夫等が本船に積入れる、砂糖は百七十斤位づ、麻袋に入れたのと約五百斤づ、竹籠の中に芭蕉の葉を敷いたもの、中に入れたのことがある籠の中に砂糖を入れたら、ばらばら洩れ出ではしまいかと案じられるが重量大なるにも拘らず至つて堅固にて而も決して出るやうな事はない。

人夫どもは晝夜共船内に居るのだから仕事の暇々には常に賭博にはばかり耽つて居る、或る日晝飯の後にて二、三十分間の休憩に例の通り遊びに熱中して仕事に掛るのが少し後れたから七八人輪形に陣を爲して居る所に飛んで行いて其前に並べてあつた金も骸子も皆な蹴り散してやつた所が狼狽して金を拾ふて走り行く内に他人の金までも持つて行いた奴が有つたと見えて「其金は乃公のだよ、こつちに出せよ」「な——」におれのだよ」と云ふ様な事で口論を始め甚だ滑稽を演じた事があつた。

六月十六日。

土人と一所に働いた御蔭で大分馬來語が分つて來た。

馬來語は至つて覺へ易き言葉にして語るに易く單語等には英語と殆んど同じきものあり、文法も簡單にて、當地の人の話に依れば普通三、四ヶ月にて充分用務を辨じ得るに至ると云ふ、「マカツサー」の河原商店では日本から新たに店員が來た時には必ず初め二三ヶ月間土人ばかり居る所に遣つて置くと云ふ事である、さうすると、是非共言葉を覺へねば用事が辨せぬから専心勉強して三ヶ月もすれば大抵一通りは話せるやう

に成つて來ると言ふて居られた、之は、なかなか良い思ひ付である。
六月十八日、快晴、平穩。

午前十時「マカツサー」港に向ひ「プロボリンゴ」を出帆した。今日が瓜哇最後の港「ス
ラバヤ」出帆の定期日にて瓜哇も愈々之にて御別れである。

陸岸に沿ふて東の針路を取りつゝ航走すれば雄大なる高峰の山麓より斜面をなして海
岸に至るの間、雜木密生して、無数の製糖工場は到る所海上より望見し得べく、其高
き白き煙筒は航海者に取りて無上の好目標である。

總じて馬來群島は風致の佳絶なるを以て名高く、中にも瓜哇は世界の公園と云はれて
居る位である、さうして又瓜哇の内でも此の邊は殊に樹木生ひ茂り最も風光明媚の地
である、或る時「プロボリンゴ」の東方五六哩なる「カラカ、サーン」と云ふ所に碇泊中
一日暇を得て「ボート」訓練旁々陸地に到り「ボート」を河の中に漕ぎ入れ馬車に乗つて
田舎道を走りしに到る所手入の行き届きたる道路の兩側數哩に渉る並木あり、幹は電
信柱の如くに高く伸び枝は幹の上部より水平に長く走り枝頭に實の生る綿の木あり、

茫々たる田地には稻既に實りて長き穂を垂れ、「マングローブ」樹の繁茂せる叢林に蔽
はれし沼澤所々に散在するあり、樹木は海岸や河岸の水中より生ひ茂り、路傍には鬱
蒼たる竹林あり、亭々たる椰子樹は其の緑の葉影を汀波に映し、後方には我芙蓉峰に
も比すべき莊嚴なる威容を望み、眞に世界の公園なる語の偽ならざるを感じた。

南洋に於ては土地豊饒なると氣候良好なるが故に植物の生長すること甚だ速く、樹木
を植ゆるには單に雨期中に挿木するのみを以て足り、竹の如きすら挿木の方法にて移
植する事が出来る、されば人類にありても亦之と同じく其出産率は十二、三人の子女
を有するが普通にして少きも尙五、六人を下らずと云ふ、如何に萬物の生育に適し且
つ發育力の旺盛なるかを推知し得べく且つ南洋が不健康地に非ざる事をも知る事が出
来る、此地方では又殆んど電信柱なるものを見ず總て路傍の樹に針金を張り之に電線
を吊して電信柱の代用にしてある。

我が朝鮮臺灣の地勢が西方は低地遠淺なるに反して東方沿岸は斷崖絶壁より成り殊に
臺灣東海岸の如きは海中より屹立數千尺の岩壁一目人を驚嘆せしむるが如き絶勝の地

あるが如くに瓜哇島も亦北方海岸は概ね低く樹木繁茂せるに反し南方沿岸は殆んど岩礁斷崖の地ばかりである、此の地方にては直下する斷崖の間、曲折せる巖窟の裏に食用に供する鳥の巢を多量に産し、瓜哇人は巧みに巖壁を攀ち或は体軀を繩に縛り付けて荒れ狂ふ怒濤の眞上に至り鳥の巢を探るを業となす者が有る、此鳥の巢は即ち支那料理に名高い燕巢である。

六月二十日

航海中は海上平穩にして殊更に記すべき事もなく午後七時頃無事「セレベス」島「マカツサー」港外に到着した、夜間は入港を許されぬから港口にて「マカツサー」の夜景を眺めつゝ明朝を待つことゝなつた。

「セレベス」は五つの半島が集合した、K字形の奇形島にして其面積七萬五千方哩（臺灣の約五倍）赤道直下に位し南洋諸島中地味最も肥沃なりと稱せられて居る、人口は甚だ稀薄にて一平方哩の平均僅かに廿六人、島内は殆んど未開の状態である。

「セレベス」の土人には北部に「アルフル」人「ミナハサ」人南部に「マカツサル」人「ブギ

ス」人等であるが尙此外に中部山地には「トラヂャ」其他の蕃族が有つて「トラヂャ」は今尙、誠首の風あるのみならず、血を啜り其肉及腦漿を啖ふを以て有名である。

「マカツサル」人は性質温順なれども勇敢にして氣概に富み蘭人の壓迫に對しては常に反抗を試み、内地にありては争鬪が絶へないと云ふ事である、然し日本人には一般に好意を持つて居る、或時彼等の一團が叛旗を翻して山に籠つた時に、日本人某氏に其の參謀たらん事を懇願して來たさうである、此れは「マカツサー」に居る或人から聞いた話にて近年の事である、更に本島北部「メナド」港の「ミナハサ」人は此地方にて最も開化せし人種にして甚だ日本人に類似し其生活程度も他の土人に比べて遙かに高く、風儀正しくして徳義を重んじ、殊に本邦人を敬慕することは實に豫想外にて自ら「我等の先祖は日本人と同じ」と言ふて居るさうである、南洋の土人は殆んど回々教徒ばかりであるが「ミナハサ」人のみは耶蘇教を信じて居る。

「ミナハサ」洲は其氣候や人種が日本に似て居るばかりでなく、土人の言葉も亦日本語と似て居るものが多く中には婦人の名に「オタケ」「オキク」などゝ云ふのさへ有ると云

ふ、而して其氣候、風景、風俗等實に理想的極樂郷にして先年大谷伯が南洋に渡航せられし際「メナド」の風光が非常に御氣に召された由にて、同地に土地を買入れ家を建て暫らく滞在せられたと云ふことである。尙同伯は將來「メナド」港にて椰子を栽培し「コブラ」の製油工場を經營さるゝさうで既に多くの人が「メナド」に行いて居る。

「ミナハサ」人は島原の亂にて遁れ渡航せし者の子孫にて日本人の種であること云ふ説があるけれども又一説には「ミナハサ」州が開けたのは島原戦争以前の事にて之とは全然關係が無いと云ふ人も有つて事實判明しない、然し「メナド」の人種や風俗が非常に能く日本に似て居る事は事實である。

六月二十一日、

天明早々に港醫の檢疫を受け水先人が乗船して棧橋に横着した。

「マカツサー」は一吋外に類の無い珍しい港で暗礁や淺瀬を利用した天然の良港である、港と云へば長崎の如く、深き灣内に在るか、又は横濱、大阪の如く防波堤を圍らして風波の侵入を防ぐか、然らざれば基隆、打狗等の如く天然の入江に人工を加へて

碇泊船の安全を計り海陸の連絡を完全ならしむるが第一の要件にして、新潟、直江津、酒田等の如き風浪有るの日は交通忽ちに杜絶し時には船舶の碇泊さへも危険となり佐渡に避難せねばならぬ様な事がある、此等は港としての價値は甚だ薄弱なものである然るに「マカツサー」港を見るに灣に非ず一の防波堤なく一直線の海岸を其儘繋船岸壁即ち棧橋に築造して夫れに汽船は一列に横着けして居るのであるから、其前面には二三の小島散在するも一見渺茫たる大海原にて沖より風の來る時は波浪直ちに港内に打ち寄せて碇泊さへも危険なるべきに棧橋に繋留して居る船は一時もたまらず打ち碎かれん様思はれて如何にも不思議なれば、代理店の西洋人に尋ねて見た所が、此の前の海上數哩(約二十哩の間)は殆んど暗礁と淺瀬のみであるから時に風吹き浪立つ事あるも此等の暗礁は能く波浪の侵入を防ぎ港内碇泊の汽船は更に困難する事が無いと云ふ事であつた、實は以前から海圖を展いて見て、そんな事であらうとは思ふて居つたが今斯くと聞いて其事實なるを知つた、暗礁も亦處に依つては有益なるものである、港内は至つて狭く多くの汽船が一時に碇泊する事は出來ないが長さ五百米突の棧橋に

は同時に五、六隻の汽船を繋留するを得、陸上には倉庫完備し更に五百米突の第二棧橋は之が北方に續いて將に竣工せんとして居る、和蘭政府にては尙第三第四の棧橋をも計畫中との事である。

港内に三隻の沈没船が在つて何れも只其檣頭のみを顯して居る、一隻は火災の爲めに沈没せしものにて、まだ船体も新らしいから此は日本海事工業會社の手にて解体して引揚中である、今一隻は、波浪の侵入を防ぐ爲めに故意に沈めたものであると云ふ、此所にも獨逸の汽船が三隻逃げ込んで繋船して居る、獨逸汽船は何れを見ても五、六千噸の實に堂々たるものばかりである、開戦以來早や四ヶ年間空しく此所に碇泊して居るのだらうが其損害のみにも莫大なものであらう、平和に成つたら直ちに乗り出す積りにや常に人を掛けて盛んに手入をして居る、蘭領東印度各港に遁入繋船して居る獨逸汽船は「バタビヤ」に七隻、「スラバヤ」に四隻、「マカッサ」に三隻、其他合計四十二隻十九萬三千噸である。

當港にて揚荷が雜貨百五十噸、積荷が「コブラ」高瀬貝(神戸行)籐(香港行)其他にて約四百噸、入港すると直ちに土人の人夫が來て荷役を始めた。

午前十時頃、用務を帯びて棧橋のすぐ前なる代理店に行いた、三階の事務室に上つて用談を済ました其後で和蘭人が「見晴しが良いから一寸眺めて見よ」とて立ち上つて窓外の廻り廊下に出て行くから一所に附いて出て見ると、港内を眼下に見下し、碇泊せる大小の汽船は手に取るが如く、向ふは見波す限り洋々茫々たる大海原にて水天彷彿たるの間二、三の島嶼が所々に散在するを望み、更に港内右方眼下なる小島には樹木生ひ茂り翠綠方に滴らんとして水は鏡を展べたるが如く、琵琶歌の文句ではないが綠樹影沈んで魚木に登るの風情である、島上木の間隠れに社を忍ぶ小さき家が見ゆる、日本に於ては多く見るの景色なるも、外國にては珍らしき眺めである、斯かる所にて觀月を催しなば又一入ならんと、一人興に入り嘆賞しつゝ辭して船に歸る。

「マカッサ」市は人口約五萬、「セレベス」島に於ける、首府にして且つ南洋通商の咽喉部に位し數線の定期航路は此所より四方に延長し、商業極めて殷盛つある、されば將來益々發展の見込ありとて和蘭政府にても大に望を屬するもの、如く之が設備に努

めて居る。

市街は公園を中央にして商業地と住宅町とに整然と區別され、棧橋の前面は即ち商業區にて大小の商家軒を並べ中にも支那商店が最も多數を占めて居る、日本人には川原支店を主たるものとし木村「ホテル」其他雜貨商等約二百人である、公園の一隅海岸に面せる所に棧橋と並んで古き城砦がある、土塀を高く圍らし尙其外周には元濠が在つたらしき形跡があつて正面入口には今尙橋の形を残して居る、之は「ロツテルダム」と稱し昔「ホルトガル」人占有時代に「ゴア」王の爲めに築城したものであるが其後和蘭に奪取せられて以來兵營となり現今にては「セレベス」駐屯軍の根據地である、現今「マカッサ」王は當地から約一哩距りたる「ゴア」村と云ふ所に閑居して居るが昔の威勢は全く地に墜ちて今では土人にすら其存在を忘れられて居ると云ふ有様である、或時「ゴア」村を見物に行いたのに「マカッサ」から馬車で約二十分位の所にて至つて偏鄙な田舎である、如何に落魄しても舊「マカッサ」王の住宅と云ふのだから堂々たる構へであらうと思ふて居つたのに事實は豫想に反して、家は大きいが不潔極まる古い建物に

て見るも哀れな住ひである、中に這入つて見ると薄暗い廣い室内に塵は山を成し、床板は朽ち破れて、ウツカリ歩いて居ると足を踏み込みさうである、下僕ども乞食ども分らぬ穢い男女が澤山出て来て金を呉れと言ふ、どうしても田舎の古寺どしか思はれぬ、「サルタン」(王)は内に居るか」と問へば「今日は「マカッサ」に行いて居る」と答へた途中道路の両側の土人小屋に住んで居るのが昔の老中や旗本の子孫であるさうな公園の周りに官廳、病院、學校、俱樂部、其他「ホテル」等の建物が並んで居る、公園から南方は總て住宅地にて街區整然、加ふるに道路の両側には「タマリソド」や「カナリ」樹等を植へ並べ、枝葉繁茂し相重りて蒼空を掩ひ、日光の直射を遮り、其兩側には和蘭人の瀟洒たる洋館が廣き邸内の茂みの中に涼しげに建列んで居る、右に行いても、左を見ても總て斯の有様なれば一見市内なるや公園なるや疑はしき位にて實に南洋に於ける理想的市街である。

夕方仕事を終つて六時半頃から自動車を雇ふて「マカッサ」の東方約二哩なる「タロ」村と云ふ所に行いた、「タロー」河に沿ひし寒村なれども、河中に鱷及大蜥蜴が多

めて居る。

市街は公園を中央にして商業地と住宅町とに整然と區別され、棧橋の前面は即ち商業區にて大小の商家軒を並べ中にも支那商店が最も多數を占めて居る、日本人には川原支店を主たるものとし木村「ホテル」其他雜貨商等約二百人である、公園の一隅海岸に面せる所に棧橋と並んで古き城砦がある、土塀を高く圍らし尙其外周には元濠が在つたらしき形跡があつて正面入口には今尙橋の形を残して居る、之は「ロツテルダム」と稱し昔「ホルトガル」人占有時代に「ゴア」王の爲めに築城したものであるが其後和蘭に奪取せられて以來兵營となり現今にては「セレベス」駐屯軍の根據地である、現今「マカッサ」王は當地から約一哩距りたる「ゴア」村と云ふ所に閑居して居るが昔の威勢は全く地に墜ちて今では土人にすら其存在を忘れられて居ると云ふ有様である、或時「ゴア」村を見物に行いたのに「マカッサ」から馬車で約二十分位の所にて至つて偏鄙な田舎である、如何に落魄しても舊「マカッサ」王の住宅と云ふのだから堂々たる構へであらうと思ふて居つたのに事實は豫想に反して、家は大いが不潔極まる古い建物に

て見るも哀れな住ひである、中に這入つて見ると薄暗い廣い室内に塵は山を成し、床板は朽ち破れて、ウツカリ歩いて居ると足を踏み込みさうである、下僕ども乞食ども分らぬ穢い男女が澤山出て来て金を呉れと言ふ、どうしても田舎の古寺としか思はれぬ、「サルタン」(王)は内に居るか」と問へば「今日は「マカッサ」に行いて居る」と答へた途中道路の両側の土人小屋に住んで居るのが昔の老中や旗本の子孫であるさうな公園の周りに官廳、病院、學校、俱樂部、其他「ホテル」等の建物が並んで居る、公園から南方は總て住宅地にて街區整然、加ふるに道路の両側には「タマリソド」や「カナリ」樹等を植へ並べ、枝葉繁茂し相重りて蒼空を掩ひ、日光の直射を遮り、其兩側には和蘭人の瀟洒たる洋館が廣き邸内の茂みの中に涼しげに建列んで居る、右に行いても、左を見ても總て斯の有様なれば一見市内なるや公園なるや疑はしき位にて實に南洋に於ける理想的市街である。

夕方仕事を終つて六時半頃から自動車を雇ふて「マカッサ」の東方約二哩なる「タロー」村と云ふ所に行いた、「タロー」河に沿ひし寒村なれども、河中に鱉及大蜥蜴が多

く棲んで居るので名高い、水上に建てたる、川端の茶屋にて暫らく休息した、「マカツサー」から遊びに来る人が多いと見へて露臺には「テーブル」や椅子を並べ、河幅二百間ばかりなるが兩岸には「マングローブ」樹が根を水中に浸して枝葉水面を掩ひ、眺望甚だ佳絶である、生憎今夜は月の無いのが何よりも遺憾であつた 附近に鹽田が在つて天日僅かに三日間にて結晶すと云ふ、途中道路の兩側には椰子其他の樹木繁茂して枝葉は頭上に垂れ、緑の「トンネル」を走る、如く南洋の旅行は田舎の道に最も趣味が多い、此邊でも矢張り市内の外は一切電信柱を用ひず總て路傍の樹木に電線を吊して電信柱に代用してある。

土人の家は椰子の幹を柱にし、木造平家の瓦葺にて、地上五尺乃至一丈位の所に床を設け正面に梯子を置いて出入して居る、此等脚の長い南洋の家は到る所の椰子林の中に散在して海岸や沼澤等に「マングローブ」樹が水の中から生ひ茂つて居るが如くに土人の家も亦水の中に建て、あるものか澤山にある、椰子の木蔭に床の高い脚の長い家は衛生的でもあり且つ如何にも涼しげに心地良きさうに見ゆる

「マカツサー」に歸つて市内住宅町等を一巡りした、市内には何にも見るべきものは無いが住宅町に入つて「カナリ」樹の並木道を走る時最も爽快を感じた、再び公園に歸つて自動車を降り公園の前なる「ホテル」に這入つて緑樹の蔭、廣廣たる公園に面したる「ベランダ」に腰を下して暫らく休憩した、南洋では如何に上等の「ホテル」にても「ボーイ」は總て土人ばかりにて而も頭には例の布をぐるぐると巻いて鉢巻を爲し加ふるに何れも跣足の儘である、「ホテル」の「ボーイ」は何所の國に行つても白い洋服を着た綺麗な男ばかりかと思ふて居つたのに此は又甚だ意外である、鉢巻をした色の黒い跣足の「ボーイ」ではどうも對照が悪い

歸りには徒歩にて市内を見物し十時頃に歸船した「マカツサー」は商業般盛なるも工業は至つて幼稚にて單に椰子油製造所と製氷工場とが各一ヶ所在るのみにて其他は土人の鍛冶屋が二三軒ある位のものである

119 「タロー」河を渡つて尙先方に行くと、日本の耶馬溪が、木曾の山中にも比すべき景色の良い所が有つて、自動車で二三時間走る間は山水明媚にして山は奇石怪巖を以て成

り、溪泉の水勢岩石に激し、其奥には瀧が落ちて居ると云ふ事である、自働車で河を渡るには渡し舟の大きいのが無いから土人の丸木舟を二三隻並べて其上に板を敷き四五十人の者が来て自働車を其上に乗せ、さうして河岸を傳ふて充分河上まで曳き昇せ置き、さしも速き激流を下り斜に小さい櫂を操りつゝ巧みに向ふ岸に漕ぎ着けると云ふ事である、更に歸りにも亦四五十人の者が右の通りに數時間を資して渡して呉れて其賃金が勿驚往復にて大枚一圓とは如何に田舎とは云へ實に安いものである

此の地方には「アモック」と稱して面白い習慣が有る、此は難局に陥つて自殺するの己むなきに至つた場合に、近くに居る者を誰彼の差別なく手當り次第に斬り倒して冥途の道連れにすると云ふ奇習にして、日本人は腹を切り、英國人は額を射り、さうして「ブギス」人は此の「アモック」を以て最も名譽ある手段として居る、例へば借金が返せなく成つたり又は賭博に負けて妻子を奴隷にせねば成らぬと云ふ様な破目に立ち至つた場合に、世を怨み人を怨み總ての人に復讐して然る後に自分も共に死に就かうと云ふのであつて、理性を失ひ我を忘れて刀を抜き放ち先づ目前に居る人を刺す、更に狂

ふて大道に走り出で血刃を振つて遇ふ者毎に斬り付ける、忽ち「アモック」の叫び起り附近の家は戸を鎖し、人々は槍、刀、鐵砲等を携へて彼に馳せ向ふ、本人は力の有らん限り狂ひ暴れて、老幼男女の差別なく當るに任せて斯つて廻り、遂には多數の人の爲めに斃さるゝに至るのである、時には又多數の者が心を合せて「アモック」をする事があつて、そんな時には非常な騒ぎに成ると云ふ事である「マカツサー」の東方は最も「アモック」に名高い所にて毎月一、二回は之を見ざる事なく、其度に多くの人々が殺傷されると云ふ、實に物騒千萬な話である

六月二十二日、雨天

夜半から降り出した雨がまだ止まない

「マカツサー」は小鳥の多い所にて中にも、鸚鵡、鸚哥インコの類が最も多く、田舎の方に行くと鸚鵡が群を爲して畑を荒しに來ると云ふ事である、吾々には珍らしい鳥であるから船員の誰も彼もが鸚鵡や鸚哥を買ひ取つて忽ちにして船内は小鳥屋の様に成つてしまつた動物でも自分に飼ふて居るのは矢張り可愛いもので、あちらでもこちらでもお

早ふ、今日は、お竹さん等と夢中に成つて教へて居るが、少しでも真似をするやうに成ると自分の小兒が片言を言ひ始めた時程に喜んで居る、僕も知人に頼まれて居つたから鸚鵡を一羽買ひ求めたが、忙がしい者には到底鳥を相手に「お早ふ」も言ふては居られず「ボーイ」に預けた儘である

人の真似をするのは九冠鳥が最も巧妙で、言を言ふ事でも笑ひ聲でも殆んど人間と同じ様に出来るのが有る「そりや聞へもせぬ傳兵衛さん」位の事をやるのは左程珍らしくない、けれども九冠鳥は飼ふのに面^{おも}到で且つ盛んに暴食をして病氣に罹り易く、餘程注意しないと死ぬる事が多い、鸚鵡なれば身體も丈夫にて玉蜀黍や殘飯等で飼ふ事が出来るから容易である、羽の奇麗な鸚哥にも矢張り人の真似をするのが有る、「マカツサー」で鸚鵡を買ふても馬來語ばかりしか知らぬから更に日本語を教へ込まねばならぬ、尤も言を言へる様に馴れて居るのは非常に高いから寧ろまだ馴れて居らぬ若いのを買ふて來て段々に馴らすのも却つて樂みなものである、日本に持つて歸ると冬の間を餘程注意せねば寒氣の爲めに死ぬる事がある、日本人が毎航海澤山鸚鵡や鸚哥を

買ふて行くものだから「マカツサー」では日本船が入港すると直ぐに鳥の値段が上ると云ふ事である

茲に又極樂鳥とて黄色にして羽毛には麗はしき斑紋を備へ五彩燦爛として眩^{まは}き程美しい鳥が有る、主にも剝製にして歐米に輸出し婦人の帽子の飾りにされて居る、甚だ高價なものにて一羽の價二十盾から百數十盾である、或時當地河原支店支配人佐藤要氏が本船に乗船せられし際紀念にとて本船に一羽寄贈せられたが箱子の箱に入れて今尙食堂に飾つてある、極樂鳥は飼養する事の出来ぬ鳥で、且つ人里離れし山奥でなければ住んで居らぬから吾々は剝製の外生きて居るのを見る事が出来ぬ、此鳥は主にも「ニューギニア」で捕つたものである

午後一時「マカツサー」港を出帆した、復航には「マカツサー」海峡即ち「ボルネオ」島の東海岸を北上し再び「サンダカン」港に到り夫より香港及臺灣を経て日本に歸國するのである

「ボルネオ」の附屬島にて「マカツサー」の向ひ側に當る所に「セブク」と云ふ南北二十哩

東西五哩の小さい島が有る、此島は全山殆んど鐵礦にて約二億噸の鐵を有し其他「ボルネオ」の南東部には金銀「ダイヤモンド」等の鑛山が無數に在ると云ふ事である（久原鑛業會社員某氏談）尙「ボルネオ」の東海岸にて「バリック、ババン」は有名なる石油產地にて一ヶ月の産額二十萬噸中に一日一井にて一千噸を噴出するもの有り云ふ、南洋郵船は「バリック、ババン」にも寄港する

「ボルネオ島」は面積二十一萬三千方哩 我本州の約二倍にして世界第二の大なる島なるも人口甚だ稀薄にて一平方哩の平均僅かに六人である、内地に到れば今尙「ダイヤモンド」を稱して決闘を好む癡猛暴惡なる蕃人が住んで居つて全島殆んど未開の蠻地ばかりである

「ボルネオ」の土人は往古の時代から鐵細工に妙技を有して良劍を作る事極がめて巧みで此は其鍛鍊に際して鐵を硬化するに特效ある木炭中に入れて熱炙するから、鐵は其硬化に必要な炭素を吸収するが故であると傳へられて居る
六月二十四日、航海中、晴天平穩

午前四時四十三分に赤道を通過し再び北緯の地に歸つた、午前四時と云へばまだ眞夜中にて當直の人以外は皆夢の内であるから、赤道通過も今日は何等の注意をも喚び起ささなかつた

六月二十五日

朝早く「ベット」の上に頭を擡げて舷窓から外の形勢を覗いて見ると、本船の左舷々首間近かに他の汽船が一隻本船と並行して走つて居る、洗面後、船橋に上つて兩眼鏡を取つて見ると旅順丸である、旅順丸とは「バタビヤ」以來再三再四出會したが、其後彼船は石油産地の「バリック、ババン」に寄港して同じく日本に歸る復航の途中である、山さへ見へぬ大洋の眞中で又も逢ふとは餘程縁の深い船と見ゆる、旅順丸は元郵船會社の米國航路船であつた、速力速くして客室の設備も整ひ其頃では日本で有名の大汽船であつた、其後大阪の船主某氏に賣却せられて目下日本船瓜哇間の定期航路に従事して居る

一般に汽船が二隻以上並行して航走する時には多くの場合、競争は免れぬものである

船が速いからとて左程自慢にも成らねやうなものの、矢張り少しでも他船より速いと云ふ事は氣持の良いもので、假令同じ會社の姉妹船で而も乗組員は御互に心安い友人の間柄であるにしても随分競争をする事が多い、他會社の船とならば互に負けぬ氣が起り且つは人氣にも關する事であるから競争するの價値あり又實際競争に力も入ると云ふものだが同じ會社の船仲間競争して何になるかと云ふやうなものゝ、そこは人情で、なか／＼負けては居らず、後では笑ひ話にするにしても其場合にはどうしても競争は免れぬ、況して他會社の船と近づいた場合には當然の事と云はねばならぬ、競争の時には船員よりも寧ろ船客の方が力を入れるものにて中にはビールを持ち出して火夫に提供する人があり、時には又甲板に出て叫び廻る人さへある、軍隊でも乗つて居る時には最も盛んに野次らるゝ、斯くて随分激烈な競争をする事が有る。

今恰も本船と旅順丸とが並列して勢ひ茲に競争が持ち上らねばならぬ場合に立ち至つた旅順丸は老ひたりとは云へ昔は日本で鳴らした程の客船である、本船は新造早々（實は處女航海）であるけれども元來貨物船として作られしものなれば従つて速力も多

大ならず旅順丸とは到底競争に成るまいとは既に「スタバヤ」碇泊中からの定評であつた、故に初め本船の方では競争しやう抔とは更に思ふて居なかつたのだが、兩船の距離が段々近くなるから試みに速力を増して見た所が二三時間にして遂に追ひ付き兩船は甚だ僅かの距離に於て並航する事に成つた、茲に至れば先方とて一生懸命にて最大速力を出し（實は先程から旅順丸でも極力氣張つて居る事は安全瓣からポツ／＼と蒸汽を出して居るのを見て想像される）こちらは勿論の事「今卅分だしつかり焚け」とばかりに機關長は大に火夫を激勵し、其結果本船は見る／＼内に旅順丸の先に進み初めは一問二問より次第に半身船丈けと追ひ抜き兩船の船客船員は互ひに甲板に出で、向ひ合ひ勝ち誇つて笑ふ者と残念らしい顔色が次第に遠ざかつて、遂に本船は見事に旅順丸を追ひ越し夕方には既に數哩後方に距つて相別れた、但し先方では或は競争する積りでは無かつたのかも知れない

六月廿六日 晴天

午前九時卅分「サンダカン」港に着す

當港にて積荷三百五十噸と船用炭三百噸を積入れた、積荷は全部香港行にて籐 椰子の實を主とし燕の巢、蟻の蟻、白檀の木等である、其内燕の巢と蟻の蟻とは支那料理に用ふるものにて白檀は藥の原料である

「サンダカン」には往航既に寄港して一通りは見物し、田舎町なれば重ねて見に行く程の所にも非ず、今回は上陸しなかつた、船の傳馬船(ボートに非ず)を卸して港の中を漕ぎ廻り久方振りに櫓を押して汗びつしよりに成つた、南洋の内では「サンダカン」が一番暑い所である

「サンダカン」の代理店は「ダービー」と云ふ英國人である、戦争前には外に有力なる獨逸人が居つて盛んに各方面に取引を爲し之が爲めに「ダービー」は甚だ振はなかつたのが戦争の爲め其獨逸人が當地を引揚げて以來「ダービー」の一手となりて近頃は大に發展して居ると云ふ事である、「ダービー」は本年裁判所の隣に大きな事務所を新築して引き移つた、獨逸人の勤勉にして而も其勢力の盛大なりし事は今更驚くの外は無い、昨年、南洋殖産會社にて「サンダカン」の附近に一萬五千英町の土地を「ダービー」から

買收して椰子の栽培をして居る、面積は甚だ廣いが開墾して有るのは、まだ僅かにて土人六七十人位を使用し本年春頃から「コブラ」を輸出して居る、主もに神戸行である此れから追々と日本人も増加する事であらう、「タワオ」の久原農園は其開墾の方法頗る大袈裟にして、之に要する費用も亦實に莫大なるものであるが、之は外の者にては眞似の出來ぬ仕事である、然し南洋殖産の様に初め地方の土人のみを使用して少しづつ、開墾し追々手を廣げて行くのも亦費用が掛らずに最も堅實なやり方であらうと思ふ「サンダカン」から日本の土産にして珍らしい物は沈香、椰子の實の芽の出たの、蘭植木等である沈香は頗る上等が有るけれども容易に手に入らない

初めにも既に述べし如く「ボルネオ」政府は収入の多き事を第一の主眼として居るが故に税關の如きもあらゆる物品に課税せざるはなく、甚だしきは植木一本野菜一籠にまでも税金を掛る輸出入共に元價一圓以上のものは全部税金を取ると云ふのだから、故に乗組員の食料にとて薯の二三斤も買ふて來れば早や税金が掛り、沈香や白檀を少しばかり買ふて來ても税金を取られ、知人への土産物に菓子箱の一つも持つて

上陸すれば之にも税金を取る、而も其税金と云ふのが僅かに一錢とか二錢五厘とか云ふので有つて、價値の有る品物なら兎に角、つまらぬ物に僅か一錢や一錢五厘の税金を取られるのが實に馬鹿げて居るから「此の位の物」フリー」で通して呉」と云ふてもなか／＼に聞き入れず時には癩に障つて叩き付けてやり度く成る事がある、時には又土人の監視共が徴收した税金を着腹して直ぐ目の前で分けて取つて居る事さへ有つて之では全く癩に障らすには居られない、だから其時と人に依つて税金も取つたり取らなかつたりで一定せず、初めから税關長の西洋人に逢ふて頼むと大抵の物は無税で通して呉れる

六月二十七日、快晴

朝食の膳に向ふて居る時に甲板で水夫共がバタ／＼と走つて居る、何事が起つたのかと出て見ると十歳位の土人の小兒が二人で小さい丸木舟に乗つて鰐を一匹持つて來て居る、成る程此は珍らしい、所が其鰐もまだ小兒にて漸く四尺位しかない、食ひ付かぬ様に、口に輪を嵌め頸に綱を着けてある、色々交渉の結果、遂に二弗ど(約二圓三十

錢)で船長が買ひ取つた、小兒の事だから大枚二圓の金を握ると大喜びで飛んで行つた「サンダカン」は非常に鰐の多い所にて土人さへも決して海に這入らない、但し鰐一匹二圓は甚だ安い、甲板に引上げて見ると鱗がピカ／＼と光つて實に柔順なものである、然し餘り悪戯をして居ると、時には尻尾でびしやつと叩かれる、鰐は尻尾が唯一の武器で如何な猛獸でも一度之で叩かれたら駄目と云ふ事である、大きな箱に水と砂とを入れて其中に飼ふ事にした、餌は何を與へても少しも食せず魚を釣つて生きて居るのを入れてやつても見向もしない、(此鰐は基隆の水族館に寄贈した)

午後一時「サンダカン」を出帆し香港に向ふ

船客・貨物共滿船滿員で尙其外に席が無い爲め斷つたものも澤山に有つた、船員としては積荷や船客の多いのは多忙では有るが又景氣の良いものである

一等船客の内に小猿を一匹携帯して來た人があつた、此の猿は頗る珍らしきものにて身體の割に手足が長く、顔も手も足も尻も蝙蝠の如くに眞黒で、毛襦子か天鵝絨の様に黒き光澤を有して柔かである、毛は灰褐色にして長くサラ／＼として居る、歩くに

決して四足を用ひず、何時も人間の様に後足のみにて立つて居る、けれども常に木から木に渡つて居る猿であるから歩くのは至つて下手にて長き兩手を振り廻しつゝ、調子を取り乍ら辛ふじて歩いて行く有様は實に滑稽極まるものである、實は其歩き方が一番可愛らしい所で之が又此猿の價値プライである、其代りに一度木にぶら下る時は巧みなものにて總ての態度や手足の有様等が蝙蝠と甚だ能く似て居る所から遂に此猿公は猿と蝙蝠との相の子だらうと云ふ事にした、其相の子先生が又實に良く人に馴れたもので人さへ見れば誰彼の差別なく兩手を差し出して抱いて呉れと言はぬばかりに縋り付いて来る、猿でもかう成れば可愛いものである、之は「タワオ」の久原農園で生捕つたものである

鵬鵠や鵬哥、文鳥の類ばかりでも數十羽居つたのに、今日又鴈を買入れ、猿が仲間入りして甲板上は、さながら動物園の如くである、毎朝箱の中の鶏が曉を告ぐれば鵬鵠までが「コケッコ」と言ひ出した

六月二十九日、航海中、晴天

午前九時半に菲律賓群島を離れて支那海に出た、海上には少しくウチリあれども風和かに天氣亦晴朗にして、船内和氣霽々春の如く、一同元氣旺盛である、一昨日「サンダカン」で乗船した相の子君が方々に飛び廻つてお愛嬌を振り蒔いて居る

七月二日

五月初めに神戸を出帆して以來既に六旬、多趣味なる南洋諸島を一巡して本日無事香港に歸着した、尙香港の夜景、臺灣の事情等記すべき事多々あれども、其は南洋鵬航記の範圍にあらざれば後日に譲り、左に英領北「ボルネオ」及蘭領東印度入國手續其他必要なる諸規則と初渡航者の爲めに爪哇旅行案内とを附記して茲に筆を擱く。

附 錄

諸規則及旅行案内

蘭領東印度は瓜哇「マヅラ」島と外領とに區別せられ、外領とは瓜哇島及「マヅラ」島を除くの外總ての蘭領諸島を云ふ、瓜哇島及「マヅラ」島は人文日に開けて人口稠密なれども外領は之と異なり何れも人口稀薄にして未開の地のみなれば其行政規則も亦同一ならず、又各地に入國する住民も（一）和蘭人又は歐洲人及其對等者と（二）土人及其他の亞細亞人との二種に區別せられて兩者其取扱を異にす、日本人は明治三十年九月發布せられたる日蘭新通商航海條約に依り歐洲人と同等の待遇を受け其入國及居住に關しては一八七二年總督府令三八號の規則に準用せらるゝことゝなれり尙ほ蘭領東印度は政府の直轄地と土人自治州（政府と土人會長との間に締結せられたる統治上の契約により自治を許されたる地方）とに區別せられあるも行政の大綱

は當領政廳の掌裡に存するを以て住居證を所有する本邦人にして土地を租借し或は鑛山採掘をなし或は伐木權を得んとするに當りては地方廳に測圖並に願書を提出し然る後、當領政廳の許可又は認可を受けざるべからず、然るに支那人往々誤解し土人自治州に於ては單に會長の承認又は許可を獲得すれば即ち其權利を確定したるものと推定して事業を企て着手後數年を出ずして沒收せられ、爲めに意外の損失を招きたることありと云ふ然れども養豚業に要する地域の如きものにありては必ずしも政廳の許可を経ずして地方官の黙認を得れば可なり但し將來大なる事業を企つる場合にありては必ず政府の承認又は許可を得て後始めて投資せざるべからず 想ふに政府は地方土人の保護上其利益を害せざる限り政治上其他に於て別に重大なる意味を存せざる場合外領に於ては一般に許可するの方針なるものゝ如し

一「パウ」と稱するは我約二千坪に當る

第一、爪哇在留民須知要項

(大正四年七月一日在「バタビヤ」帝國領事館告示)

(一)土地所有權の事

當領に於ては小面積の土地を除き土人以外の者に土地の所有を許さず但し土人以外の者も或る條件の下に之が貸下を受くることを得小面積の土地とは市街宅地、製造所建設地を指すものにして十「パウ」以下に限る其他の官有地にありては借地料を仕拂ひ七十五年以内の期間永借する事を得

尙は無資産にて田地若しくは畑地の小規模耕作に従事せんとする者に對しては有利なる條件を以て十「パウ」以内(必要の場合には二十五「パウ」迄擴大するを得)の土地の賃貸を許し政府は特に其開墾に關し便宜に供與するの規定あり(本規定並に手續等の詳細に關しては「バタビヤ」印刷局 Agrarische Begelungen を参照せられたし)

即ち栽培等を目的とする土地の賣買の到底不可能なるも和蘭東印度會社時代及英領時代に於て土人以外の者の所有する所謂私有地は今尙は各地に存し之等は當事者協定し

買取ることを得べく従つて土地所有權を繼承し得べきものなり

外領土地租借を許さるべきものは爪哇に於けると同じく和蘭臣民、和蘭住民、蘭領印度住民又は和蘭又は蘭領印度に設立せられたる商事會社たるを要し租借料は登記後六ヶ年目より毎年一「パウ」に付一盾以内を納入すべきものなり

外領官有地永租借規定譯文は昨年六月十一日付を以て「スラバヤ」「マカツサー」「ボンチアナ」「メダン」及「バダン」各日本會に回送せり必要の仁は各會に就き照會せられたし

(二) 鑛業權の事

鑛山試掘及採掘權を取得し得るものは和蘭人、和蘭又は蘭領東印度住民及和蘭若くば蘭領東印度に於て蘭法に準據し設立したる會社にして重役の過半数は蘭國臣民若くば蘭領東印度住民たるを要す、又或る地方特に島嶼にありては私人の採鑛を許さざる所なり

(三) 漁業權の事

當領水産法規中重要なるものは眞珠貝及海鼠漁規定にして其他一般的漁業としては獨り「リョ」洲内に地方的規則存する位に止まり即ち同州に於ては邦人にして地方官の許可を得て漁業に従事するものもあるも其他當領沿岸に於て外國人の漁業差支なきや否やの問題は今日の處判明せず、尤も「バツク、ババン」「トートク」等に於ては地方官の黙認を経て漁業に従事する日本人あり、當領政府は目下漁業規定の制定中に屬し本年中には多分發布せらるゝに至るべければ黙認の下に従事するものは兎に角其他に於ける漁業希望者は右制定を俟つて開始するを安全とす

(四) 遺産の事

正當相續人又は近親の者なき死亡者ありたるときは其遺産は *Wessen Boedelkamer* にて管理精算し殘額は煩雜なる手續を履みたる上當館にて受取り次で在本邦遺族に送付することゝなり居れり、然れども遺産管理局に於ては右死亡者の債權債務を精査する爲め公告等をなし決算までには意外の長時日を要し又之に要する費用少からず然るに普通の場合に於て遺族は多額の遺産を期待し實際送金額の少きを見て死亡者の知人等

に對し疑を挿み來るもの甚だ多し、或は管理局より殆んど價值なき所有品の回送を受け當館に於ては止むなく其運送費を自辨せざるを得ざる場合等あり勿論斯る場合に於ては遺族より之に要せし費用を回收するの見込なきに付き今後死亡者ありたるときは右の事情含み置かれたし

(五)入國の事

外國人の入國に付ては爪哇に入るものと外領諸地に上陸するものと稍々手續を異にし爪哇にありては「タンジョン、ブリオク」「スマラン」及「スラバヤ」の三港に限り上陸を許さるゝものにして下船前、下船監理官(港長又は港務員)より上陸許可證を受け其際免許料二十五盾を納入すべきものとす、上陸許可後三日以内に移民局に出頭し入國免狀と引換ふべきものなれども自活に途なきもの又は公安に害あるものと認めらるゝものは何國人たりと雖も入國を拒絶する事となり居れり

右日本人入國の際に於ける自活能否の手心に付ては當館より隨時其筋に交渉する所あり、此儀に關しては標準を歐洲人同様ならざる様致しあるも尙入國者が移民官に對し

充分自活の途を有する事を辯明し得る用意肝要なり、入國許可證は二ケ年間有効にして期限に至れば更に一ケ年づゝ二回延長を求むることを得、右許可證は外領地に於ても効力を有す。外領入國條件は稍々寛にして免許料の納付を要せず(ボルネオ西岸州に於ては爪哇に於けると略同様の規定を布けり)而して其有効期間は六ヶ月とす爪哇に入國後六ヶ月以内に退去するものは曩に納付したる免許料二十五盾の拂戻を求め得べし、又船舶の通し切符若くは往復切符を有するものは入國條例の拘束を受けず自由に爪哇内地を旅行することを得、醜業婦は入國を許されず

(六)住民權の事

當領に於て苟も永久的に栽培其他の事業に従事せんと欲せば先づ住民權を獲得するを要す、住民權を得んと欲する者は總督宛の願書を認め之に入國免狀を添て居住地を管轄する地方廳を経て總督に申請するものとす、然れども公安の爲め若くは出願人に於て充分生活上の途を有せずと認むるときは總督は右申請を拒絶するの自由を有し、而して該拒絶に會ひたる場合は退去を要するものなり、即ち住民權を得る最も確たる途

は一定の住所及適當の収入を有し又租税を負担し素行善良なる事之れなり

(七) 居住營業事

帝國臣民が當領内各地に旅行し又は滞在の自由を有することは日蘭通商條約第一條の規定する處なるも右は當領國法に遵由を要するものたることを忘るべからず即ち内國臣民又は最惠國臣民一般に適用さるゝ規程は無論遵守すべきものにして國法の制限を犯してまでも旅行し又は居住し得る次第にはあらず、在留民中往々之を誤解し地方官憲の措置を云々し來るものあれども是等は多く條約又は國法の存在を知らざるか又は適當の手續を取らざるに歸因す、或は歐洲人對等者の旅行制限區域に對し苦情を申立て來るものなきにしもあらざるも开は別問題として考察するを要す、然れども條約の保障あるにも拘らず他の正當の理由もなくして他外國人に許し獨り日本人に許さざるが如き不公平なる取扱ある場合には躊躇なく事情を詳報せらるべし

支那人、亞拉比亞人等は歐洲人對等者にあらず彼等の有する特種便宜(他面より見れば不利益)を日本人が享有せんとするは又別個の問題なり

(八) 醜業者の事

醜業者は當領刑法に依り處罰せらるべし、醜業者取締の件に關しては去る大正二年八月十八日付並に本年四月十二日付管内各日本人團宛當館通告の通り

(九) 醫師及齒科醫の事

當領に於て醫師及齒科醫を營むには先づ當領規定の試験に及第するを要す

(十) 人事に關する諸届の事(領事館宛の届書)

(A) 在留届、當領内に在留する帝國臣民は「外國在留帝國臣民登録規則」に従ひ其在留地到着後七日以内に氏名(片假名にて振假名を付すべし)本籍、族稱、生年月日、職業、在留地、到着月日、旅券番號を記載したる在留届を當館に提出せられたし右届出なき在留者に對しては在留證明其他一切の證明を拒否することあるべし追て別封を以て送付したる「カード」赤白合計二枚在留届に代用するを得るものにして今後新に到來、在留届提出の要ある際には男子は赤色「カード」女子は白色「カード」各欄に夫々記入の上當館宛御送付あれば其を以て在留届と認むべし

(B) 轉住、歸國届、當領に在住者にして轉住したる場合には直ちに其旨當館に届出られたく又歸國の場合には 一時的たると永久的たるとを問はず歸國届を提出せらるべし

(C) 出生届、當領在留者間に出生ありたる場合には出生後十四日以内に當館に出生届 同文二通提出すべし

(D) 私生子認知届、當領在留者にして私生子を認知せんとする場合には當館私生子認知届同文三通提出すべし

(E) 婚姻届、當領在留者間に婚姻ありたる場合には婚姻届同文三通當館に提出すべし

(F) 死亡届、當領在留者間に死亡者ありたる場合には届出義務者が死亡の事實を知りたる日より七日以内に死亡届同文二通を作製し之に醫師の診断書若くば検案書又は警察官の檢視調書の謄本を添付して當館に届出づると同時に當該和蘭地方官憲にも必ず其旨届出で且つ日蘭領事條約第十二條に依り同地方戸籍官吏の發給したる死亡證明書謄本を當館に送附する様依頼せらるべし

(G) 諸届書認め方其他注意事項、總て戸籍法に據る諸届書には略字又は符號を用ひず字畫明瞭なることを要し年月日を記載するには一二三十の文字を用ひずして壹貳參拾の文字を用ふることを要す、文字は之を改竄することを得ず

當館に提出したる前記戸籍に關する諸届書は外務省を經由して當該届出人の本籍地市町村役場に回送せらるものなれば當館に右届出をなしたるものは更に其本籍地市町村役場に届出づるの必要なきものとす、是等戸籍に關する諸届は戸籍法上必ずして當館を經由するの必要なきものにして各届出人に於て直接其本籍地市町村役場に送付するも差支なし但し右の場合には當館に對しては其旨を付記し同種の届一通を提出すべし、當館に於ては事務簡捷上在留者の可成此の方法を採られんこと希望す
在留證明願其他の證明願は二通宛提出すべし

(十一) 旅券の事

外國旅券は身分證明其他の場合に於て最も必要なるものなるに拘はらず本邦出發前海外旅券の下附を受けず、當領到着後和蘭官憲より旅券の閱覽を要求せられ已むを得ず

當館に旅券下附を出願するものあるも右は取締上甚だ不都合の次第に付き向後は渡航前必ず之を受領せらるべく然らざる者に對しては當館に於て旅券下附を拒否することあるべし、旅券の下附を請ふ者は書面に姓名、本籍、族稱、生年月日、職業、旅行地名、旅行目的を認め之に戸籍謄本を添付出願すべし
旅券を紛失又は發見したる場合は其旨直に届出べし

(十二) 徴兵猶豫の事

徴兵令第二十三條第二項に依り當領内に在留する徴兵適齡者は本人の願により徴集を猶豫せらるべきも右出願には徴兵事務條例第五十五條に依り本領事より在留の證明を受け之を徴兵猶豫願に添付し市町村長の奥書證印を得たる上毎年四月十五日迄に當該聯隊區徴兵官に提出すべきものなり

徴兵猶豫願出に要する在留證明書は其年一月一日以後現住者に發給す、即ち一月一日以前の日付に係る證明願書に對しては證明を與へざるべし該證明は前記在留届を提出したるものにして且旅券を有する者にのみ發給し届出を怠り若くは券を有せざるも

のに對てしは其證明を拒否することあるべし

第二、蘭領東印度、商標條例摘要

蘭領東印度には明治二十七年以來商標條例施行せられ（意匠登録及專賣特許の條例なし）之れに依る商標權の存續期間は廿ヶ年にして（尙ほ同一期間の延長を出願する事を得）登録済の商標を附したる一定の商品は登録者の名義を以てするに非ざれば絶対に當地方に輸入を許さず、然るに現行商標條例に依れば總ての商標は其貼付すべき商品の製造者に非すと雖も當領に營業所又は商關係を有し該商品を最初に輸入したる者又は萬國工業所有權保護同盟條約加入國に居住し若くは營業所を有して一定期間内に當領司法部（蘭國特許支局）に出願する時は均等に其保護を享くることゝなれり

蘭領東印度在留の外國商人中には法文の不備に乘じ商標の正當所有者に非ずして最初の輸入者たる名義の下に他人の商標を登録し以て其輸入を獨占する者あり、故に現在當領輸入日本品にして本邦内地に商標權を有する者又は其代理人の知らざる間に他人が當領に其登録を爲せるに依り已むを得ず其者の名義を利用して輸入を爲せるもの尠

からざりしも近年日本産商品にして登録を受くる者漸次其数を増加し就中登録数の最も多きは賣藥、燐寸、木綿織物なりと云ふ
登録出願に要する諸費用左の如し

- 一、登録手数料 一 盾
 - 一、特許代理人鑑定料 廿五 盾
 - 一、特許代理人出願手数料 十 盾
 - 一、商標木版又は銅版新調費 五盾乃至十盾
 - 一、登録願書用紙正副二通貼付収入印紙 三 盾
- 第三、蘭領東印度關稅定率表(輸入稅)
輸入稅には從量稅率に依り課するものと從價稅率に依るものとの別あり從價稅率に依るもの左の如し

(一) 稅金六分を課するもの
燐 寸
綿織物(木綿、綿毛交織布、綿入毛布
袋及其他の包裝布)

織 糸
時 計
火 藥
銃 器
寫 眞 器
陶 器
家 具(置ランプの類但し電燈又は瓦斯用を除く)
土 器

絹製品(紐、リボン、タイプ、レース
其他絹物にして別に掲記せざるもの
及天鵞絨但し絹のみを以て製したる
ものに非ざれば木綿織物と同視す)

小間物
亞麻仁油
文房具(寫字及製圖用材料は紙を除く
又木匡付の版行書及腐蝕圖は他に特
掲なき家具として課稅す)
(二) 稅金八分を課するもの
塗 料(液体のもの、罐、箱、罐入のもの)
(三) 稅金一割を課するもの
革類及其製品
穀 粉
寶石類
亞 鉛
鐵 (別に掲記せざる鐵器、鑄鐵器)

及鍊鐵器具)

硝子類

綿製品(麻又は羊毛其他の纖維を以て製したるものにして別に揚記せざるもの「タイプ」「リボン」「レイス」細紐刺繡を含む)

鋼鐵類

紙類(壁紙、樂譜用紙、罫紙、白紙、手帖其他)

錫製品

亞鉛製品(色彩其他の塗料を施したるを否とを問はず)

鉛製品

銅製品(着色及鍍金の有無を問はず、

青銅製品眞鍮製品にして別に揚記せざるもの)

食酢

鹹魚(箱、罎、罐等の類に詰めざるもの)

乾魚(右同)

(四)税金一割二分を課するもの

金銀箔

金銀製品(レース、紐、糸)

香水(酒精を含まざるもの)

衣服(織物又は編物)

飲食品類

(五)無税品

椰子及椰子油

樹脂

米(粃を去りたるを否とを問はず)

種子

ロープ類

材木(造船家用組材但し檣、橈、丸太等を含む)

煉瓦(床敷、屋根其他建築用)

石炭

帆布

肥料

石灰

書籍類(木匡付の版行書及腐蝕圖は他に特掲なき家具として課税す)

繪畫

セメント

植木類

家畜

氷

金銀塊

鉛(鑛石及板)

鋼鐵(條、竿、板、鎖、鐵道用鋼鐵軌車軸其他鐵道用器具)

機械及機關(工業用、農具、學術用、器具及同部分品、但部分品は税關吏の認定を要す)

繪畫

書籍類

151

(六)従量税率に依るもの

茶	一基瓦	〇、二五 ^盾
煙草(喫煙用及嗅煙草)	百基瓦	八、〇〇
同 (葉巻煙草及紙巻煙草)	同	五〇、〇〇
沸騰水	百瓶	四、六〇
麥酒(樽詰)	一ヘクトール	五、二五
同 (罐詰)	同	六、〇〇
食鹽(食卓用各種、岩鹽をも含む、但し「タバニユール」地方駐劄管區「アトゼー」政府の「シングル」管内及其附屬地を除く)	百基瓦	一一、〇〇
同 (上記以外のもの、上記以外の地方)	同	六、五〇
同 (工業用に使用するもの)	同	二、〇〇
阿片	一基瓦	四五〇、〇〇

第四、英領北「ボルネオ」諸規定

(A)入國條例摘要(大正五年八月發布)

第一條 北「ボルネオ」に入國せんとする者は「ウエストン」「ゼツセルトン」「サンダカ」「タワオ」「メンバルク」「クダツ」「ラハダツ」の七港に限り其上陸を許可す

第二條 入國者は入國許可證を所持するを要す

第三條 入國許可證は左記區別により其所定の書類を提示せる者に限り附與す

- (一)三等船客は領事又は相當官憲の發給せる本人の氏名、年齢、住所、職業、旅行先地名、旅行船名及其出帆月日を記入し且つ剝脱及代用を防止し得べき方法に依り寫眞を貼付したる國籍證書

(二)前項以外の船客は右の外に英國領事若くは其他相當官憲の查證あるを要す

第五條 第二條の入國許可證は「ゼツセルトン」及「サンダカン」の兩地にありては警察局長若くは同局長の委任を受けたる官吏之を發給し其他の各港にては税關長之を發給す、但右諸官吏は場合によりて入國許可證の發給を拒絶することを得、此の場合申請人は拒絶を理由として訴願することを得るものとす

(B) 土地租借規程摘要(一九一三年十月十六日公布、土地法令)

租借期間は九百九十九年以内の規定なるも多くは九十九年間を普通とせり

租借者には地券を交附し之に普通条件と特別条件との二種あり而して普通条件は百英町未満の土地を租借する場合に適用し特別条件は大面積の土地を租借する場合に適用す

百英町未満の土地を租借するには總督の意見に依りて決定せらるゝものにして地券下附の日より三ヶ年以内に全地積の開墾を了らざるべからず

百英町以下の土地を租借する場合には在倫敦本社重役會議の認可を受くべきものにして百英町以上六百四十英町(一平方哩)以内の土地は毎年全地積の五分の一以上を開墾せざるべからず

以上如何なる場合に於ても地券下付の日より六ヶ月以内に開墾に着手すべきものとす租借土地の位置、地質及生産物の價值によりて其租借料及公課金は大に異り場所によりては殆んど無料に近き所あり、古々椰子栽培地として租借する者に對しては無料を

以て下付し租借の當初より五ヶ年間又は收穫を得る迄は一ヶ年一英町に付僅に五十仙の地租を課し五年後に至り收穫ある年より一英町に付二弗五十仙の公課金を徴收す米作の目的を以て租借する者には當初三ヶ年間は地租及公課金を免じて土地の使用を許可し、且つ公課金の納付には必ずしも一時に納むるを要せず六ヶ月以内に於て分納を許さる、土地を租借する者は其測量費用を負擔せざるべからず

租借地測量費賦課率

一英町以下	三、〇〇 <small>弗</small>
二英町	四、二五
三同	五、五〇
四同	六、七五
五同	八、〇〇
六同	九、一〇
以上廿五英町迄一英町を増す毎に	一、一〇

廿五英町	三〇、〇〇
以上一英町を増す毎に	一、〇〇
五十英町	五五、〇〇
以上一英町を増す毎に	七〇
百英町	一〇〇、〇〇
以上一英町を増す毎に	七〇
二百五十英町	二〇五、〇〇
以上一英町を増す毎に	五〇
五百英町	三三〇、〇〇
以上一英町を増す毎に	四三
千英町	五〇五、〇〇
以上一英町を増す毎に	三〇

右の外各租借地には必ず境界標を設置せざるべからず、之を設置するには總督の任命

せる測量者と當該地方官及境界標設置者との意見に依り地位及個數を定め之に要する費用は租借者の負擔とす

(C) 移民(開墾に要する労働者)に就て

北「ボルネオ」政府は領内の開拓に銳意し容易に土地の租借を許し且つ労働者を誘致して成るべく企業家の事業を安全ならしむる爲め千九百十五年労働者契約條例を改正し契約期間を三百日とし期間満了後と雖も労働者が雇主に對する負債を償却し了らざる時は十八ヶ月以内に於て引續き償却し終るまで就役の責任を負はしむることとせり

北「ボルネオ」に於ける労働者は支那人、印度人、馬來人、瓜哇人及臺灣人等にして何れも海路の便に依り容易に移入することを得、右の内最も移動し易きは印度人、馬來人にして瓜哇人之に次ぎ支那人は勤勉にして最も安全なり、總じて獨身者は移動し易きものなれば成るべく家族同伴者を募集するを得策とす

移民の衛生に就き企業家の最も注意を要するは「マラリヤ」熱病及脚氣病なるが近年各地の衛生も漸次に改良せられ其罹病者及死亡數は著しく減少せりと云ふ「タワオ」に於

ける久原農園の如きは既に病院の設備あり

要するに英領北「ボルネオ」は今尙ほ未開の地に屬し土地豊饒にして産物頗る豊富なるに加ふるに「ボルネオ」政府は領内開發に爲め外國人の投資、移住を歓迎するを以て土地は極めて容易に而も小資本を以て租借せられ、氣候亦温和にして最も吾本人の居住賃適し、我國とは距離近くして交通も利なれば今後我同胞の海外發展には絶好の新天地と云ふべきなり

第五、日本南洋間定期船及運表賃

(A)大阪商船株式會社(瓜哇線)

一ヶ月一回 毎月一日大阪發

往航	大阪發	毎月	一日
神戸發			三日
門司發			五日
基隆發			十日

厦門發	十一月
香港發	十三日

「マニラ」「サンダカン」(又ハ「タワオ」)「バタビヤ」(廿六日着)「サマラン」「スラバヤ」行

復航 「スラバヤ」發 翌月十八日

「マカツサー」着 廿日
發 廿二日

「サンダカン」香港、打狗、基隆を経て神戸歸着、翌々月十五日

瓜哇往復に二月半を要す

就航船、浙江丸、江蘇丸、桃園丸、使用汽船は時に依り變更することあり
運賃(大正六年七月實施)

往航

神戸	一等	二	三	三六	五〇	七〇	一〇〇	一三五	一三五	一八〇
	二等	三	二	一六	二三	三三	三八	三八	三八	五二

戦前には瓜哇、支那、日本線(Java China Japan line)一週一回、瓜哇日本線(Java Japan line)四週一回等ありしも目下殆んど廢航の有様なり

第六、瓜哇旅行案内

(A) 出發前の用意

一、旅行免狀、海外渡航者は必ず旅券(Pass Book)を受有することを要する勿論なれども蘭領東印度に於ては勞働を目的とする者の外商用、視察、觀光等の爲めに渡航するには特に旅券を携帯するに及ばず、然れども瓜哇に於て上陸の際には入國手續を要し且つ旅行中事故を生せし場合等の爲め何人も旅券を受有し置くを可とす
旅券下附出願の手續きは一定の願書に戸籍謄本其他必要の書類を添付し本籍地を管轄する府縣廳に出願するときは規定の手續きを経て外務大臣より下付せらるゝものにして詳細は本籍地の市町村役場にて照會すべし

二、携帯すべき物

(イ) 洋服は瓜哇に於ては大抵の場合白「リンネル」詰襟にて濟し得る故、詰襟「カラ

ー」を用ひず「ボタン」止めを便とす六、七着背廣夏服二着もあれば充分ならん、但し總督等の夜會に招待さるゝ時は必ず禮服を要す

(ロ) 「シャツ」は縮又は「メリヤス」等にて上下各十着

(ハ) 靴下一打、「ハンカチーフ」二打

(ニ) 毛布一枚、浴衣二枚、腹巻二枚

(ホ) 化粧道具一切

(ヘ) 「レインコート」(輕きもの)一枚

(ト) 船内に於て和服用を望む人は和服二着羽織を要すれども袴の必要なし

(チ) 帽子は「ヘルメット」を最も可とす

(リ) 南洋地方に於ては開業醫の診察料及藥價頗る高きが故に普通一般に必要な藥品は内地より携帯するを可とす、左に最も必要なものを示せば

「マラリヤ」の藥及豫防藥として「キニーチ」丸又は「キニーチ」錠

脚氣病の爲めに下劑

胃腸病藥

清涼劑等

但し日本の賣藥は南洋到る所の日本雜貨店にあり

(又)南洋に關する書籍及馬來語會話一冊

(ル)銃器、刀劍、火藥、強酒の類は輸入禁制品に付携帯すべからず

注意 南洋を往復するには少くとも二ヶ月半を要する故、歸國の際秋期又は冬期となる場合には冬物をも用意し置くことを忘るべからず

(B)乗 船

一、大阪商船及南洋郵船の汽船には各船共南洋事情に通せし事務員を置き瓜哇に於ける船客上陸の手續き等其他船客の便宜を取計らひ居れば初め渡航する者は日本船に頼るを便利とす

二、每航海乗船客多數にして常に滿員の有様なれば乗船切符は成るべく早くより買求め置くを要す

三、瓜哇に於ける上陸免許料(普通入國税)と稱す廿五盾は日本金に換算して乗船切符買求めの際運賃と共に船會社に預け置き、本船瓜哇入港の時には本船に於て各船客の入國税を取纏めて下船監督官(普通移民官と稱す)に納入するを慣例とせり、但し瓜哇金と日本金との換算率の相違により過不足を生ぜし時は瓜哇着港の上精算す

四、觀光又は商業視察、産業取調べ等にして短期間の旅行者は往復切符を買求め置く時は瓜哇に於て上陸の際官廳の手續を要せず甚だ便利なり、大阪商船會社汽船にありては瓜哇碇泊(「バタビヤ」着より「スラバヤ」發まで)廿二日間あり、南洋郵船に於ては同(「バタビヤ」着より「サマラン」發まで)十八日間あり瓜哇内地旅行には右碇泊期間を利用すれば充分なりとす、但し往復切符の通用期間は何れも六ヶ月間なるを以て必要に應じ瓜哇に二三ヶ月間滞在の上次船にて歸國するも差支なし

(C)上 陸

一、英領北「ホルチオ」に於ては旅客上陸に際し單に旅行免狀を取調ぶるのみにて何等煩雜なる手數を要せず、携帶品は上陸の際税關に於て検査せらる

二、瓜哇に於ては本船入港と同時に移民官來船し船内に於て各船客の旅行免狀等を取調べ入國税を徴收し直ちに上陸許可證を交付す。此時移民官より直接本人に旅行の目的、行先地等を尋ぬる事あり(英語を用ふ)言語不通の者は本船事務員に通辯を依頼するを得

但し往復切符又は通し切符を所持する者は右の手數を要せず

入國手續は大正七年より少しく改正せられ一、二等船客に對しては上陸許可證を省き船内に於て直ちに移民官より入國免狀を下付す、從つて左記第五項の手數を要せず、又三等船客及甲板旅客は從前と等しき手續を要し且つ船内に於て移民官より携帶品を検査せらる(即ち三等船客は移民官と税關と二重に手荷物of 検査を受くる譯なり)故に瓜哇入國に際しては一、二等船客と三等船客とは其手續きに甚だしき差違を生じ一、二等に乗船すれば至つて簡單に手續を了す

三、「バタビヤ」上陸の際には本船は棧橋に繋留するを以て手荷物は一時棧橋の上に並べ置く時は税關官吏巡回し來り之を検査す、又は税關まで運び行きて之が検査を受

くべし、「サマラン」「スラバキ」に於ては本船は錨泊なれば小蒸汽又は通船を以て一定の場所に上陸し税關の検査を受くるものとす、阿片等の輸入禁制品を携帶せざれば日本人に對しては比較的寛大なり

一、二等船客及三等船客の内日本人客のみは手荷物も共に船會社の小蒸汽を以て送迎す

四寫眞機を携帶して上陸するときは一、時輸入税を納付し置き歸船の際税關に其領收證を提出して前に納入せし税金の拂戻を請求することを得

五、旅客は上陸後三日以内に地方廳(Assistant Residents Office)に出頭して上陸許可證と引換に内地旅行券の下付を受くるを要す、「ウエルテフ、レーデン」「バタビヤ市」に於ける「チーデルランドホテル」にありては内地旅行券を「ホテル」の事務所にて下付するを以て土地不案内なる旅行者には甚だ便利なり(旅行券下付手數料一盾五十仙)

但し一、二等船客は右の手數を要せず(第二項参照)

六、「バタビヤ」に於ける名高き「ホテル」は「チーデルランド、ホテル」及び「インデスホテル」(共に「ウエルテフレードン」にして外に「バタビヤ」市に日本人旅館、日本館あり)

七、瓜哇到着後六ヶ月以内に退去する者は「タンジョン、プリオク」「サマラン」又は「スラバヤ」(右三港に限る)に於て乗船の際移民官に入國免狀を提出し下船の際に納付せし料金(廿五盾)の拂戻を受くべし

八、通し切符又は往復切符を所持する者は下船上陸に際し一切官廳の手續を要せず例へば「マカツサー」行の切符を買ひ商船會社又は南洋郵船の汽船に乗船し本船瓜哇各港碇泊中自由に上陸して瓜哇内地を旅行し、上陸せし港又は瓜哇最後の港なる「スラバヤ」より再び本船に乗船するか、或は又最初往復切符を求め置き瓜哇視察の上再び同船又は次船に乗船して瓜哇を退去する時は何等の手續を要せずして自由に瓜哇内地を旅行することを得、故に短期間(六ヶ月以内)の旅行なれば往復切符を買求むるを便とす

九、手荷物の運搬賃は本船より通船(カノー)に乘じ税關波止場まで運ばしむるに普通一個五十錢餘にして波止場又は停車場より旅館に至るには一個十錢見當とす、土人苦力(クーリ)は不慣の旅行者に對しては實に法外なる運搬賃を請求するを以て豫め定め置くか又は賃金を定めずして運ばしめ旅館に着したる時、給仕(ジョンゴース)に相當賃金を與へしむるを可とす、又停車場には常に「ホテル」の名を記せる腕章を附したる客引來り居れば携帯の手荷物は其數を示して之に渡し直ちに馬車に乘じて「ホテル」に至れば手荷物は間違なく客引によりて各自の定まりたる室に運ばるゝを以て自ら馬車を雇ふ等の煩はしき手數を要せず

(D)瓜哇に於ける注意事項

- 一、旅行中は行く先々の「ホテル」に豫め打電し置くを便なりとす
- 二、瓜哇に於ては一般に午前六時前後に起床し給仕(ジョンゴース)が「ゾーエランダ」に運び來る珈琲を喫したる後水浴をなし、午前八時頃に朝食を喫して九時より用務を辨じ、午後一時に晝食を取り、午後二時より四時迄は午睡を貪り夕刻に至れば馬

車或は自動車を驅つて並木生ひ繋れる公園又は郊外に遊びて一日の勞を慰し、夜は八時頃に晚餐を終へ十時に至り就床するを普通とす

三、蘭領諸島は日中酷熱甚しきが故に官廳は勿論銀行、諸會社、商店等にありても其營業時間は午前九時より正午十二時迄と午後四時より六時頃迄にして晝食後は午睡の爲め扉を閉し一切事務を掌らざるの習慣なるを以て總ての用務は必ず午前中處辨することに注意せざるべからず、但し亞拉比西人及支那人の小商店のみは午睡せざるもの多し

四、一般訪問の場合其他食堂に出るに際しても服裝は至つて簡單にして常に白の詰襟にて可なり、蘭領内に於ては一般に質素且つ簡易にして歐米に於けるが如く流行を追ひ服裝を云々するが如きことなり、且つ熱帯生活上禮式に拘泥せざるものゝ如し但し「カーキ」色服は最も下等のものとせらるゝを以て決して用ふべからず

五、洋服及下着類は流行等の爲め汚れ易きを以て「ホテル」に着きなば直ちに給仕を呼び洗濯物の員數を調べ出來上りに要する日數を定めて洗濯屋に托すべし、普通一日

間の餘裕あらば充分にして早やきものは本日午後には渡せば翌朝出立迄に持參す、賃金は洋服類「ハンカチーフ」靴下の別なく大小共一枚十錢を普通とす

六、蘭領印度に於ては一般土人並に支那人に對しては馬來語の外一切通用せず、汽車又は「ホテル」に於ては全部土人の之を使用し英語を解せざるを以て不便を感じることも甚だ多し、但し馬來語は至つて簡單にして習得し易き言葉なれば旅行者は出發前豫め獨習書を用意し日常必要な用語を記憶し置かば頗る便利なり、且つ普通必要語は之を手帳に書き抜き旅行中は常に携帶するを要す、然れども中流以上の商人官吏にありては英佛獨語等を解する者多く此等に對しては勿論英語又は蘭語を用ふるを可とす、馬來語を用ふる時は相手に輕侮さるゝの傾向ありとて馬來語に通せる人にも場合によりては殊更に英語のみを用ふる人あり

七、衛生上の注意

(イ) 暴飲暴食を慎み過度の勞働をなさざること

(ロ) 胃腸病に冒され易きを以て食ひ慣れざる食物及果物を過食せざること